

---

# パンツ脱いだら通報された

烈火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パンツ脱いだら通報された

### 【Zコード】

Z6663Y

### 【作者名】

烈火

### 【あらすじ】

俺はただ頭にパンツをかぶりながら散歩をしていただけなのに市民の平和を守るためとかなんとか言つちやつて、市民である俺を逮捕するとはこれいかに。あれだけ?俺自身は無職だけど幼馴染なんて凄いんだからな。19歳になつても少女で押し通してる凄い人なんだからな。……まったく、管理局の人は話も聞かないのか……。これで逮捕されるの何回目だよ。

## 1・俺、無職

「時というものは残酷なものである。9歳で口リロリでツインテールで天使のような幼馴染も昔は“魔法少女”といわれみんなに可愛がられたものだ。バリージャケットだって小学校の制服を参考にしたらしく9歳という年齢も相まってそれはそれは可愛らしいものであった。しかしどうだろう……10年の歳月が過ぎ、その幼馴染も随分とかわってしまった。あの純粋無垢だった幼馴染はいまは19歳にもなるのにいまだに“少女”と信じて疑わないらしい。本当に俺と3年間高校に通つたのかと疑いたくなつてくるほどである。髪型にしてもそつだ、いつもはサイドテールにしているのにいじぞといふときにはツインテール。確かにツインテールはかなりの萌えポイントであるがいがなものかと思う。極めつけはあのバリアジャケットである。あれつていまだに小学校の頃の制服をモデルにしているみたいだし正直コスプレにしかみえない。いいのか、管理局。おまえらのエースこれでいいのか？」

「二ノ一の人には言われたくないんだけど……」「

一人きびしく家でゲームをしながら、幼馴染のことについて考えているどじょうやら口から出でていたらしくたつたいましがた帰ってきたであろう高町なのはに聞こえてしまった。ここ、俺の部屋なんだけど……

「どうか、この家は私とフェイドちゃんが一緒に借りたんだからね。あまり変なことしないでね?」

「変なことって、なのはやフェイドの下着を洗濯すると見せかけて実は俺の部屋に隠してるとかのこと?」

「ちよつとまつて、いまの議題について3時間ほど話しえぬ」

「オーライオーライ、まずはその魔力弾を消してくれ」

ちよつとした冗談のつもりだったのだが、意外になのはは怒つてきた。

「もつ……そこのう冗談は禁止だつて言つたでしょ？　まつたく、高校を卒業してもかわらないんだから……」

「19歳にもなつていまだにいちごパンツ履こうとする奴に言われたくないよ」

「ちよつとなんで知つてるのッ…？」

なんかすんじい勢いでこちらに近寄りその情報を流したのは誰かと問い合わせてくる。地味に首が絞まつて痛いのですが……。それにいちごパンツの件なら桃子さんが嬉しそうに話してましたよ。

みなさんお察しかと思ひますか、この可愛らしい女性、高町なのはと俺は幼馴染である。俺の親となのはの親　士郎さんと桃子さんがとても仲がよかつたのである。その関係上、小さい頃から二人でよく遊んだり、なのはで遊んだりしていくいまもそういう関係が続いている。

「そついえばなのは、何しに来たんだ？　今日は19時に帰つてくるとメールがきたのを覚えてるんですけど」

「うん、その予定だつたんだけどちよつと帰りが遅くなりそうだから

うされを伝えようと囁いて、「

「そんなことでここまで、あいかわらずやることがすげえな。  
えへっと、帰りが遅くなるつていうとあれば、はやてが設立した部  
隊の」とへ。

「やつそつ、機動六課だよ。いつもスタートした少しの間だ  
けバタバタしそうなんだよな~」

「いつもバタバタしてるじやん。俺からバタなのなんて愛称で呼  
ばれてる」

「うむむ。まあ、やつこり」とからだからじゅつとの間だけ遅  
い帰りが続きそうなんだ。「めんねー、夕食用意しようとしてた  
んでしょ?」

「べ、べつにあんただちのために作らうなんて考えてないんだから  
ねッー?」

申し訳なさそうな顔でなほが謝りてくれるもんだからとうあえずツ  
ンデレ系で返してみることにした。穏やしこほどに無表情でこちらを見返している。ゾクゾクするぜ……！

「まあ、事情はわかつたよ。ほんじゃ、夜に食べても次の朝に胃  
がもたれないよつの夜食置いておくから適当にフロイトと食べてお  
いてくれ」

「ふふつ、ありがと。それじゃ私行つてくるね」

「あこよー」

なんだかわからないが笑顔でお礼を言われたあと、なのはは手を振りながら俺の部屋をあとにした。そして丁度、玄関が開いて閉じられる音を確認する。さてさて……スーパーにでもいって食材買つてこようかな。俺の分は適当にカツプ麺でいいや。一人分つて作るとなるとどうもやる気が沸いてこないんだよな。

10畳ほどのフローリング部屋に、ベットや本棚、クローゼット、机、パソコン、テレビなどの生活感あふれるものが並んでいる。クローゼットから適当に服を着てサイフをジーンズのポケットに突つこんでから部屋を出た。

「あ、そうだ」

部屋を出たといひだとあることを思い出して戻る。机に置いてある写真立ての中で静かに微笑んでいる女の子に向かつて優しく挨拶をした。

「行つてくるぜ、初 ミクちゃん」

ミクちゃん、無職だけど頑張るからね

## 1・俺、無職（後書き）

どもども、烈火です。 基本的に息抜き投稿にはなりますが、きっと仕上げていきたいと思います。

一話あたり2000文字くらいを目標にしてますのでせつくり読めるかと。

「しまった牛乳買つの忘れてた」

夕食の買い物も終わり、さつとカツプ麺を食つた俺はなのは達が帰るまでの間をゲームしながら過へしていった。画面内ではポーネールの女の子が頬を赤らめながら俺の名前を愛おしそうに呼んでいるところであつたのだが

「牛乳がないとなのはが怒るもんな。 どんなに頑張つたといふでフロイトの胸こは勝てない」というの。 あーでも行きたくないなー」

その場でべづべづすすること3分、とうあえずゲームをヤーブしてしようがなく牛乳を買つてへんじこした。 落ち度は自分にあるんだししようがなこよな。

「あ、そつだ。 いのひょっとこ仮面を装着していかないと

机の上に無造作に放り投げられていたひょっとこのお面をつける。 やうこえぱ昔はこれで泣いていたのはこ追いかけたつ。 ひょつといこのお面をついた俺は寝間着に黒のマートだけを羽織り家を出た。

このとき、素直に牛乳なんか買つてこなければあんなことにはならなかつたのに……

「あ、あのー、なのはさんー。」

「ふえ？」

ポツキーを食べながら仕事をやつていると、新人であるスバルが声をかけてきた。スバルは熱血という言葉がよく似合つボーアイシングな女の子だ。いまはまだ経験も足りないけど磨けば光る素質をもつていて、ちなみに私の直属の部下にもある。

「どうしたの、スバル。もしかして書類仕事でわからないことでもあったかな？」

「いえい……その……あの……」

やはり上司と喋るのは緊張するのかスバルはちょっとと聞こにくそうにしていた。その気持ちは私の体験してるからよくわかるよ。自分より立場が上の人や目上の人と話すときって緊張するもんね。

なのははスバルが何か言つまで優しくほほ笑んで見守ることにした。やがて意を決したようでスバルはその口で大きな声でとんでもない爆弾発言をなのはにかました。

「なのはさんとフロイトさんが男の人と同棲してて本当ですかつー？」

「ぶツー！」

思いもよらない発言になのはは瞳を飛ばした、といづか噴出した。

そして慌てたようにスバルの口を塞ぐか時既に遅し。その場で残つて仕事をしていいた面々は面食らつたような顔をしてなのはとフェイトのほうを交互にみていた。みるとフェイトのほうも驚きのあまり書類に「牛乳をこぼしたようで慌てて拭いでいる最中であつた。

「あのッ、本当なんですかなのはさんッ！ もしそうだとしたら私はどうすればいいんですか！？」

どうすればいいのかはこっちが教えてほしい。なのははそう思つた。一応、なのはの身内ならば彼のことを知つていいのだが……いかんせん此処はつい先日できたばかりの部隊であり、そんな周辺のことの話よりもまずは書類などを片付けることが優先だと思つていたのだが

「つて、ちょっとまって！ どうしてスバルがそんなこと知つてるの！？ 誰から聞いたの！？」

「そ、そうだよ！ 私もなのはも喋つてないんだからこの中に犯人はいるはずだよ！」

いちじ牛乳まみれになつた書類をドライヤーにかけながらフェイトはこの場で仕事をしていいた知人たちを振り返つた。

ヴィータ・シグナム・シャマル・ザフィーラ・はやて・リインフォースの計6人に視線を走らせるフェイト。そして一人の女性に目を止めた。

「は、はやてだね！」

「ちゅうとめりこなー!? なんでこわなつづりして決めつけられるんー!?

?」

「だつてはやはなのほのポッキー食べよひじて回避されてたじ  
やん

その一言でほやけの体が固まる。さういひの脚図ひがひだ。

「ちゅ、ちゅうとめりこーなー! いすれわかることなんやし、一年  
間ともに過ぐす仲間なんやで? やつぱりあまり秘密にするものど  
うかと思つて、私はスバルに言つたんや。いつもスバルがあんな  
行動に出でぬとは思つてなかつたんよ」

「ほんといふ?..」

「ほ、ほんといふー。」

立ち上がりながら必死に弁解するほやけ。なのほとフロイトはそ  
んなはやてに疑惑の目を向けながらもひとまず落ち着くために座る  
ことにした。

「まあ、こずれわかることだからここのほのこんだけビ……ねえ、  
フロイトちゃん」

「うそ……それはいいんだけど……」

一人して溜息を吐く。

そのとき、フロイトの袖を誰かが引っ張る。フロイトが引っ張ら  
れたほうに頭を向けると自分の子供もたちであるヒロオとキャラが

立っていた。

「どうしたの一人とも？」

「あのフロイトさん。もしかしてひょっとこの人のことですか？」

キヤロがそう聞いてくる。

「えーっと、うん。ひょっとこのせんだね」

苦笑いしながら答えるフロイト。確かに自分が高校生のときに一人とも別々に彼に合わせたんだつたつ。彼は『宇宙一カッコイイ俺が会いにいったらその子たちが惚れてしまつではないかっ』とかなんとかいいながら、そばに置いてあつたひょっとこのお面をかぶつて会いにいつたんだ。それが一人にも受けたのを覚えている。意外と彼って子どもには優しいところがあるんだよね。そういうその他にも思い返せばいろんなことが

「僕もひょっとこの人に女の子がいっぽいでるゲームをもらつたことは覚えてますよ」

「わたしはメイド服をもらつたこと覚えています」

いろんな悪夢よみがえつてくる

そう、確かに彼は渡していた。もちろんメイド服は私が回収、ゲームのほうはその場でたたき折つたことを覚えている。

『おいおい……そんな男大丈夫なのか？』

どこからかそんな声が聞こえてくる。……そして言に返せない自分が悲しい。というかもつと言つてしましい、あわよくば誰かに説教をお願いしたい。お兄ちゃんとはなんだかんだで仲がいいし、ゴーノに至つてはショットカツメーラーしてるみたいだし。母さんはお買い物のまで一緒にいく始末。ほんと、誰かに止めてもらいたい。

とつあえず、ぞわぞわしたしたみんなを落ち着かせるためになはと一人で説得してみよう。

フロイトは皿配せでなのはに会図じて、みんなに着席を促した。

「君、その手に持つているグラを渡しなさい」

「やうやうてクンカクンカする氣だらけ。貴様に嗅がせる匂いではない！去れ」

迂闊だった……。あのとき、家を出るときは気付くべれであった。

フロイトのグラを装着してたことを

何かがおかしいと思つていた。まず店内に入つてから他の客が俺のことを露骨に避けていた。そして店員もどこかに連絡をしていたのだが……もちまえのポジティブさで地下アイドル（大嘘）の俺が来たことで騒いでるのかと思ふきや……まさか管理職員のおつさんに通報していたとはな。やることがえげつないぜ

「君ね、いまの自分の状況わかってる？俺も捕まえたくないの。

今月で君の「」と何回捕まえたと思つたんの？　「いや、俺と君が職務質問するの何回か知ってる。今月で10回だよ。なんど3日で1回はお前のふざけたひょいといお面を見なきゃいけないのさ」

「奇遇ですね、俺もなんど3日で1回の割合でおつと密室で過「」せなければいけないのかどうかと想つていたんですよ」

「それは俺だつて同じだよ。いまからお姉ちゃんたちと遊ぶんだからやつせとい」と

おつとんは溜息をつきながら俺のほうにじりづいてくる。

そもそもなぜ俺がこんな日に会わなければいけないのか？　俺はひょつとこのお面をつけて黒のコートを羽織つて、間違えてフロイトのブリーフをつけて牛乳を買ってにきただけなのに。

おつとんの足に哈わせておつらも下がつてこくと、電柱のところに不審者の張り紙が貼つてあった。

『不審者に注意！　黒のコートを羽織り、奇天烈なお面をかぶつた下着泥棒が多く発しておつます！　住民の皆様はみつけたら「」の番号まで「」連絡お願いします！』

「ほー、なるほどね。こんなところに同志がいるとはな。もともと下着泥棒はしないけど」

そして「」のせいで俺はおつとんと密室で夜を過ごすことになる

んだな。

俺は名前も知らない、顔も知らない相手に向かって呪いをかけることにした。

## 2・ちよつといじ（後書き）

あのふざけた顔が結構好きです

### 3・おつさんと過ぐる夜

「はーい、それじゃ椅子に座つてー」

健闘むなしくおつさんに捕まつた俺は交番へやつてきた。そこでおつさんと二人きり。みなさん、ちょっとだけ考えてほしい。

深夜におつさんと二人きりだぞ？ なにか間違いが起こるにちがない。……そう、いつもは俺に冷たい態度をとるおつさんだが深夜の密室といつ魅惑増量世界によつてその皮を脱いでしまうわけだ。

「あのな……いつもはお前に冷たい態度をとつてるんだけどよ……」

「ちよ、まじよ。俺ら男同士なんだぜ……？」

「そんなことわかつてゐ……！ だけど、俺のこの胸の高鳴りは抑えられないんだよ！」

「おつさん……！」

「……今日はまた随分と頭がおかしいな。 どした、なにか嫌なことでもあつたか？」

おつさんが菩薩のようなほほ笑みでこちらをみていた。 なんか死にたくなつてくる。

「いえ、持病が発症しまして。 もう大丈夫です」

「やうか。 まあ若いときは色々あるもんだからな。 恋しかり友

情しかり

「おっさんが言ひとキモイですね。やつこえば、おっさんは結婚しましたよね？ 娘さんもいた気がするんですが」

とりあえず話題をそらしてなのはたちが帰つてくるまでの間、退屈しきれにおっさんと話しかける」と。

「まあな、これでも結婚してるわ。娘は一人いる。長女が16歳で次女が7歳だ」

「離れますね。でも長女はいい年ですから恋人の一人や二人いるんじゃないですか？」

「やつぱお前もやつ思つだろ！..」

いきなりおっさんが身を乗り出しながら「ひばりに近づいてきた。  
近寄るなハゲ

「どうも最近おかしいんだ！ 家に帰つてくるのだって19時だし、この頃は化粧もしてる。それに服だつてスカートやニーソとか萌え萌えで受けでいいのを買ってくるようになった！ これは絶対男がいる！ 毎日毎日学校でプレイしとるわ、絶対そうだ！ もしかしてお前か！ お前がその男か！」

「落ち着けよおっさん、後半好きなシチュエーションが混じつてるぞ」

まあ、確かに学校でのプレイは興奮するよね、うん。しかしおっさんが娘さんをこんなに溺愛してるとは……、ビckettなく土郎さん

を思こ出す。十郎わんわなのはのじになるとおかしかったからな。授業参観のとわや合掌口ンクールのときだつてせしゃいでたし。父親とこ「つものせやひこのつものなんだつつか。

「だけど娘さんも17歳なんでしょ？ だつたら19時に帰る」とや化粧なんて当たり前じゃないの。//ニースカやーネンだつて可憐いから履こいつと思つただけかもしないじゃん。あんまり心配なら娘さんに聞けばいいだけの話だろ?」

「……」の煙、口をきこてくれないんだ……」

「……」めこ

頃垂れながら絞り出しあよつに咳いたおつわんせとともふくべ見えて、たまらずそう返してしまつ俺であった。

「つまらや、その同棲まがいなことをしている男性はなのはちやんとフロイトちゃんの奴隸みたいなもんなんや」

『なるほど~』

フロイトちゃんと一緒に説明する」と30分、身振り手振りを加えながら話していたのだがどうやらちゃんとわからなかつたらしく……

「やつぱつそりですよねー なのはさんは女のお子が好きなんですか、好き好んで男と同棲するなんておかしいと思つていたんです。

やはり奴隸用として置いておいたんですねー！」

嬉々として私の手を握りしめながら離さないようにな話すスバル。  
この子の中でも私がどういった位置に存在しているのかとても気に入るのだが……聞いたら予想通りの答えが返ってきてそうで聞けない。

「ち、違うつてばスバル！ わたしやフェイトちゃんが管理局の仕事で忙しいから家事をお願いするかわりに住まわせてるだけだつて！ ほんと奴隸みたいな扱いなんて断じてしないから！ ねえ、フェイトちゃん！？」

「そ、そりだよ！ どちらかといふと奴隸より主みたいだよー！」

確かにそれは間違つてないかも。 我が物顔で家を占領してゐるし。いつも間にか家を改造してコスプレ部屋とか撮影スタジオ作るうとしてたし。 あの奇行に慣れてきた自分もアレだけ。

「そんな……だったら私はなにを信じて1年間頑張ればいいんですか！」

むしろ何を信じていたのかこの娘に問い合わせたい。

「やめなさいよスバル。 なのはさんたちも困つてるでしょ。 それにはさんはさんたちは大人なのよ？ 男性と同棲くらいするわよ」  
「そんな、ティアー！？ ティアまでそんなこというのー。 ティアだってなのはさんたちのこと信じてたじゃない！」

「ええ、信じてるわよ。 けどね……だからってなのはさんたちに当たつたら元も子もないでしょ？」

スバルの肩に手を置きながら優しく説得していくオレンジ髪をツイントールにした女の子、ティアナ・ランスター。この娘もスバルと同様私の直属の部下にあたる。魔力は低いが冷静な判断力と視野を広くみる目があり努力を怠らない娘である。将来の夢はフェイトちゃんと同じ執務官らしいが、きっとこの娘なら立派な執務官になってくれるにちがいない。げんに、暴走しているスバルを正気に戻そうとしているし。

「だからその男性のほうを口ロロロすれば私たちのなのはさんは戻つてくるのよ」

「その手があつたか！」

訂正、この娘も暴走していた。といつかいい加減私の疑惑もどうにかしてほしい。

「あのね、二人とも。一つだけいいかな？」

「はい、なんですかなのはさん」

「ちょっとまつてください、こいつこいつとは部屋に入つた後にいうのがセオリーなんだと思うのですが……」

「うん、そんな不安そうでありながら羞恥に悶えている表情なんてしなくていいよティア。絶対に思つていることと正反対のこという自信があるから。あのね、私はべつに女の子だけを好きってわけじゃないんだ」

「な、なのはその言い方だと……」

「え？」

「フュイトちゃんがオロオロした様子で話しかけてくる。　なにか間違つた」と言つたかな？

「なるほど、男性も女性もどちらもいけるとこ「うわけですね。　流石なのはさん……」それがエースといつものなんですね……！」

「私勘違いしてました……！　やはり女の子もいいんですけど、それなりに男性の方ともお付き合いしないとダメなんですね！」

「とうあえずいまのHースのなんたるかをわかつてもらわれたら困るんだけどつ！？　一人とも私が言つたことちゃんと理解したの！？」

質問しようとした私だが一人ははしゃぎながら席に戻る。

「ねえ、フュイトちゃん」

「うふ、言いたいことはよくわかるよなのは」

顔を見合させて、ひしひと抱き合しながら一人で座く

「「なんでわたしたちが女の子好きになつてゐるの……！」

「んなの絶対おかしいよ

「ただいま～って、なんだ一人ともまだ帰ってきてないのか」

おっさんを慰めた後、速攻で帰ったのだが一人ともどうやら帰宅しないならしい。日付だって变了たところにまだ帰ってきてないなんてお兄さん怒つちやうが。

「ど、いうわけで疲れているであらうあこづらを溺れさせるために風呂を沸かしました。温度は38。で二人をバカにするためにアヒルの遊び道具もいれておきます」

小さい子どもの遊び道具であるアヒルくんが何故この家にあるのかはわからないが、おおかた世間でアヒル口というけつたいなものが流行ったからだと推測する。それはともかく、田の前には熱々の風呂。何故、俺がこんなものを用意したかといふと……

「まずあこづらを風呂に入れて溺れさせます。すると一人のうちどちらかが悲鳴を上げるはずです。そこで俺が颯爽と登場するわけですよ。介抱という大義名分があるわけだから、世の野郎どもがつらやましくなるようなことだつてできてしまつわけである。流石だな、俺」

「ただいま～、やつと帰れたよー」

「ほんと、大変だったよね～……。あれから職場の空気がへんな空氣になるし」

「ほんとほんと」

「おー、おつかれさん」

丁度風呂が沸きあがつたところで一人が帰ってきた。二人とも、いかにもぐつたりとした表情をしていていい具合に弱っている。

「いまから夜食作るから、その間に風呂でもまじってこよ」

「うわー！ お風呂沸かしておいてくれたのー ありがとうー！」

「べ、べつにアンタたちのことが好きで沸かしたわけじゃないんだからー。ただ、暇だつたから沸かしだけなんだからー。」

「フロイトちゃん、早く入るついー！」

「うんー。」

見事にスルーされた。

さつさと風呂場にいく二人。俺はそれを見送ったあと、夜食を作るべく冷蔵庫へと向かう

「まあ、畳もたれしない食べ物だから……うどんといいか

ふたり分のうどんとネギを冷蔵庫から取り出す。ネギを刻んでうどんを茹でる。とても簡単な作業のように思えるが茹でる時間で固さがかわってくるから意外に難しい。いまだに完璧なゆで時間にあつたことがないのである。

キヤー——————！

ミクちゃんへのポエムを考えながら茹でていると、風呂場から叫び声が聞こえてくる。

これを……まつていた！！

火をとめ急いで風呂場へと直行する。あくまで人命救助である。幼馴染が大変なことになつていてるんだ。俺は悪くないはず。

「どうした二人とも、倒れたか倒れたのか！ そうだとつてくれ！」

ガラリと開けたその先には、高町なのはとフェイト・ト・テスター口ッサがアヒルではしゃいでいた。……あれ？

「……なにしにきたの？」

「……知つてた？ 僕つて前世アヒルだつたからさ、仲間を助けにきたんだ」

「へー……そなんだ」

「うん。あとで……この状況で「うのもなんだけど、フェイトのブラ壊しちゃった。『ごめんね、フェイト』」

アイドルばりのスマイルを出したつもりが、ひょっとこのお面をはがすの忘れていたため失敗に終わってしまった。というか、フェイトが指鳴らしながらこっちを見てるんですけど。だったらこっちも貴様も胸を凝視してやるよ。そう思つたところで、なのはの顔がドアップで目に映し出された。

「なにか言い残す」とある……？

「うひん伸びるから、早めに食べてください……」

俺は口をつぶつた。

直後訪れる鈍痛

叫ばれる罵声

そのすべてを受け入れながら、俺はアヒルさんを胸に抱く。頭の中にはそんな俺を見ながらも優しくほほ笑んでくれるミクちゃんの姿。

ああ……やっぱ俺泣くなきゃ必要みたいだ。

3. もうひと晩(後書き)

(・・・・・)  
つ  
＼

おひやごの庭ニササガロは異常ドナ

#### 4・無職の朝は早い

『おはよー、ひょーとー。起きて、朝だよ』

「…………んあ?…………もひーんな時間か。せつかくミクちゃんにす  
るをきにされる夢をみていたといつに?……」

ミクちゃんの抱き枕をそばに置きながら可愛い声でなく我がエンジ  
ンの田原ましを止める。おはよー!!ミクちゃん、今日も可愛いぜ。

「わー……わよーはジョギングにしつくか」

クローゼットからランニングシャツとハーフパンツを取り出して手  
早く着替えを済ませ、玄関でランニングショーツを履き外へ出る。  
うん、今日もいい朝だな。

突然だが無職の朝は早い。といつより俺の朝は早い。まず起床  
時間からして頭がおかしいと思つ。なんといつても5時起きだ。  
といつてもこれにはちゃんとした理由があつてだな……まず幼馴  
染の二人が6時には起きてくるのだ。仕事だとぬかしながら。  
お前ら高校のときは寝坊して遅刻ギリギリだつただろうと言いたい  
ところだが、これは成長の証なんだと思つ。なのはの胸は成長し  
てないけど。毎朝牛乳飲んでるのにな。まあそれはおいといて  
……一人が6時に起きるものだから俺は必然的に一人よりも早く起  
きて朝こはんの準備や弁当の準備をしなければならない。ならも  
う少しだけ遅く起きてもいいじゃないかと思うだろ? けどさ、体  
動かしておかないと太つたりするし、それが嫌なんだよね。だか

「おひるね……ひよひよへんじやないかえ……。 おはよつねー  
はですよ。

「おひるね……ひよひよへんじやないかえ……。 おはよつねー  
……」

「じこわくおはよ。 わろわろ天国へのカウントダウンがはじま  
つやうだ犬の散歩して大丈夫なの?」

「えーえー、これはわしの唯一の楽しみじゃけんのハ……」

ワンワンー ワンワンー

「……言つてゐるわざから犬逃げ出したぞ、じーちゃん。 ジーちゃんが  
持つてゐるコーデジヤなくてトーバックだからね」

「なんといー? わしどしたことがつつかりぱーちゃんのトーバック  
を持つてきてしまつた!」

ぱーちゃん無理しちゃだら。 流石に若作りとかのレベルじゃねえよ。

「まあ、あんまつ無理しなことつに気を付けてな」

あまり話し込んでいるのもなんなんで軽く手をあげて走り去るハリヒ  
にした。 ジーちゃんはジーちゃんと楽しんでるよつだ。

「セー、シャワー浴びて朝、」せん作るか

適当に走つて帰つてきた俺は、汗でべたべたしてこるシャツとハーネス

パンを洗濯器にかけるとシャワーを浴びることにした。べつにシャツもパンツもいま洗わなくても俺的にはいいのだけどなのはたちが嫌がるのでこいつやって一人寂しく洗うことにして。あ、なのはとフェイトの下着発見。とりあえず分泌液でもつけておくか……。いや、さすがにそれはやめておこう。本人たちが見ている前のほうが気持ちいいしな。

「それにしても弁当どうすつかな~。意表をついて逆田の丸弁当にでもするか」

シャンプーで髪を洗い、リンスをした後バスタオル一枚でそう決意した。どんな反応をするか楽しみである。

「というわけで台所につきました。まずは弁当を作ります」

着替えたあと地底人と書かれているHプロンを着こなして台所につ俺。気分はすっかり奥さんである。

「さて……まずはなののはの弁当ですが、弁当箱いっぱいに梅干しを敷き詰め中央に白米をそっと置いた愛情たっぷりの逆田の丸弁当です」

作り始めて一分。これは俺の中でも最速のタイムである

「お次にフェイトの弁当ですが、ミートボールとかあげとポテトサラダにミニースパゲッティ、そしてごはんを敷き詰めます。とりあえずフェイトは太らせるために別の箱におにぎりを2つほど置いておくとしよう」

作り始めて20分。なかなかの出来ではないだろうか。

結構ポテトサラダはうまく作れたと思う。まあ、作り方は意外と簡単です。まず材料はジャガイモときゅうりとハムと卵。コツはしつかりと粉吹きのときに水分を飛ばすことと半熟卵のところどころかんである。これが意外と難しい。それにジャガイモだって茹でるのに結構時間がかかるんだぞ？お兄さんの秘密の魔法でそこは短縮できるけど。

そんなこんなで弁当を作り終えてお次は朝ごはんである。食パンをトーストへ、冷蔵庫からバターといちじょうジャムを取り出す。お次はハムと目玉焼きを作つて、ちぎったレタスやスライスしたにんじんなどをいれ自家製のドレッシングできれいに仕上げたサラダを3人分テーブルの上にのせる。ふう……お次は一人を起こしにいかないとな

### 「ウルフ11　目標地点へ到着した」

なのはとフェイトの一人部屋に足を踏み入れた俺は、ポケットにいれていた携帯を耳に押し当てながら届かない電波を発信する。

「というかアレだよな。こんな姿してたらそりゃ世の人たちに女好きと誤解されるわ」

眼前で一人して抱き合つて寝ている光景をみながらそう呟く。なのはとフェイトの間で押しつぶされているウサギになりてえ。

だが、そうはいつてられない時間帯になつてきた。そろそろ一人

を起こさないと大変なことになる。

「とにかくで、官能小説を朗読しながら一人を起こしたいと思います」

一度部屋に戻り持つてきたのは妹系女の子がのつていてる官能小説。これで爽やかなモーニングをお送りすることに。

「宗谷の腰がズンズンと真奈美を突いていく。『いやんつー・宗谷、もつとハゲしくうーー.』」

「……なにやつてんの?」

「……朝の発声練習かな」

身振り手振りを加えて熱弁しようとそこで、なのはから冷凍ビームが飛んできた。あまりの冷たさに息子が縮み上がる。

「まあ、それはそれとして。朝はんできてるからやつたと食べれるぞます。そろそろ時間帯なんだし、隊長一人が遅刻なんて恰好悪いだ」

「うん、やつするよ。ほら、フエイトちやん朝だよ~」

「うん……もつとお願い……」

「任せやー。『真奈美、僕も限界』」

「いや、やつちやないから」

フロイトからのアンコールに応えようとしただけなのにバタなのは本を取り上げてしまつた。まったく、これで参考書が一つ消えてしまつた。

なのはは癪(めみ)けているフロイトを起こすと、その場で本を破り捨て部屋から出でこいつとする といひで振り返つた。

「おまう、今田も一田よろしくね

「はいはい

さて……送り出したあと遊びに行くか

#### 4・無職の朝は早い（後書き）

僕はマヨネーズをたっぷり使います。

そういうえば活動報告にパンツ更新と書くのもアレなので、略語としてパン通を使つことにします。あまり変わったようには思えませんが

## 5・たのしごお皿

「「いつときまーすー。」」

「「うーー」

朝食を食べ終え、歯を磨き仕事へ出かけて行った一人を玄関の外まで見送る。一人を見送ったあとは本格的に家事をすることに。

まずは朝食に使つた食器を洗剤で泡立たしたスポンジで洗つていぐ。

「へへ……」れがええんやうへ。」こじがお前の性感帯なんやう?」

「いやんつー やめてくださいー!」

黙つて片付けというのも味気ないので一人芝居をすることに。思わず息子が勃起した。スポンジできれいに汚れを落としたら真っ白なタオルで一つ一つ丁寧に拭いていく。

「へへへつ……奥さんい体してるじゃねえか……」

「いや、ダメええええええええええええー!」

人妻の設定で今度は芝居をする」と。思わず息子が勃起した。

そうこうしている間に食器洗いが終わったので、お次は洗濯物を干すことと掃除である。

「さて、一人のパジャマと昨日の服を洗濯機にかけたので、この時間を利用して家の掃除をしたいと思います」

マイクを持ちながらリポーター風に言つてみる。

「さあみなさん。 現在私がいる部屋はあの高町なのはとフェイト・T・テスター・ロッサの部屋でございます。 みてください、所せましとぬいぐるみが置いてあります。 やはり女の子なんですね、とりあえずエロ本を置いておきましょ」

辺り一面につきやかめ、猫に犬にカモメに白熊。 どれもこれもチャーミングな顔をしてやがる。 こいつらが毎日毎日一人に抱っこされてると思うといひやましくてしかたない。

「まあ、一人がいない間に物色するのもアレなんでさつあと掃除をしてしまおう」

クイックルワイヤーで床のホコリを取りぬいぐるみには専用のスプレーをかけて丁寧に拭いていく。 ついでに靴下などが入っている場所から黒のストッキングを押借し、頬擦りする。 その心地よさにうつとりしていると洗濯機が俺を呼んだ。 まったく……可愛がつてあげないとすぐ鳴くんだから。

そんなこんなで1時間30分ほどで家事を終わらせる。 さてと…  
…今度こそ遊びにいくか

「それじゃ訓練終わりだよー、みんなお疲れ様」

『お疲れ様です!』

「おつかれ、なのは

「あ、フェイントちゃん。おつかれさま!」

長い訓練が終わると同時に別の仕事をしていたフェイントちゃんがやつてきた。

「それでどうだったの新人たちは

「うん、みんな光るものを持っていますよー!」

まだ経験が少ないけど、きっと此処にいる新人たちは将来管理局を支える子たちになるとと思う。私たちのように。

「あ、そうだ。みんなにこれ渡すの忘れてたよ

「なんですか!? もしかしてラブレターですか!」

「落ち着きなさい、スバル。まだ早いわ。もつと好感度が上がつてから……伝説の木の下で恥じらいながらなのはさんが渡しに行くはずよ。ハア……ハア……テンション上がってきたわ……!」

「安心して、一生ないと思うから」

どうしてわたしの直属の部下は一人揃つておかしいのだろうか。

家には頭おかしいを通り越して狂つてゐる男性がこなとこつの1。

「それよりも、はいこれ。 今日から一年間使うノートです。 え  
へつと、これはですね」

「なのはさんの手垢!」

「汗が染みついでるわー!」

「ちょっと話を聞いてー?」

ノートに頬を摺り寄せる一人をヴィータちゃんが後ろから殴つてくれる。 ありがとう、ヴィータちゃん。

「ほんつ。 これは訓練のたびに感想を書いて提出するものです。 見る人は私とフロイトちゃんとヴィータちゃんとシグナムさん。 毎回毎回その感想についてコメントしていきます」

「なるほど、文通といつわけですね?」

「なのはさん……こじらしく可愛いです、……」

どうこうした解釈をすればそこにこもつくるのだろうか。 といふか、この娘たち絶対聞いてなかつたでしょ。

「まあ、そんなわけですからちゃんと提出する」と。 それでは解散!」

「あー、なのはさん、一緒にシャワー浴びましょー!」

「肌と肌をこすり合わせましょー！ 大丈夫、なのはさんにならなにされても大丈夫です！」

「ちょっとまって、私の意見はーー？」

「わーー、フュイトさんお腹（はん）ですよー。」

「うそそしだね、キャロ。 訓練でお腹すいてるだらうからこいつぱい食べよしねー。」

「はいー。」

私の可愛い娘であるキャロが可愛く頷く。

「あれ、なのはさんとフュイトさんはお弁当なんですか？」

「うそそしだよ。 彼が毎朝作ってくれるんだ。 これがなかなかおいしくて結構楽しみにしてたりして」

「そうそつ、頭はおかしいけど料理は大抵できるよね

家事もそれなりに出来るし、頭はおかしいけど。

「なのはさんのお弁当……なのはさんのお箸、なのはさんのお箸＝間接キス。 間接キス……！」

「ちゅうとまつてスバル！？ なにこきなり私のお箸を舐めよつと  
してゐの！？」

「スバル、まだ早いわ！ 食べ終わつてからにしないと」

「あ、そつだつた。『ごめんね、ティア』

「あれ？ 私には？」

なのはも大変だよね、家にいても六課にいても誰かに振り回され  
るよつな氣がする……

「セヒ……とりあえずお腹すいたしお皿にこみつけよー。それじやい  
ただきまーす！」

パカッ

オープン 逆田の丸弁当

パタンッ

クローズ 逆田の丸弁当

「あの……なのは？」

「……フュイントちゃん。一応、聞いておくれ。今日のお弁当の中  
身なにかな？」

「えつと……からあげと//ニースpagetティとポテトサラダと//ト  
ボールだけど」

それを聞いた瞬間、なのはがものすじに勢いで携帯を取り出し誰かに電話をかけはじめた。

「ちよっとー、逆田の丸弁当のヒビリのー? なんでフエイトちゃんのはちやんとしてこてなのは嫌がらせなの!」

「うわー、本当になのせきのお弁当梅干しがほとんどの占領している」

「ええまでくると、中央にのせてもある白い皿が怒りを倍増をせるわね」

「ちよっと聞いてるのー。なんで逆田の丸弁当なのか聞いてるのー。私の質問に答えて! つて、留守電じゃん! ?」

「落ち着いてなのは! ? 一人でノリシッショニしてるよ!」

怒りのあまりなのはが変になる。とこつか、彼は留守電になんていれてあるんだろうか?

「ん? もう一つ箱がある。あ、おにぎりが一つ。それになのはが好きな具だ」

もしかして彼かな? といふか彼しかこんなことする人いなけれど。それにしても

「許すまじ……!」

「なのはさん、私の!」はんぱない!」

「むしろ私をどうぞ！」

タイミングが少しだけ遅かったかも

## 5・たのしいお昼（後書き）

なのは (#・・)

フロイト (\*・・・\*)

弁当を開けたときの一人の表情

## 6・お話を遊ばせ（繪書）

今回の話で行われる行為は絶対にマネしないでください。

## 6・おつかれで遊び

「さて、俺の予想だと今頃なのはが電凸してきて留守電と会話したあげくノリツツコミをしている頃だと思つ」

なんでわかるかつて？ だつてなのはだもん。 バタなのなめんなよ、小さいころなんか手足バタバタさせてダダこねてたんだからな。 そのたびにアメ玉あげて黙らせてたけど。 昔はね、愛玩動物みたいで可愛かつたんだよ？ いや、いまも可愛いけどさ俺のこと殴つてくるもん。

「まあ、それを見越して俺は携帯を置いてきたから問題ない。 帰つたら怒られそうだけど俺のトーケスキルでなんとかしてみよう。 まずは遊びにきたんだから精一杯遊ぶぞ」

少し大きな広場にきていた。 中央には噴水、そこから東にちよつといいくと大きな芝生の遊び場があつて、噴水の近くには他より一段高いへんな面積がある。 いまは大学生のあんちゃんたちがダンスの練習中である。

俺はそれらを横目にみながら持つてきたサッカーボールでリフティングを開始する。 ハンくんにも負けないぞ！

「しかしそのままリフティングというのも悲しいものだから、ここはひとつゲームをしようと思う。 ストラックアウトというものをご存じだろうか？ 9つのマスを野球ボールやサッカーボールを使ってぶち抜くゲームである。 一昔前に流行ったような気がする」

かくいう俺も中学校時代にしたものだ。 いまだ6枚抜きの記録は破られていないうらしい。 いまの俺なら9枚抜きいけそうな気がするぜ。

しかし残念ながらここにはマスとなるものが一切存在しない……。  
いつたいどうしたものか。

「しようがない、この前を通りた人にぶち当てよう  
俺の餌食になつた者は運がなかつたといつことだ。 顔がバレない  
ようにひょっとこのお面もつけることに。」

一人目……女子高生

「推定膝丈20cm、生足をいかんなく見せており寄せてあげるグラを着用しているな」

俺の透け視力により基本的な情報を得る。 高校生というものは一生のうちで一番のブランド品であり人生の中でも輝けるときだと思っている。 現役という肩書が大事なのだ。 高校を卒業してしまうとどうしてもコスプレにしか見えなくなる。 そう……なのはやフエイトのように。 女子高生とはいわば熟したリンゴなのだ。アウトカセーフがギリギリのラインにいるからこそ、輝きを放つ。それはまさしく線香花火のごとく、消え去る一瞬を華やかに彩るのだ。

「こう書くとなのはやフエイト、はやてたちがババアだと言つてゐみたいに感じるがそんなことはない。 線香花火が終わつたあと

にやつてくるのが打ち上げ花火だからである。いろんな人と出会  
い、好きな人と結婚し子どもを産み、育児をして子どもを成人にな  
るまで責任をもって育て、その子どもの孫を抱き、孫の成長をめじ  
りにシワを寄せながら見守り孫の成人を見届ける。それが終わっ  
たあとに彼岸の川で待っているであろう夫の元へと逝く。お別れ  
のときには沢山の人が涙を惜しんで泣くまいと上を見る。それは  
まさしく打ち上げ花火と同じじゃないか

此処になのは達がいたのなら感涙しながら俺に抱きついてくるはず  
だ。残念なことをした、その一瞬ならば胸を揉みしだくことがで  
きたといふのに。あ、ちなみにフェイドの胸ね。

「しかしながらさすがに女子高生に向かつてサッカーボールをぶつ  
けるのはためらわれる。もっとこう……ぶつけても怒られなさそ  
うな人はいないものか。ん？ あそこにいるのおっさんじやね？  
いい的発見したぜ」

女子高生より右におっさんを発見した。なにやら書類を手に持つ  
ているぞ。

いや、まてよ？ おっさんって管理団員だよな、日本でいう警察官  
みたいなものだろ？ そのおっさんに向かつてぶつけるということ  
は、すなわち現行犯逮捕につながってしまうのではないだろうか。  
ただでさえブラックリストにのつてしまふ俺だ。こんなしようも  
ないことで捕まるのはいただけない。それにおっさんには何かと  
お世話になつているはずだ、そんなおっさんにサッカーボールをぶ  
つけることなんてできるのだろうか？

「それでも 男にはやらなければいけないときがある。こんな  
ことしたくないけど、食らえおっさん！ 死にせらせ……」

『うおッ！？

なんだいきなりボールが

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオル！！」

全力で蹴つたボールは吸い込まれるようにおつさんの顔面へと熱いキスをしにいった。 おあついねえお一人さん。 ひゅーひゅー

俺はそのままタンス練習をしていた大学生の中に突っこんでいく

「この世界は誰が勝つとも、必ずやまた別の世界へと進む」

બ્રહ્માણીના પત્ર

次は国際力会場！  
でめえら  
舞合は十分か？

一  
り  
おおおおおおおおおおおおおお

おひるの口を生  
豚にさがり立  
つさむ

一  
え  
ー  
!?  
」

ノリのいい大学生に捕まつて胴上げされる中学生。なんか忘れて  
いるような気がするがいまこの幸せな気分を味わつておこつ

「みんなありがとう！みんなのおかげで俺はここまでこれた！」  
本当、おまえらは最高の仲間だったよ！」

「…… そうかそうか、 よかつたな最高の仲間ができる。 大切にし ろよ？」

「うん。」

「いい返事だ。とにかくで、なにか重要なことを忘れてこる気はないか？」

「いや全然！」

「そうかそうか、それなら教えてやろう。  
の瞬間だ、ひょっとこ！」

振り向くと鼻血を垂らしながら怒りのあまり角が生えたおっさんが立っていた。 おっさんいつの間に人間の皮を脱ぎ捨てたん?

「ごめんなおつさん、足が滑つて」

「嘘つけ！ 貴様のセリフは聞こえとつたわあ！！」

「逃げながらお前は何言つてるんだつー?」

そこからはじまるおっさんと俺の追いかけっこ。 残念だったな、  
おっさん。 これでも俺は50m走で5・7を叩きだした男だぜ？

「待てといつておるだらうがあああああああッ」

アメンボ走法で走つてくるおっさんに恐怖を感じた瞬間であつた。



6・ねうさんで遊ばう（後書き）

/ ^ ( ) )

おひさんと本氣走り

「まさかおっさんがあそこまで速いとは思わなかつた。 鼻血垂らしながら全速力で走るから余計に怖かつたぜ」

おっさんと嬉しくない青春の汗を流した俺は帰宅早々シャワーを浴びながら先ほどのことふりかえる。 道行く人が振り返つてたけどこれからのおっさんの信用が下がらないことを祈る。

「さて、シャワーを浴びましたので夕食の用意でもしますか。 今日の夕食はなのはが好きなものにします。 でないと俺の頭からザクロが飛び出してしまうからです。 「めんねフェイト。 絶対フェイトが好きなものも近日中に作るから」

案の定、携帯をみると着信が入つておりなのはのノリシッコミがはいつていた。 これはパソコンのなのは専用フォルダにいれておくことにしよう。

それはともかくまずは夕食作りである。 愛用の地底人エプロンをつけ台所へ

「今日は薄切り肉のゆば巻きとわんこソバと煮物でいいと思います。 では助手のミクくん、説明を」

「はい！ まずは材料の説明です！ ゆば巻きは豚でもいいのですが折角なので牛の薄切りを使用します。 お酒とお塩に包むための大葉や一緒に食べるためのカイワレ大根を用意します。 あ、べつにカイワレはなくてもいいです。 そしてちょっとしたスパイス

として黒胡椒やわさびをいれるのもありますね。湯葉巻きはお湯でもしゃぶしゃぶできるのですが、今回は豆乳でしゃぶしゃぶしますよー！豆乳は美肌効果やダイエットにもいいそうです、それと生活習慣病の予防にもなるみたいですね。ミクには関係ないですけどー！」

「はつはー＝ミクちゃん。そんなことしなくても君は十分可愛いぜ」「や、そんなつーて、照れちゃいます……」

もちろん俺の一人芝居である。あまり料理を作っている最中に喋るのはよろしくないけど勝手に口が動くのだからしょうがない。

「さて、同時並行で煮物もやっていきますが、シンプルに大根だけにしておきましょう。いつそのことふろふき大根にするのもありだな」

ふろふき大根にするためには米のとぎ汁が必要なんだけどたっぷりの水と少しのお米で代用しちゃおう。

「わんこソバは一人が帰ってきてから作るとして、ゆば巻きも一人が帰ってきてから最終段階にはいればいいからもうやることはないな。久しぶりに靴磨きでもしよう」

たしか革靴が汚れていたようなきもするし

「というわけで玄関である。とくになにもない玄関なのだが、靴箱の後ろに年上系エロ本が挟まっていたりする。正直俺も取るこ

とができなくて焦つてゐるのが現状だ

わざわざと読んでおけばよかつた。

しゅじゅじゅじゅと革靴を磨きながら、ゲームの攻略法を考えていると外からふたり分の話し声が聞こえてくる。どうやら帰ってきたようだ。

「ただいまー」

「おかえりん！」

「ただいまん あつー ～～～～～」

フロイトが顔を赤くしながらなのはの胸に顔をうずめる。フロイト、埋める人選間違えてるね。あまりの可愛せいで[『]めつてしまつ。今週の待ち受けにしよう

「あ、そういえばなのは、俺の愛情弁当じだつたっ？」

「「めん、嫌がらせしか感じなかつたんだけど……、それより今度したらほんとうに怒っちゃうからね！」

「それじゃ明日はもつと愛情こめて縦一列にちくわ並べていくわ

「人の話聞いてたつ！？」

「「めん、フロイトの胸見てた。ほんとムツチリしてゐよな」

見かねたなのはが手に持つたバックで顔面を叩いてきた

「スーサースーハー、いい匂いだ」

「フェイトちゃん！ リセッシュ取つて！！」

「うん！」

「ちよつ！？ なのはかけるとこ間違ってる… 僕じゃなくてバッ  
クだろ、そういうときは…？」

俺の存在をリセットしたいとでもいうのかこいつは。

「わ～！ なのはが好きな料理だ！ やつたあ！」

「へ、へ～！ あんた、この料理好きだつたんだ。 わ、わたしは  
そんなの知らなかつたし… ほ、ほんとうよ… し、知つてたら…  
…も、もつと早くに作つてたわよ…」

「だ、大丈夫？ 無理しなくていいんだよ？」

「……うん、僕大丈夫」

フェイトの優しさが心にくる

「ほりほりー 二人とも早く食べよつよー」

「うん、やうだね！」

「それじゃ手を合わせて、いただきまーす」

「「「いただきまーすー。」」

みんなでしゃぶしゃぶする」と。

「やうこえは、この豆乳にはなにか隠し味いた？」

「俺の分泌液」

「「……」」

「いや、「冗談だから一人とも咽喉に指つっこむのはやめてくれ」

おまえら管理局の看板娘なんだろ。

それから今日一日のお互いのことを報告する」と

「絶対おっさんは本部でも活躍できると思うんだが。 犯罪者とかバツタバツタと捕まられるぞ」

「だから犯罪者の君を毎日捕まえてるんじゃないの?」

「失敬な、まだ予備軍だよ」

「ねえなのは。 私はインタビュードるときなんていえばいいのかな?」

「とりあえず友達未満他人以上の関係とこう」としておいつよ

「なんで俺が報道されること前提で話し合ひをしようとするの?」

報道される奴は俺から言わせれば一流に決まつてんだ。 そんな  
へマ犯すものか

「それにしても六課つて明らかな人選ミスじゃね?」

「君は人生ミスだけね」

「そのドヤ顔やめる」

湯葉巻きを食べながらキリッとしてちらみてくるのは。 ちゅう  
と誇らしそうにしてるけど、いま俺の人生否定したことわか  
つてるのか?

「それにしても今日は疲れたからお風呂入つてもう寝ようかなー」

「そうだね、私もちょっと疲れたかも」

「それじゃ俺は一人のベッド温めてくる」

席を立つたところで一人に袖をつかまれそのまま背負い投げさせる。  
疲れはどこいったんだ。

「後片付け、お願ひね」

「まかせろ、舌で一寧に舐めとるから」

グシャ

「なのはが履いているスリッパなら舐めればなのは味がするかもしない……」

「フハイドやせんー 变態がいるつー…?」

「ひうちで振つてこなごよー!?」

そんなに力いっぽい手で払わなくともいいじゃないか。

「まあ、こつまでもこんな恰好だと近所に俺となのはの関係がバレてしまつのでそろそろ足をおろしてくれ」

「どういった関係なの?」

「M・Mプレイをする関係かな」

「それ成り立たないよねつー!?」

「ちなみにフェイトはまうね。皿處のザンバー俺のスイカバーを叩いてくるんだ」

「フハイドやせん……」

「ちよつとまつてつー!? いまの話信じる要素ビリあるのつー?」

フェイトがムキーってなつてゐ間になのはが足を引っ込める。パンツみえた! パンツみえた! 速報! なのはの今日のパンツは水玉!

「それじゃ風呂はいつでいい。俺は片付けしてベッドの周辺に盗撮カメラ仕掛けておくから」

「片付けだけお願ひね」

「あ……まかしとけ……」

「返事頼りなさすぎだよつー?」

「歩い」と後ろを振り返る一人に溜息を吐きながら俺は台所へと向かう

「さて、箸を舐める作業にはこるかな

これも立派な後片付けだと思つてこる。

## 7. ニューベルト トモミサキ（後書き）

どちらかといひ、なのはがうでフロイトが云な氣がある

8・コイキングなのは

କାନ୍ଦିଲାରେ ପାତାରେ ପାତାରେ କାନ୍ଦିଲାରେ

静寂な空間に電子音が響く。

シマラ

自己主張をするように鳴り響く自覚ましは誰かの手によつてその主張を書き消された。眠たげな眼をこすりながら高町なのはは体を起こす。栗色の髪にいちごパンツが特徴の女性である。時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班に所属しており役職は戦技教導官。わずか19歳にして魔導師ランクSの優秀な魔導師であり誰もが認める管理局の誇るエースである。

「フロイトちゃん、起きて。朝だよ？」

「フロイトだと思った？ 残念！ ひょっと『Jちゃん』でしたー。」

パキツ

「指がツ！？」

なのはのすぐよこでカメラを回していた男性。ベッドの中だとい  
うのに器用にひょっとこのお面をつけているこの男性は、高町な  
は・フェイト・T・ハラオウン、八神はやてらの幼馴染である。  
黒髪で人類史上稀にみるうざさが特徴である。高町なのは&フェ  
イト・T・ハラオウンが借りた家に所属しており役職は家事をする  
こと。わずか19歳にして二人に寄生していないと生きていけな

く、ミッドで起じる小さな事件の大半の元凶を占めてくるミッドが嘆くトースである。

「あれ？ そういえばフェイトちゃんは遊びましたの？」

「べつの仕事だつてや。なんでもロリコン<sup>宗教団体の弾圧に向かつたとか。</sup>だから朝早くから出て行つたよ」

「へへ、そなんだ。フェイトちゃんも大変だね。それじゃ今日は一人で仕事にいくのか？」

「ああ、そのことなんだけどはやてからの伝言預かった。昼の1時から出勤だつてさ。昨日買ったゲームをしたいから朝はいきたくないらしい」

「六課は大丈夫なのつ！？」

なのはの悲痛な叫びが木靈する。

「それはともかく朝はんできるぞ。今日はフェイトに合わせてサンドウイッチにしてみた」

「やつたー！」

寝間着姿のまま、なのはは1階へと降りて行つた。

フェイトは朝の新鮮な空気を胸いっぱいに吸いながら我が家へと帰宅していた。朝早くから駆り出された仕事のほうも一時のケリはついたので自分はこうして帰っているわけだ。あの宗教団体が私をみたときに呴いた『あと10歳若ければ……』という言葉は忘れない。そんなことを考えているうちに見慣れた我が家へと到着、持っていたカギで玄関を開けリビングのほうへと顔をだす。

「ただいま、二人ともいま帰ったよ」 って、どうしたの?」

「お~、フェイトおかえり。 サンドウイッチどうだつた?」

「うん! すいべおいしかつたよ!」

「おかえりフェイトちゃん! ……そろそろ答えてくれないかな? 君」

「え? なにが?」

「とぼけた顔しないでっ! なんでコイキングになのはの名前をつけてるのか聞いてるのっ!」

テーブルを思いつきりなのはが呟く。フェイトはそのままなのはの向かい側にいるひょっとこのとじゆらまでこき後ろから画面を覗き込むことに

なのは／コイキング LV31

「ぶつ!?

「あ～～～！ フロイトちゃんいま笑つたでしょー。」

「「「、「めんねつなのはつ！？」」

「「～～～！ ふんつ！ どうせフロイトちゃんもわたし同様にへんなポ モンに名前つけられてるもんつ！」」

「ねえ、ちなみに私のポケモンは？」

「ピチューだけど」

「納得いかないんですけどつー...？」

寝間着姿のままなのはが彼に抗議する。 あ、飴玉あげたら若干おとなしくなった。 もしかして不思議なアメかな？

「それよりフロイトは仮眠する？ いまだつたらオプションとして俺がついてくるけど、ちなみに寝させないぜ」

「仮眠の意味を辞書で調べてきたほうがいいよ。 そのオプションはいらないかな。 うーん、あまり眠くもないし私もゲームに参加しようかな」

「オッケー オッケー。 ほんじやなのはをサクッと倒すからその間にとづてくれればいいよ」

「ちよつとまつて。 いまのは聞き捨てならないかも。 なのはだつてしまつとやつてきたんだからねー。」

「いけ、なのはーはねる！」

「えっー？ エウル…… ジジ？」

「なにしてんの？　コイキングに決まってるじゃん」

「だましたねっ！？」

今日もなのはのキレは健在で安心した。

「あれ?  
一人の戦いは終わったの?」

「うん、俺の圧勝で」

「コイキングを持ちにいれてる人に負けるわたしって……」

どうやらフェイトがゲームを取りにいつている間に一人の勝負は終わったみたいだ。

「いわゆる本物の魔術師は、魔術を仕事にする魔術師だ。」

「だ、大丈夫だよ！ 次は勝てるから！」

「ちゅうと、近寄らないでっ！？ いやあつー？ 質量のある残像  
残しながらじつちこないでっ！？」

あまりの恐ろしさでフロイトは泣き田になりながら後ずさる。

「同じ幼馴染なのにこの対応の違には大変遺憾に思います」

「妥当だと思います」

「その認識こそが間違っているのだっ！ もつと一人とも俺に優しくしてくれ！ パフパフさせてくれ！」

「願望が漏れてるよっ！？」

「……ごめん、なのは」

「胸みながら言わないでくれるかなっ！？」

「一人で抱き合ってるとその差がわかる。ミルタンクにフロイトとつけてもよかつたかもしれない。」

「んで、バタなのがボモンやる気なくしたので俺とする？ 大人のゲームする？ つるのムチとか使っちゃう？」

「普通にパーティーゲームしようか

「あ～～！ それじゃなのはマオテニスしたい！」

なのはの提案でマオテニスをすることに。

「あつー。」

なのは 右へ

ボール 左へ

「今度ここそー。」

なのは 前へ

ボール 後ろへ

「サーブならー！」

なのは ダブルフォルト

ボール ジュゲム回収

「つ、次こそはー！」

ガツ！ 「コードをひっかける音

ビターン！ なのが転ぶ音

۲۷

「...ごめんなさい!」

「な、なのはつ！？」  
「うからつ！」  
つ、次こそはできるから！ 私も一緒に手伝

「こいつスポーツゲームできなさも△ランク並みだよな」

フロイトに泣きつくなのはをみながら思わずそつとしてしまつた。  
とりあえず俺はお昼の準備でもしてこようかな。

## 8・マイキングなのは（後書き）

僕は9歳のころより19歳のほうが好きなんですが、なかなか賛同を得ることができません。

## 9・高町なのはの憂鬱

昼間のゲームを終えてフェイトと一人で出勤してきた高町なのははいつも通り自分の机で仕事をしていた。

「「なのはさん、これお願ひします!」」

「はい。二人ともお疲れ様~」

すると自分の部下であるスバルとティアナが一人揃つて一冊のノートを持ってきた。なのはが一番はじめに訓練のときに渡した感想を書くためのノートである。ふと隣をみるとフェイトのほうにもエリオとキャロが一人揃つて出しにいつてるところであった。もともとこの感想を企画したのには理由がある。それは隊長陣からみた新人達の動きや様子と新人達が思っている動き方などをこのノートを通してみるとことによってちょっととした意見交換会の役割を果たせればと思って企画したのだ。少しでも早く新人たちとの距離が近くなればと思っていたのだが、どうやらそれはなのはの杞憂に終わった。それがなのはにとつて嬉しいのかどうかは別問題だが。

それはさておき、なのははふたり分のノートをめくる。どんな小さなことでもしっかり答えてあげようと思いながら。

スバルノート

『私は小さくても大丈夫ですから気にしないでください!』

ティアナノート

『なのははさん、シグナムさんに胸で負けてますが大丈夫ですか？』

「余計なお世話だよつ！？ なにこの嫌がらせ！？」

小さなところに対する励ましと質問に叫び声を上げながら、なのはは席を立つ。

「どうしたんだ、なのは？ 隊長がそんなことじや新人に示しがつかないぞ？」

「あ、ヴィータちゃん！ ちょっとこれみて！ 新人に示すビンの盛大に心配されてるんですけどつ！？」

「どれ……。……大丈夫、なのはより小さい人もいるからね」

「ヴィータちゃんにだけは言われたくないんですけどッ！？」

優しいほほ笑みでなのはの肩を叩くヴィータ。ヴィータは成長することがない（ひょっとこ命名・ロヴィータ）ので永遠に10歳程度の体なのだが本人はそれをポジティブに受け取ることにしている。俗にいう諦めの境地に達しているのだ。

「せういえばはやてちゃんはどうしたの？ 見かけないけど……」

なのはは仕事場を見渡すが親友であるハ神はやての姿は確認することができない。六課設立のときは、『みんなと一緒に仕事せなサボつてしまつ！』 そつ言つてここに机を置いたはずなのだが……

「ああ、はやてならゲームしてるけど、なんでもボスが強くてなかなか勝てないみたいだな」

「いやいやいやッ！ みんなとか関係なくサボつてゐるじゃんっ！」

「なんで、ゲームへ仕事なの？－？」

「違うそなのは。 ゲームへへへ..

「なんのために六課を設立したのやつー？」

「今更ながらまともな友人が少ない」と頭を抱えるのは。

「もうこいや……なんで私だけこんな目に……」

「なのはさんが泣いてるー！？」

「スバルっ！ なのはさんの涙をペンヒ舐めついでー。 一滴もいじらすことは許されないわよー！」

「わかつた！」

「それでなのはさん、どうしたんですか？ なにか嫌なことでもあつたんですか？」

「現在進行形で起きてるよー。」

「ヴー！ ヴー！」

そんなときなのはの携帯からバイブ音がする。 名前を確認すると彼の名が。 何事かと訊しうが、とりあえず電話に出すこと。

「はこもしまし~。」

『 おお、 なのは。 唐突にバナナ・マンゴー・ラム酒を作りと頼  
つたんだけど、 じつ思つ~。』

「 いわゆることよッ~。』

携帯を床に吊りつかる。

「 お、 落ち着いてなのはっ！？ 深呼吸、 深呼吸だよッ~。』

駆け寄ったフロイトに抱かれながら、 なのははゆっくり深呼吸する。

「 ふつ…… ありがとうフロイトちゃん。 フロイトちゃんだけだよ、  
なのはの味方でいてくれるのわ。』

「 そんな…… 味方なら此処にだつて沢山。』

「 スバル…… なのはさんの泣き顔みてイキかけたわ。』

「 甘いね、 私はイッたよ。』

「 ビーハーの？ フロイトちゃん？』

「 ..... ごめんね。』

なにかを悟つたよつに笑う彼女にフロイトはそつ返すしかできなか  
つた。

リンディ・ハラオウンは大型デパートの地下食料品売り場にきていた。隣にはフェイトがお世話している彼がエスコートするかたちで手を取っている。

「それにしてもなのはちゃんと怒つてたけど、大丈夫なのかしら?」

「はつはつは、大丈夫に決まってるじゃありませんか。俺とはの仲ですよ? 困難な事件に立ち向かつた俺たちですよ?」

「ふふつ、よく覚えているわよ。プレシア・テスタークサにシャンパンファイトしたあげくアリシア・テスタークサにまでかけてプレシアを本気で怒らせたのよね」

「あのときは死ぬかと思いましたね」

「いつそ死んでもよかつたのよ?」

「え」

フェイトやクロノが仕事で忙しくなつてからといつもの、彼はいつもよく買い物に誘つてくれる。大半は食材の買い込みなのだが、たまに服や下着を見に行くことも。正直なところ、彼が下着売り

場にいくと警備が最大級にまで上がるのだからとしては勘弁願いたいところなのだが。

「それよつ、クロノのまつはぢつですか？ 最近会つてないですけど」

「ハイハイと絶好調な」

「明日速達でB-L本を送りつけやる」

「まつて、なんであなたが持つているのか問い合わせたいのだけど」

「それは聞かないお約束で」

「この子はまつたく変わらないわよね。 初めて会つたときもいまでも、変わることはない。 フェイトやなのはちゃん、はやてちゃんが変わる中でただ一人変わることなく過いしてきた彼はある意味凄いのかもしねない。」

「ちなみに今日の夕食はなにかしり?」

「やうですねー、フェイトが好きなダックフードしようつかと」

「人の腕とは簡単に干れるものなのよね……」

「『みんなさじーリンティさんつーー』[冗談ですか？]、[冗談ですか？腕を干せ千切らつとしないでくださいーー？]

やつぱり、彼に限つてそんなことはないか。



## 9・高町なのはの憂鬱（後書き）

いつもおもても僕はシリアルとか書くのが好きなんですね。けどこの作品つてギャグじゃないですか？これはいかんと思いまして、この作品でもシリアルを取り入れようと考えたんです。

けどいくらおもても、”おちんちんランド”意外のネタが浮かばないんですよ。

あれですか？おちんちんランドでシリアルやれってことですか？銀だつてシリアル回のときには真面目にやつてますよ。それすら許されないんですか？どうすればいいのかわかんないです。

皆様の紳士力のおかげで10万PV超えました。ありがとうございます。しょうもない作品ではありますが、クスリと笑つて頂ける作品にしてこきたいと思います。

## 10・白パン大好き スカリエッティ

仕事が終わり就寝前のんびりタイムをなのはとフェイトは女性雑誌を眺めながら楽しんでいた。これでも花も恥じらう19歳。いろいろと思うところがあるのでどう。

「あ、なのはの恋人はすぐ近くにいるかもだつてよ?」

「フェイトちゃんこそ、ずっと傍にいた人だつてよ?」

「けど私たちの近くにそんな人いたっけ?」

フェイトの疑問によつてなのはは考える。すぐに浮かんできたのは神様が人類に苦しみを与えるために生み出した存在であろうひとつとこのお面を被つた男だつた　のだが

「うん、ないよね」

「そもそもあれつて人間なのかな?」

「分類上人間に入るかな。　残念ながら」

ずっと傍にいた……というのもあるのかもしれないが彼は恋愛対象にはいらないのではないか。だって無職だし、頭おかしいし。

「けど意外に高校のときとかモテてたよね。　バレンタインのチョコとか女子全員から貰つたって聞いたよ?」

「そのうちの9割が至近距離からチロルチョコ投げつけられたという結果だけどね。あのときは別の意味で鼻血だしてたよ」

「残りの一割は？」

「遠くからアンダースローでチョコパイ投げられてたよ」

「……それバレンタインを口実に田頃の恨みを晴らしてただけなんじゃないのかな？」

少しだけ不憫に思つフホイト。

トントントン

そんなとき、2階から彼が降りてくる音がした。あとは就寝だけであるがまたゲームでもするのだろうか？

「（）機嫌な蝶になつたから、きらめく風にのつて彼女の元へとつてくる」

「はいはい、捕まらない恰好でお願いね」

「まかせろ」

なのはは六課の猛攻撃によつて疲弊しており、うんざりした顔で手を振つた。彼も19歳だ、さすがにへんな恰好で深夜徘徊なんてしないだろう。そう思つて振り向いた先に文字通り蝶がいた。黒の触覚に黒い翅。はね鱗粉を真似ているのだろうかとこじらぢらじらメガはいつている。口には曲げたストローを咥え、足には黒のソ。だからどう見ても360°全方位で変態である。

「なんで自信満々に返事したのつー!？ 捕まる気満々じゃんつー！？ とかそれ私のニーソだよねつー！？」

「なのはだけだと不公平だと思つてフロイトの髪を結ぶリボンで蝶ネクタイを作つてみました。蝶だけに」

「そういう問題じゃないからつー！ いまの一氣に不機嫌になつたよつー！」

「それお母さんと置つてもらつたのに……。ひどいよー あんまりだよー もつ捨てるしかなくなつたじやないのつー！」

「そこまでこくのつー！？」

流石のひょつといも驚きのあまり声を上げる。フロイトは泣き田でなのはによしよしされてこる。

「もういいもん！ 一人が構つてくれないから遊びにいくもん！ このペチャパイ！」

「それ個人攻撃してるよね！？ 一人じゃなくて一人に言つてるよねつー！？ とかペチャパイじゃないもん！ ちやんとあるもん！」

「つ、捕まつても引き取りにきてあげないんだからねつー！」

「まつばーー！ サーブの一流と一緒にするではないー！」

そうこいつひょつといは勢によく玄関から飛び出したのだった。

「とはいつたもののすることはないんだよな、これが

深夜の道を一人で歩く。歩くたびに翅がヒラヒラ、鱗粉パラパラ、  
触覚フヨフヨ、つれこじこじの上ない。

「ん？ あそここいるのは誰だ？」

ひょっこりからみた真正面の家の周辺で黒コートを着て天狗のお面  
を被った男がウロウロとしていた。じきにその男は家へと侵入し、  
白のフリルつきパンツを手に取つて頬ずりする。どつかみても変  
態である。やがて何かに気付いたかのように男はそつと家を出て  
ひょっこりのぼづくと歩いてくる。

すれ違う二人

その瞬間、ひょっこりは声をかけた。

「まちな、あんた」

「……なにかね？」

男は足を止める。 その手には白パンツ

「白パンツをとるとはいただけないな。 何故その横にある縞パンを取らなかつた。 白と水色で可愛かつたはずだ」

「ふんつ、縞パンだと? 君は何をいつているのかね? そんな前時代的な遺物にまだ未練を感じてゐるのか?」

「なんだと………」

ひょっこりは思わず距離を詰める。 蝶ルックスで

「君のよつな者がいるから時代は足を前に出しあげねてゐるのだよ

「まつ………その言ひ方。 まるでお前が時代を先取りしてゐるかのよつな口ぶりじやないか」

「当たり前だよ。 これでも私は天才なんだ。 時代を読むことなんて動作もないよ」

黒ゴーツの男は一歩詰め寄る。 白パンツを手に持つたまま

「何を言つてるんだ。 縞パンはその人自身を若干幼くさせ口裡に魅せる効果があるんだぞ。 白パンツ」ときができると思つてゐるのか?」

「甘いね、君は白パンの凄さをわかつていない。 純白な白から生み出される染みがどれほど興奮するものなのかわかつていなによつだ

「ふんひ、まだそんな段階とはな。その段階ならば俺は5歳のときには幼馴染がおねしょをした」とひょりて到達していく。

「幼馴染……だとッ！？」

男の目の色がかわり、体をプルプル震わせる。

「……君には幼馴染がいるというのか。それこそ人類が生み出した究極にして至高の存在である幼馴染がッ！ モーニングでは勝手に自分の部屋にはいつてきて寝顔を見ながらクスリと笑う幼馴染がッ！ 一緒に登下校したりお弁当を食べたりして、ちょっと可愛い子に目がいつてると膨れつ面になつて怒つてくる幼馴染がッ！ 夜には夕食を作りに来てくれ、そのまま夜の嘗みまで逝つちゃう幼馴染が君にはいるというのかねッ！」

「はつはつは、つらやましいか？」

「つらやましい……」

なんとも素直な男である。しかしながら、この男が彼の現状を知つたらどんな顔をするのか……それもまた興味深いものがある。

「しかしなんだね……、じいじくんにも君のような若者がまだいるとは、世界もなかなか捨てたものじゃない」

「それは俺も思うよ。あなたのようないるとは、あなたとなら趣味が理解できそうです」

「ふむ、まったくもつて同感だ」

およそ人類の底辺のような二人がまるで人類の代表者かのように話す姿はみていて頭が痛くなつてくれる。

「そういえば、あなたのお名前を伺つてもよろしいでしょうか？」

「私の名前は、ジョン・スカリエットだよ。みんなからはジョンミティッド・ザイア、無限の欲望と呼ばれているよ」

「なるほど、無限の性欲ですか」

「君の欲望は性の一方通行なのかい？」

およそ正解といつていいのではないだろうか。

「して、君の名前は？」

「俺は正義のヒーローですからね。名前は伏せています、みんなからはひょっとこと呼ばれていますね」

「ひょっとこくんか。それではひょっとこくん、ともに道を極めてこいつではないか」

「ええ、あなたとなら極められると信じています」

そういうて、二人は固い握手を交わす。決して途切れることない、消えることのない、男と男、変態と変態が交わした約束であった。

「よかつたな、ひょっとこ。お前にも友達ができる

「それに趣味も合ってるからな。 わい、今日は思いもよらない収穫もあつたし俺は帰ることにするよ」

「せうかそうか、なら ちょっと交番でお茶でもせんか？」

「おひやんつて忍びの家系だったつけ？」

『はい、もしもし。 高町ですけど』

「あ、なのは？ 僕だけど……」

『ん？ なんで家の電話？ って、携帯置いていったのか。 それでどうしたの？』

「いや～……うん。 大変言いにくい」となんだけど、交番まで迎えに来てくれないかな？」

『わよなう』

「まつてええええええええええ！　お願ひだから電話を切らないでえええええ！」

深夜の交番にひょっこりの声が木霊する。

どうしてだ……一流の俺が一流のような失敗を犯すとは……！

隣にいる友、スカリエットティに目を向けると

「あ、ウーノかい？　そう、そつなんだ。管理局の人に捕まってしまったね。え？　いやいや指名手犯だからとかじゃないんだけどさ。えっと……白パンツを盗んじゃって。あ、待ちたまえつ！　ウーノ、これには深い訳があるんだつ！」

「パンツを盗むのに理由もなにもないだつ」

「そして俺が捕まったのにも理由はないんだがな」

「お前は存在するだけで理由になるからいいんだよ」

「……世界が俺の敵というわけか

そんなこんなでおっさんとお茶を飲みながらまつたりと週刊と二

「どうもひけりのバカが『迷惑をおかけしました』

高町なのはは田の前にいる男性に深々と頭を下げた。連絡がきてから1時間。本気で来たくなかったのだがもしかなから交番の人にはどれだけ迷惑をかけるか分かつたもんじゃないので、嫌々ながらも引き取ることに。ちなみに水色の短パンに白のTシャツ姿である。

「いやいや、こちらも慣れたもんですからね。ただもう少しおとなしくなってくれればこちらとしてもありがたいのですよ」

「とか言つたりやつて、本当は俺と遊ぶの嬉しいんだろ？？」

「黙つてて」

「ぐふうつー？」

なのはのヒジがひょっとこのハジに入る。体を前に傾けながら必死に酸素を取り込んでこる幼馴染を冷たい田で見ながらもう一人捕まっていた人物の所へと向かう。

「あの～……すいません。私の幼馴染がそちらを巻き込んでしまつたよ～うで……」

「こえ、こりらもドクターがそちらに迷惑をおかけしたよ～うで……本当にすいませんでした」

「まともだつ！ まともな人にやつと出会えたような気がするわー」

「？」

女性の対応になのはは感動して手を取る。田にます」しだけ涙を浮かべていた。

「あ、あの……何があつたのかわかりませんが、その……頑張ってください」えつと、これも何かの縁ですし、お互に連絡先でも交換しますか？」

「是非！」

嬉々として携帯を取り出し互いの連絡先を交換する。

「えへっと、ウーノさんですか。なんだか知的な名前ですね」

「ふふ、わからんなのは可愛らじいお名前ですよ。あなたにピッタリな名前ですね」

「当たり前ですよ、なのははコイの王様になるまでの素質をもつていますからね」

「話に加わつてこなこでみつへー？」

「いや、やひじこせん」

「後で付合ひあげるからつー」

「そんな……」なんといひで告白なんつ……」

「どんな思考回路してたらそうなるの？！？」

「ここにペースを乱され憤慨するなのは

「それよりスカさん大丈夫なんですか？ なんかひどく打ちひしがれてるんですけど」

『…………せつかく取ったパンツなの』……カーネ、なにをしてくれるんだ……』

「気にしないでください。 それとパンツのほうはひりひりで弁償するようになりましたので」

スカリエッティは泣きながらその場に立つ

「ひょっとこくそ…… 今日また立ち直れそうにならないから話はまた後日にします……」

「あ……おひ

ひょっとこが軽く引くくらい意氣消沈しているスカリエッティはウーノと呼ばれた女性に手を引かれながらその場を後にした。

「それじゃ俺らも帰るか

「とつあえず二ーソは弁償してよね？」

「わかつたよ。 それじゃこの二ーソは俺が責任をもって処分しこくよ。 ……なのはの二ーソ……ハア……ハア……」

「 もう嫌だよ、この幼馴染つーーー？」

きつかりーノを回収しながらのはは交番の前で叫ぶのだった。

10・白パン大好き スカリエッティ（後書き）

スカさん書いて楽しいです

## 11・円環の理に導かれたガジェットドローン

「あ、スカさん? デリしたのいきなり電話なんかしてきて?」

『つむ、ちょっと遊びにこないかと思つてさ。君が喜びそうなものがたくさんあるんだ』

昼も少しばかり過ぎたころ、友人であるスカさんから電話がかかってきた。内容は自分の家に遊びにこないかと『誘い』であるのだが、いまからエッチなビデオを視聴したいので丁重にお断りをすることに。

「あ~、『めんね。こまから大事な用事があつてだな』

『やの用事とはよもやエッチなビデオを視聴することではないかね?』

「スカさん、エスパーになれるよ。アンタ」

『ふつ、君の思考回路からすればそんなことだらうと思つていたよ』

どうやらスカさんには俺の思考回路がわかるらしい。普段幼馴染たちから頭がおかしいと言われている俺だが、本当はあいつらのほうがおかしいのではないか。

『まあ、そんなエッチなビデオよりか面白いものがみれるから期待するといい』

そう言って、スカさんは電話を切った。

「いやいや、スカさんの家の場所わからないつて。……しょうがない、全知全能森羅万象の理を操るGōgo-e先生で調べるか」

「すいませーん、スカさんに御呼ばれしてきたんですけどー」

「はい、お待ちしておつました。こんなにまだ、ひとつといわん」

「あ、ウーノさん」

先生で調べること一〇分、あつさりと場所が見つかったのでバイクを飛ばしていくことに。これでもバイクの免許持ってるんだぜ？

おっさんはねたりしてるけど。華麗にキリモミしながら飛んでいくあっさんはなんでいまも生きてるのか不思議でたまらない。

そして俺のことを出迎えてくれた女性はウーノさん。とっても優しくていい人みたいだ。（なのは談）ただ、こういう人ほどベッドで乱れると凄かつたりする。

「ウーノさん、俺と一緒に発やりませんか？」

「『』みんなさいね、私はドクターだけのものなの」

「スカリエッティ、出でこいや『』アアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

「いまので俺の中の何かがキレた。

俺がいろんなものにハツ当たりしていると、奥のほうからスカさんが出てきた。

「ちょツ！？ やめたまえつ！ そこらへんには私がウーノに内緒で隠した秘蔵のH口本がつ！？」

「ドクター、ちょっとお話しを伺つてもよろしいでしょうか？」

「ち、違つてただウーノつ！？ いまのは言葉のあやとこいつやつどシ！？」

「あ、発見。 とりあえず没収な」

スカさんがウーノさんにフルボツ「にされてる間に秘蔵のH口本を読むことに。 スカさん、さすがにふたりはどうかと思つよ？」

「よくきててくれたね、我が友よ。それにしてもよく来られたね。  
家の場所を教えてないといつに？」

「Goo goo eで調べたよ」

「家の情報ダダ漏れではないかッ！？」

なにやらスカさんが慌てた様子でパソコンにつけ、何かを操作しあげた。案外せわしない人なんだな。

「それでスカさん、なにをみせてくれたんの？ もしかしてあの秘蔵のエロ本のこと？ だつたら持つて帰るからもういいよ」

「待ちたまえ、あれは私の最高に抜けるものなんだ。返してくれないか？」

「床オナでもしとけ」

ウーノさんとスカさんができてる知つたいま、俺はスカさんに容赦などしない。つい先日男と男の約束をした気がしないでもないけど。

「EJWちはエツチなビデオ見ながらのはやフエイトの下着を嗅いで自慰をするという大切な用事があるんだぞ」

「君とあの娘がいまだにあんな関係でいられるのかがとても不思議なのだが」

「普通ですとなのはちやんのまつが縁を切つてもよれやうですね」

「一人に寄生しないと生きていけないからな。一人ともなんだかんだで俺を見限れないんだよ。どうだ、うらやましいか?」

「誇る」とではないぞつー?」

「あなたのためにマダオといふ言葉がある気がします」

マダオ=まるでダメな男

「まあ、まあ、いいだろ?。それで今日君を呼んだのはほかでもない。これをみてくれないか?」

「ふにゃちゃんですね」

「そこではないわつー?」

そういうてスカさんは何かのスイッチを押した。すると大きな鉄の扉が開けられる。どうやら格納庫のようだ。ちょっとワクワクしながら中をのぞいてみるとそこかしこに機体があつた。なんだこりや?

「驚いたかね? これはガジェットローンといつてね。私が可愛い女の子を盗撮したいがために作った機体だよ。完全ステルス製で、どんなところでも侵入できるよ」

変態に技術力をもたらしたら「」までのものが完成するのか。

格納庫自体がとても大きいので数も尋常じゃないほど多い。

「うつわー、ちょっとこれ面白そうじゃん！　スカさん遊ばして遊ばして！」

「あ、これっー。」J-J郎くんには緊急用に自爆スイッチが置いてあるのだからそりゃくんを変に触つたら……」

ポチッ

“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”“ガ”　ガジェットたちが自爆する音

「　……」

「残念だけど、ガジェットたちは先に逝ったわ。　田環の理に導かれて……」

「導いたのは君だろうッー？」

スカさんが泣きながら訴えてくる。

「どうしてくれるのだつ！　私が研究に研究を重ねて作った可愛い子供たちを壊してくれて！」

「まあまあ落ち着けよスカさん。　ほら、エロ本やるからさ」

「それはもともと私のだつー？　なに君が家からもつてきたみ

たいになつてゐるんだつ！？」「

「オーケーオーケー、かわりに俺が地道に盜撮した秘蔵のファイルをあげるからそれで許してくれよ」

「……おつかの件は見なかつたことにしよう」

流石スカさん、話の分かる人だ

「あ、もしもし？ 警察ですか？ ええ、ここに一人ほど変態があるので逮捕をお願いしたいのですが……」

「「やめてください！」？」

ウーノさんが連絡した直後、おつかさんがものすごい速さでこちらに向かってきた

「ええい、最終防衛システムはどうなつてゐるんだつ！？」

「スカさん、おつかんの前ではそんなもの無意味に等しいつ！ これは自力で逃げるしかないだつ！」

「化け物にもほどがあるだつ！？」

「おいっ！？ おつかん多重影分身してないかつ！？」

多重影分身をしながら俺とスカさんを追い詰めるおつかん。 この人は管理局の影のエースと呼ばれているに違いない。

## 11・丘環の理に導かれたガジエットドローン（後書き）

次話はちょっとシリアス風味にしていこうと思います

## 12・墓前に捧げる一つの酒

カタカタカタ

「……」

カシャカシャカシャッ！

「……」

カシャカシャカシャカシャカシャカシャッ！

「ティア、フィルムなくなっちゃったよ？」

「え？ もうなくなつたの？ ちょっとまって、替えのフィルムあげるから」

「それより一人とも仕事してよッ！？ なんで上司の私が仕事して  
る横で平然と写真撮つてるわけッ！？」

「なのはさん！ その表情いいですよ、もう一枚！」

「なのはさん、いじにもお願ひします！」

「フンガーッ！…」

なのはが両手を上げて猫のように威嚇のポーズをとる。 今日も六  
課は平和である。

それを一番遠い席からオレンジジュースを飲みながらみているのは六課の部隊長である八神はやて。高校時代に、ひょっとこと色々やらかした伝説がある女性だ。はやはては横でペロペロキャンディーを頬張っている自分の家族である口りつ娘、ヴィータに話しかける。

「やういえば、スバルはなのはちゃんと助けられたからあんなに慕つてるのはわかるけど、ティアナはなんであんなに懐いとむかしつとる?」

「いや、全然。大方なのは萌えとかの狂信者じゃない? ほら管理局にもいるし」

「ああ、そういうやつたな、あの変な団体。絶対に接触することなくのはちやんの危険になる存在であるう者たちを排除する、ある意味管理局の負の遺産やな。けど、おかしいでアイツが排除されてないやんか」

「アイツはそんなものを超越する存在だからな」

「流石はミッドが嘆くHースだけある」

思い浮かぶのはなのはパンツやフロイトのブリーフ命をかける男の姿。

「それにしても気になるな……」

はやはてはオレンジジュースを飲み終わりながら一人顎に手をおいた。

「いやあああああああッ!? ちよつと、それ私のリップ! ?」

「か、間接キスに……！」

「私が左でスバルが右だからね」

「まあ、楽しそうでなによりやな」

はやはは眼前で繰り広げられる光景を見ながら彼に送りつけよつと  
写メをとつた。

ティアナ・ランスターは一人なのは待つていた。 今日の服は黒  
の服に黒のタイトスカートといつおよそ六課では似つかわしくない  
服装である。 若干緊張氣味に自分の上司を待つティアナのもとに  
コツコツと一つの足音を響かせながらある人物がやってきた。

「あ、ティア。 きょうは早いねって…… その服装は？」

「あ、なのはさんおはよつぱれこます。 その…… 今日はどうして  
も外さない用事があつて」

翌日

そこまで言つとのは何かを思い出したような顔をして、納得したように頷く。

「そつか……丹田が経つのは早いね。うん、わかつたよ。あとで私も行くからお兄さんにはよろしくね？」

その優しいほほ笑みがティアナの胸に浸透して、ゆっくりと広がる。そんな感覚を胸に抱いたままティアナは一礼して六課を後にした。兄の親友と名乗った男が現れた日のことを

兄が死んだ

それは小さな幼き日に起きた突然の出来事だった。

息を切らせながら自分に報告を告げた人の胸倉を掴んだのは覚えている。そして変わることのない情報を前に崩れ去つたことも覚えている。そこからはまるでタイムワープしたかのように一瞬に何もかもが過ぎていった。

「おにいちゃん……」

ティアナは知らず知らずのうちに兄の名前を呼んだ。しかし墓の中にはいつている兄は可愛い妹の声に反応することはない。どんなに呼んでも叫んでも自分が狂つたところで、兄ティーダ・ランスターが殉職したという事実はかわることはないのだ。

空は兄の死を悲しむかのように嘆くかのように泣いていた。自分の頬から伝わる零が雨なのか涙なのか、もう判別できないほどだ。ティアナが悲しみに打ちひしがれているとき、後ろから声が聞こえてきた。

「情けない」

その一言で闇を切つたかのようにさまざまの人たちが兄に言われもない罵倒をしだした。なかには諫めようとした者もいたが、しかしながらその全てが無駄に終わる。腹が盛大に出たいかにもな男性がその全ての言葉を書き消すのだ。ティアナは幼いながらも悟つた。この人がこの中で一番偉い人なんだろうと。誰もが彼に逆らえない。場を収めようとした男性もいまは黙つて唇をキュッと結んで耐えているだけであつた。

世の中は不条理だ

ティアナはそう思った。

そんなとせ、やけに間延びした声が辺りを支配した。

「あ、すいませ～ん。 ちょっと通してください。 あ、ダメッ！  
そんなとこ揉んだらアヒンッ！ おっちゃん、いい趣味してるじや  
ねえか……。 なかなか受け入れられない道だけど頑張れよ」

「揉んだらんわ！？ いまの一瞬で私の地位を落としたことがわか  
つているのかね！？」

恰幅のいい男性がなにか抗議するが少年は「」吹く風で笑っていた。  
端正な顔立ちの少年である。

「よお、ティーダ。 期末試験受けてる間になに死んでんだよ、ダ  
ッセーな。 一緒に酒飲める年齢になるまで待ってくれるんじゃな  
かつたのかよ……」

それはそこにいるものの全員を驚かせる言葉だった。

少年は右手で持っていたウイスキーを開け墓に上からかける。 ド  
ボドボと音をたてながら落ちる酒は処理する者が誰もおらず地面へ  
とゅつくり漫透していく。 やがて半分ほど減ったところで少年は  
注ぐのをやめ、かわりに自分が呷りあお

「おえッ！ 僕酒飲めないんだった……、おじさんその服かして…

…」

「ま、まちたまえッ！？ もう少し我慢するんだ、すぐにエチケッ

ト袋をもつてくるか」ひー。」

「 もつ無理……」

オロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロッ！

恰幅のいい男性の服の中にむかつて盛大に吐いた。

それからは阿鼻叫喚の図であつた。 男性は急いで帰るし、それに付き従う形で参列者は帰つて行つた。 何人か貰いゲ口した人もいた。

「 さて……スッキリした。 士郎さん、 もつと度数が少ないのくだ  
さいよ……」

「 あの……」

「 ああ、 こないほつがいいよ。 僕ゲロつたから、 臭いきついと思  
うし。 それよりそこのおっさんは帰らなくていいの？」

少年が問い合わせた先には、 先程一人だけ場を鎮めようと頑張つてい  
た男性がさつきと同じ位置にかわらず立つていた。

「 此処に市民がいる限り、 僕はこの場を動くつもりはない。 それ  
より水をやるから口をゆすげ」

「 おっさん氣が利くじゃん

「 おっさんじやねえよ、 まだ若いに決まつてんだろ」

やがてこの一人がミッドの名物追にかけっこの中役を演じる一人になるのだが、それはまたの機会のお話にでもしよう。

「それじゃ未成年の飲酒も見逃してくれ

その言葉に男性は答えない。 答えることができない。 少年もそれをわかつてこのか笑いながら楽しんでいるようだ。

「あの……」

「ん？ も、すまんすまん。 つい話しこじやつた

少年はティアナの頭に手を乗せる。 わしてナビモをあやすよつてよしよしこじやる。

「俺はティーダにお世話をなった身でさ。 ビックリしたぜ…… いきなり亡くなるなんて」

「殉職だ。 違法魔導師との交戦でさ」

「そつか……」

「ちなみにじんなお世話をなったんだ？」

「パンツ盗んだときじゅうじと」

「お前これ終わつたあと、交番までこ」

「そんなんあつー？」

それは墓前で繰り広げられるコント劇、観客はティーダ一人だけ。

やがて少年は墓の前にどつかりと座つこむ

「なあ、嬢ちゃん。お兄ちゃんは好きか？」

「……はい」

「やつか」

隣に座つたティアナは小さく答えた。

やがてぐすぐすと小れな嗚咽が辺りを支配する

「悔しいか？ 大好きなお兄ちゃんがあんなに言われて」

「悔しいです……！ ものすくへー！ お兄ちゃんは、優しくて強く  
て！ 私の憧れの人で……」

「俺もだよ。あそこでおどけてなかつたらあにつらぶちのめすと  
こうだつた。でもさ、そんなことティーダは望んでいないんだよ  
な。それで、嬢ちゃんはこれからどうすんだ？ 言つとくが、俺  
が引き取るなんてエロゲ的な展開にはならないからな。そんなこ  
としたら、俺が幼馴染に殺される」

「……私は一人で生きていきます」

「金は？」

「なんとかします」

「一人はさびしいよ？」

「大丈夫です」

「今日のパンツの色は？」

「おまわりさん、この人です」

「おひ」

「冗談ですか？…？ 手錠取り出さないでくださいよ？…？」

少年は慌てたように男性を静止させる。

「私……」

「ん？」

「私、大きくなつたら管理局に入つて……お兄ちゃんをバカにした人達を見返したいです……！ 執務官になつて……見返したいです！」

ボロボロ泣きながら、ティアナはふたりの前で喋った。

「魔力とかまったくダメだけど、それでも見返してやりたいです！」

「いい心意気じゃねえか。 だったら俺が天才に勝つ方法を教えてやるよ」

「……え？」

「天才つてのは99%の努力と1%の才能で成り立っている。それに引き替え凡人つてのは100%の努力で成り立っているものだよな」

「……そうですね」

「だったら、120%の努力をすればいいだけなんだよ。10%の才能をもつ奴には200%の努力をすればいい。50%の才能をもつ奴には1000%の努力をすればいい。100%の才能をもつ奴には10000%の努力をすればいいのだけの話なんだよ。理論上はこんな簡単なことなんだ。単純明快、ゆえに難しいんだけどな。そもそも上限が100%なんて誰が決めたんだよ。そんなもん100%までしかできなかつた奴が決めたことだ。俺はそんなもの認めねえよ、そんなクソみてえなくだらないものに自分の尺度を合わせる気はさらさらねえよ」

それはおどける」とが得意な少年が見せた珍しい姿であった。

「まあ、それを嬢ちゃんができるかどうかは別問題だがな」

いつものように肩をすくめて、ちょっと挑発する。

「できます！」

その挑発にティアナは大声で宣言した。少年がニヤリと笑う。そんなとき、遠くのほうで少女の声が聞こえてきた。

「あ、見つけたよ俊くん。もつなのはのケーキだけタバスコ味に

したでしょっ！……って、これは

「よお、なのは。 前に話しただり？ ティーダさんのこと」

たつたそれだけでなのははすべてを語ったように深く頷いた。

「そつか……大変だつたね」

「くつ……」

なのはは少年の傍らにいたティアナをそつと抱きしめる。それはまるで優しい母親に抱かれたときのように暖かかった。なのはは抱きしめたまま、そつと自分のもつていた傘をティアナに渡す。

「風邪引いちやうから、ね？」

微笑んだ後、男性の元へと向かつたなのはは敬礼しながら喋る

「時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班 一等空尉の高町なのはです。故人の死因及びお名前を教えてください」

「ハツ！ 時空管理局 首都航空隊 一等空尉 ティーダ・ランスターであります。死因は違法魔導師との交戦による殉職であります。なお、犯人は捕まつた模様です」

「そうですか……ありがとうございます」

なのはは頭を下げてお礼をいつと、墓へと向き直る。

そして声高らかに宣言した

「勇気ある管理局員！　ティーダ・ランスターに敬礼！」

「…………え？」

「あなたの勇気ある行動を忘れません！　あなたのおかげで沢山の市民が笑顔で日々を暮らせます！　ほんとうに、ありがとうございます！」

少年が少女が男性が、自分の兄の墓に向かつて真剣な表情で敬礼する。

そのことが嬉しくてティアナ・ランスターは先ほどとは違う涙を流していた。

あれから10分後、一人が帰る時間がやつてきた。

「それじゃ、ティアナちゃん。　ティアナちゃんがくるの楽しみにしてるからね？」

「あの…………」

「ん？」

「ティアって呼んでくれませんか…………？」

モジモジと恥ずかしそうに眼をしながらもまっすぐとなのはに言つていくる

「うん！ それじゃバイバイ、ティア」

なのははひと撫でして立ち上がった。傍らには少年が、ニヤニヤみながらティアをみていた。

「お前って、天然ジゴロにもほどがあるよな。まあ、それはさておき嬢ちゃん ガツカリさせんなよ？」

ニヤリと笑いながら少年は少女とともに、一つの傘を使って帰つて行つた。

これがティアナ・ランスターの記憶

全てが変わった日の出来事である

「お密ひそかに、到着しましたよ？」

「あ、すいません」

過去を振り返つてゐる間にビービー田的田にはきたよつだ。ティアナはタクシーを降りながら思つ。

初恋の人は？ そう聞かれたら高町なのはと自信満々に答えるだろう。

一番の親友は？ そう聞かれたら恥ずかしながらもスバル・ナカジマと答えるだろう。

一番会いたい人は？ そう聞かれたら兄のティーダ・ランスターと瞳を潤ませながら答えるだろう。

では……一番気になつてゐる人は？ そう聞かれたらティアナは、思案顔になりながらあの日に会つた少年と答えるだろう。

あれから一度も会つてないのだ。しかしながら毎年毎年、ウイスキーと花が墓前に置かれているところからみると毎年来てくれることはわかる。

コシコシコシ

墓への道を歩き、もうすぐ兄の墓が見えてくるあたりから男性の声が聞こえてきた。

何事か？ そう思いながらティアナは少し足を速めたり着いた先には

「悪靈退散ツ！ 悪靈退散ツ！」

ひょっこりこのお面を被つた男性が兄の墓に向かつて塙を投げつけて

いた

「なにやつてゐんですか―――――つ――?」

「おうわつ――?」

男性は驚き大きくのけぞる。ティアナは駆け寄り胸倉を掴みながら問いただす

「人の兄のお墓でなにしてくれてるんですかつ――訴えますよ――」

「ち、違つんだよつ――スカさんから貰つたスカウターで悪霊がみえたから俺が退治しよつと思つて――」

「その前に私があなたを退治しますよつ――!――」

スカウターを取り上げながらティアナは睨みつける。

「ビックリした――……嬢ちゃんと鉢合わせるなんて――」

「え?」

小さくつぶやいた声をティアナは聞き逃さなかつた。

「あ、俺そろそろ行かない。スカさんとマ オカートする約束なんだよね」

「……へ?」

男性は慌てたように早口でそうまくしたてると、スルリとティアナ

から抜け出し来た道を戻る　寸前でふと何かを思い出したように振り返る。

「嬢ちゃん、どうだ？　あのときと比べると？」

心配するような挑発するような声に先ほどまで振り返っていた過去の少年と重なった。　いまだ少年は心配しているのだ。　せつと、これからも心配するのかもしない。

だからこそ　いまの自分がどんな状態にいるのか、どんな気持ちを持つっているのか、この心配性な少年に伝えよう

「はい！　とっても幸せです！」

兄は失つてしまつたけど、かけがえのない友と、大好きな人と一緒にいる。

そんな私はいま幸せだと実感できる。

「そつか。　まあ体のほうは『まだガツカリボディ』だがな」

「なつー？」

少年から青年へと姿を変えたあの人は、そう笑いながら颯爽と私の前から姿を消した。

「なんか……かわってないなあ」

「あれ？　ティア、まだしてなかつたの？」

「あ、なのはさん!」

青年が消えたといひから、大好きななのはさんが顔を出す

「えへへ……はやてちゃんが体動かしたいから、代わってほしつて頼まれてさ」

「はやてさんも凄い人ですよね」

「ティア、世の中にははやてちゃんよりヒドイ人がいるんだよ?」

「あつ……そなんですか」

といつかこの人、さらりと幼馴染をヒドイ扱いしなかつた?

「それより、ティーダさんがティアの報告を聞いたそつこまつてるよ」

「あつ、そつでした!」

そつしてお墓の前でなのはさんと一緒に手を合わせる。

お兄ちゃん、お元気ですか?

私は元氣でやつています。かけがえのない親友と、大好きな人。厳しくも私を支えてくれる人達に囲まれて執務官になるべく勉強中です。いまはまだ、経験も技術も足りませんがいつか立派な執務官になりたいと思います。だから、だから安心してください。

あなたの妹は、10000%の努力で頑張っています

カラソッ！

そのときティアナの耳には確かに聞こえた。

ウイスキーをいれたグラスに浮いている氷が溶けた音

青年が墓前に捧げた一つの酒の音、そこから嬉しそうにはしゃぐ声  
が。

12・墓前に捧げる一つの酒（後書き）

読了時間もここ具合なのでじりりりで一つ真面目な話を

## 13・六課へおでかけ！

『ユーノ、飯食い行こうぜ！』

『うーん……行きたいけど仕事で忙しいんだよねー』

『まじか……お前が欲しがつてたケモナー御用達の写真集を手に入れたんだけど』

『命に代えても時間を作ろ！』

「さすがユーノ、話しの分かるやつが友人で助かったぜ」

なのは達が仕事についている間に、暇だったのとユーノとメールすることに。ユーノは管理局の無限書庫で働いているエリートだ。そして俺は自宅警備のエリートだ。

「ひょっとこ君、ユーノ君とはどのような人なんだい？」

「えへっと、ケモナーですね。小さい頃に俺が色々と調教してたら変な方向に進んでました」

「ふむ……なかなか興味深い」

家に遊びにきていたスカさんがお茶を飲みながらそつなく

「というか、スカさんは何しこきたの？ 言つとくけど、なのはパンツとかフェイドのブラは俺のだから渡さないよ？」

「こまのセリフがどれほど矛盾するセリフかわかつていいかね？」

「ドクター、人のこと言えませんよ。」

スカさんの横で紅茶を飲んでいたウーノさんが冷ややかな声で言つてくる。どうしてスカさんにはウーノさんのようにきれいな人が振り向いているのに俺の場合はほとフュイトに魔力弾を撃たれているのだろうか。

「それにしても暇ですね」

「暇だね」

掃除も洗濯も終わつたのでやることがない。ポモンのほうもあまり進め過ぎると一人が怒るし。はははは、可愛いやつらめ。俺がネタバレしまくつたせいだろうけどな。そういうえば、フュイトにネズミをペンキで黄色にしてピカチューと嘘をついて誕生日プレゼントにあげたことがあつたな。バレてリンディさんにフルボッコにされたけど。あまりにもボコボコにされたんでクロノは怒る気がなくなつて逆に介抱してくれたつけ。誕生日といえばアレだ。なのはの誕生日ケーキにオリーブオイルかけまくつて出したら美由紀さんが横から掠め取つた事件もあつたな。あれ取つた美由紀さんが悪いのにボコボコにされたし。

「……おれ、ボコボコにされた記憶しかないんだけど」

「どうなつてんだ、俺の記憶

「お暇でしたらなのはちゃんが務めているとこ仕事場に行かれては？」

「「それだッ！！」」

ウーノさん、ナイスアイデイアですよー。いまの今まで気が付かなかつたけど、俺はなのはやフュイトの仕事場に行つたことがなかつた。これは……幼馴染として行つておく必要があるのでないだろうか！－

「やうときまれば早速電話しよ」

携帯を取り出しぶやてに電話をかける。

『ぬーべんぢらすていーら？』

「あいぬすとんぺりにーや」

『久しづりだな、宇宙一のバカ』

「久しづりだな、銀河一のアホ」

「いやいや、まちたまえつ！？ その前の不思議な呪文はなんなんだつ！？」

隣で聞いてたスカさんが指を突き付けながら問いただす

『ん？ なんや、誰かおるんかいな？』

「んー、友人がな」

『どんな関係なんや？』

「なのほどフリートの関係かな」

『それは大変やで』

『いつたい、はやての中であいつら一人の関係はどうなつているんだ  
るうか？』

『それこじりもどりしたんや？ つかこま仕事してんねん』

『はやてが仕事してん……だとつー？』

「おこおこおいおこおい、冗談は変態性だけにしどけ。船隊長が  
嘘なんてみつともないぞ？」

『ほんとうにしだるんやつて。シグナムの艦載機を編集中や』

『ノーノでくれ』

『だつたらなのはちやんとフリートちやんのパンチラ画像と交換や  
な』

『へつ……ー』

あの一人を人質にとるとほ……いい度胸してゐじゃねえか……！

『あの……ドクター。何故彼がそんな画像もつてゐるのかは訊いた  
たらいけないのでしょうか？』

『彼だからだよ』

そこの人、「うわーい。

『まあ、シグナムの魔女はちゃんと送るで。それよりどうしたんや？ 捕まつたん？』

「お前らって、俺見るたびにそれ聞くよな。そんな頻繁に捕まるわけないだろ」

「こいつ、この頃のおっさんとの勝率はそこまで誇れるものじゃないのが現状だ。どうしたものか。

「まあいいや。いやまあ、今日友人と六課に遊びにいこうと思ってるんだけどいいかな？ちょっとサプライズ的な感じにしたくて」

『サプライズ？ どんな感じで？』

「俺がニッフレスだけ装着した状態で登場するとか？」

『うちは友人を一つなくすんやな……』

「一つと話てる時点で友人のカーボリーから逸脱してるだろ」

『性奴隸？』

「いや、うしろに牡犬ですか！ 思つ存分ぶつけてください！」

まあ、なんとか六課へ行く許可は下りましたわ。

八神はやは耳から携帯を離し終了ボタンを押した。

「ふう……久しぶりやなあ、アイツと会うんわ」

「ただいまー！ ケーキ買つてきたよー！」

「おっ？ なのむちやん、ちゅうじいことこのこ

ジャンケンで負けてケーキを買いに行っていた高町なのは他多数が帰ってきた。ちなみに六課は訓練0・5割、あとは好きなことと適当に書類仕事をすることになっている。何かがおかしい気がするが現状で外からの不満も内からの不満もないのこれでいいだろう。そのかわり一人一人が訓練してくれるなのはやフェイト、ヴィータやシグナムに質問しているようだし、なんとかなるだろ。

「ん？ どうしたの？ はやてちゃんが頼んだパフェならスバルがたべちゃったけど……」

「スバル、四つん這いになりいや

「なにする気ですかっ！？」

愉悦を含んだ表情のはやてを前にしてスバルは恐怖を覚えなのはの後ろに隠れる。

「助けてくださいなのはさとつー！」

「わういーながら胸揉まないでよつーー？」

わしづかみしようとするスバルの手を振り払つ。

「おーい、なのは。あとがつつかえるから早く入つてくれよー」

「あ、ごめんね。ヴィータちゃん」

後ろのヴィータに言われてようやく部屋に入る。その後ろからゾロゾロと新人や副隊長陣も。まるでカルガモ隊みたいだ。

全員が入つて、席に座りシャマルとなのはで人数分の紅茶を配り各自選んだケーキを食べ始めたところで、なのはがはやてに先ほどの続きを促した。

「それではやてちゃん。たつきの話なに？」

「いやあね、なのはちゃんとフェイトちゃんに会いたいって人がいるんや」

「え？ 私にも？」

チョコレートケーキをエリオとキャロにあげていたフェイトが驚きながら振り返る。

「やうやく、ちなみに男性やで」

「『男性ですと』……」「

男性の単語を聞いた瞬間にスバルとティアが席を立つ。

「ダメです、純粋で純由なのはやくに男性なんて似合いませんー。」

「やうですよ、なのはさんはワンスターの女を継ぐんですからー。」

「継がないよーー。こいつの間に決まってるのー。」

「や、それで……なんで急に？」

フロイトが少しだけ目線をキッシュしてはやてを射る

「いやー……ひやは拒否したんやけど相手側が聞かなくて……うちの権力ではどうあるともできなかつたんや……」

「はやてちゃん……」

「はやて……」

顔を伏せるはやてになのはとフロイトは近づいてそつと抱きしめる。

「『めんな、一人とも……』

「大丈夫だよ。相手側には私とフロイトちゃんで断るから

「うん、大丈夫だよ」

「やつですよ、なのはさんに何かしたら私とティアがぶちのめします!!」

その瞬間、部屋にいる皆の心は一つになつた

「ちなみに、その人の職業はなんなの?」

「やつぱり、はやてより権力強いならそいつだよね……」

その一人の問いかけにはやはては軽く涙ぐみながら答えた

「性奴隸や」

「「それ職業つ！？」」

その瞬間、部屋にいる皆の心は恐怖でいっぱいになつた。

### 13・六課へおでかけ！（後書き）

ひょつといじはついに職に手に入れたのだった

機動六課　それはハ神はやてがあらゆる知人の後押しによつて作られた少数人数で動ける精銳部隊である。ＳＳランクのハ神はやてをはじめエースオブエースの高町なのは、その相棒とまで言われているフェイト・Ｔ・ハラオウン、一騎当千の力を持つといわれる守護騎士などなど、おおよそ通常では考えられない高ランクの面子が揃つている。まさに管理局のエース部隊であり、看板ともいえるであろう。

というは、建前であり実態は180。違うものだ。まず機動六課の立ち位置というのは一言でいえば“萌え担当”である。世界というのは驚くほど広く、その広さの分だけ犯罪は絶えない。そうするどどうだろう？　お偉い人たちは毎日毎日眉間に皺しわを寄せ、空気は悪くなるばかり、局員も人員不足によつて疲労困憊のブラック企業並みの勤務時間。あげくのはてには管理局員の身でありながら違法行為に走ろうとするバカも出てくる。

だがしかし　そんな管理局にも楽しみというものがいる。それが六課の部隊長であるハ神はやてが週一で発行する六課の新聞

#### 『乙女の秘密を覗いてみよ!』

である。何故週一かといふと、単純にはやてが面倒なだけである。ちなみに六課の人達は知らない。理由は簡単、怒られるからである。ふざけている？　そう思う者もいるかもしねないが、これを取り入れたことによつて管理局の中も大きく変わつた。まず肥えただけのデブのお偉いさんの顔が優しくなつていったのだ。そしてダイエットするようになった。後者はどうでもいいので前者

のことだけ述べると、激務の最中、ちょっとしたた寝してしまったせいで書類が終わってない管理局員Aさんは叱られるの覚悟でお偉いさんの所へと向かう。するといつもは怒鳴つてばかりのお偉いさんが菩薩のような笑みで失態を許し、あらうことかAさんの仕事をすらも引き受けたのだ。お偉いさん心境としては娘が頑張っているのだから、自分もがんばろうとかそんな感じだろう。

それだけではない。絶体絶命でいまにも瀕死の局員が新聞読みたさに生還してきた、なんて事例もある。

それに伴い犯罪者逮捕率はつなぎ上りだ。

さあ、ここで問題になつてくるのが当事者というか被害者になつている六課の面々なのだが、管理局員の全員が暗黙の了解・約定としてこう血判してある。

#### 『イエス六課・ノータッチ』

たまたま出合つたときには話してもよい。しかしながらその体に触れた瞬間、社会的抹殺と身体的抹殺の一いつがまつてゐるというこことだ。そして驚くことに全員がこれに納得している。

本当に管理局は大丈夫なのだろうか？

「だ～か～ら～、俺たちははやてから」承認つてるんだってば！  
「のすうとこどりつこい！」

「そうだね、私たちは正式な客人として招待されてる身だよ。  
君は門番程度の権力でたてつけとこいつのかね？」

「いや、ですから……そのお面を外していただきかないかぎりにじびつ  
にも中へ入れることができないわけあります……」

目の前で繰り広げられている光景を見ながらウーノは溜息を吐いた。  
正直などこか、この門番の言つてこむこととは正しいこと思ひ。

上半身裸でニップレスをつけた状態の男と白衣を着て頭に紙袋を被  
つた男を六課の敷地に通すのはとても危険すぎるだろう。

「なんでだよ！ ズボンだつて履いてるだろー！」

その調子で服も着てくれるとありがたいのですが……

「いや、それはわかつているのですが……ここはあの有名な六課で  
すので次元犯罪者が来る可能性も……」

「何を言つているんだね、君は。 わざわざ管理局に突つこんでい  
くバカな次元犯罪者がどこにいるのかね？」

ドクター鏡みてください。

ワーワー ギヤー ギヤーと騒ぎ立てる一人を横田にウーノは携帯を取  
り出す。

「あ、なのはむちやんですか？　いま六課の前にいるんですが　」

「え？　…？　俊くん六課に来てるの？　…？」

ウーノから電話をもらひたなのはは思わず普段は口にしない幼馴染の名前を口にだした。

「なのはむちやんがあのバカの名前いつなんて……よつめいのいろもで……」

長年一緒にいるなやは冷静にその認識する。普段はお題あひるがないのだから。

そんなはやてをよれに慌てた様子でなのはは部屋を動きながら耳口で電話の相手と話す。

「えへ……ちよっと本当に困りついぜ……」

『すいません……私が提案したばっかりに』

「えつ！？　いえいえ、ウーノさんなら大歓迎なんですね！　…あのバカだと何やらかすかわかつたものじゃなくて……」

なのはは、うへん、と頭をとがらせて考える。

「ちなみにいまにしてますか？」

まあ、六課の警備は厳重だからおとなしく待つているとおもひなご

……

『警備員殴つて侵入したところです』

「本物のバカがいたつ！？」

なのはの叫び声と同時にけたたましく警報が鳴り響く

「え？　え？　なになに、どうしたの？」

「いやいやフェイトさん、呑気に紅茶飲んでる場合じゃあないです  
つてばっ！　誰かが六課に侵入してきたんですって！」

クッキーを食べつつのんびり紅茶を飲んでいたフェイトにスバルが  
叫びながら答えるのだが

「うーん……なのはが指鳴らしてくるから大体侵入してきた人はわかつ  
るかな。まあ、のんびりと紅茶でも飲みながらみてるといいよ。  
私どなのはがお世話している相手がくると思うから。……それ  
より、なのはと私に会いたいって人遅いね。一刻も早く断りたい  
のに」

それはやてが言つた男性が警備員を殴つて侵入してきたバカだと知  
つたらフェイトはどうするのだろうか。

「は、はあ……お世話ですか？」

「うん、お世話かな」

納得したような納得してないような表情で頷くスバル

その時、やけに慌てたような声と足音。その後ろから何かを叫ぶふたり分の声が届いてきた。

なのはに視線を移すと、右ストレートを打ち込むために極限まで腰をひねっていた。

バタンッ!!

「みんな、大変だッ!! 侵入者が出てみたいだぞー!!」

「アンタだよッ!!」

「ぶへあッ!!?」

『スカさ――――――――んッ!!?』

「……え? スカさん?」

ドアを開けた瞬間、なのはは顔面に向かつて打ち込んだ。それを食らった男性はわけのわからない声を出して部屋から消えたのだが、自分の予想した相手と違つたので、おそるおそる自分が殴つた相手を確認することに。

「スカさんッ! 大丈夫か、誰にやられたんだつー?」

「ドクターフ！ しつかりしてください！」

みると泡を吹いて倒れている男性に必死に呼びかけている幼馴染。泣き目でゆすっている友人。幼馴染が自分の存在に気付いたのか、じちらをみていた。

「い、いらつしゃい。機動六課によつてそ」

「氣をつける――！ ロイキングがギャラードスに進化したでおおおおおおおおお――！」

「ち、違つもんつ！ 不可抗力だもんつ――！」

片足を上げウインクしながら指をピンチと立てて可愛らしく言ったのはに対して、ひょつとはスカリエッティを抱きしめながら大声で叫ぶのであった。

## 14・コイキングの本氣（後書き）

Bボタン連打

## 15・マスクコット作戦

「え―――――っ!? それじゃ、はやてちやんがわしき言った  
私たちに会いたい男性ってコレ――?」

「そうやで

スカさんがギャララスによつてＫＯされてから10分、俺は床の上で正座をさせられていた。こいつらがいうには反省の意味も兼ねてらしいのだが……真に反省すべきはなのはだと思つんだ。 だつてスカさん殴つたじやん。 泡吹いて鼻血流してたじやん。 流石の俺も警備員に鼻血は流させてないぞ。

「いやー、おかげでなのはちやんが本気で殴つた映像も撮れたしよ  
かつたで」

「うう……あれば不可抗力で……その……本当はコレを殴るつもり  
だつたのに……」

もじもじしながら怖いことを言わないでください。 スカさん、俺  
を救つてくれてありがとう。

「まあまあ、ええやないか。 コレも本気でなのはちやん達を心配  
してきてくれたんやで?」

「せうだせうだ! もつと言つてやれ、はやてー!」

「めんな、下から必死こいてパンツ覗くつとしている奴を弁護で

きんわ「

地に伏せながらなんとかスカートの中の樂園を覗こうと土下座体制でなのは達をみているひょつとにはやはては冷徹な目を向ける。その視線に気づきひょつとは瞬時に正座の体制へと戻る。そして周囲を2・3回見回した後、袖を拭いながら溜息をついた。

「ふう……危ない危ない、バレるとこだつたぜ……」

「もう遅いよ、なにもかも遅いよ！？　はやでちやんのセリフ聞こえなかつたのつー？』

「え？　どうしました、高町なのはさん。　そんなに大きな声を出してはいけませんよ？」

「誰のせいだと思つてるのつー？』

「ちなみに、そろそろこち／＼パンツは卒業しましちよつね？」

「個人の勝手じゅんつー。　ところが、いつの間にパンツみたのつー？」

「！」あん、当たるとは思わなかつた

「N N N f u x r d c t y o i k j u h y g r t s x d c f v - ga - .  
？」

なのははバインディングひょつとの両手両足を縛り、近距離から魔力弾を放つ。

「なんだか……なのはさん嬉しそうですね」

「これがそう見えるなら病院行ったほうがいいぞ、スバル。 どうみてもあいつを抹殺しようとしてる途中だろこれ」

横にいるヴィータに話しかけるスバルだが、ヴィータはうんざりしたような様子で答える。 もしかしたら、今回のようないどがしおつちゅうあるのかもしない。

「けど……どうしよう。 ねえ、ティア、その人が同棲相手なら私たちはやるしかないんだよね…… って、ティア？」

みると友人であるティアが指をワナワナ震わせてカタカタと体を動かす。

「あれ…… もしかしてお兄さん……？ お面も一緒に、声も一緒に？ うそ？ あんな人類の最底辺をいってるような人が私が気になっていた人……？」

「あの…… ティア？」

相方の様子がおかしいのに気が付き、そつと触れようとすることでおでティアがいきなりひょっとこのお面をつけていた人に向かって駆け出した。

「あのー、お兄さんですよね、ティアです！ お墓で会ったー！」

「ちょっとまつてくれ、いきなり妹感覚で話されても困る。 君が妹を名乗るなら縞パンをはいてフリフリのスカートを履き、ネクタイで可愛らしくきめてからまたきたまえ」

「いや、そうじゃなくて……お墓の前で会いましたよね！？」

「会つてないよ、俺は。君が会つたのは俺とは別の人だと想つ。もつと恰好よくてもつと優しい……そんな素敵なお男性だろ？」

荒げるティアにひょっとこは冷たく引き離す。ティアはがっくりと肩を落とし、とぼとぼとスバルたちの所へ戻つていった。

「……よかつたの？ 俊くん」

「いいんだよ、これで。嬢ちゃんの中では恰好いい男性なんてイメージが出来上がってるかも知れないしな。それを壊したくないんだ」

「でもお墓に塩撒いたんでしょ？」

「寺生まれのトさん直伝の方法だぞ」

「知らないよ、そんなの。もつ……そんなことしかやダメでしょ。次やつたら私が塩撒いたらやうよ？」

「潮吹いてくれるの？」

「死を撒いてあげようか？」

レイジングハートを機動させながら俺の頬にペチペチと当てくるのはヤクザそのものです。ギャラドスからレッククウザに突然変異したぞ、こいつ。とりあえずバインドを解いてくれたので、ひとしきり見渡すこと。」

「なんとこりか……アレだよな。六課つて女多いな」

「せやな～、うちがじきじきに選んだからな～」

「ああ、なるほど。それは女があくなるわけだ」

はやしなら無駄な男なんていらなーし、いれないとひつな。

「しかしさやて殿、<sup>おなじ</sup>女子が多いことマスクットなるものが需要ではないか?」

「マスクットならなのはちやんがあるで。毎日毎日、かわいすぎて萌え死にやつや」

「まあ、なのはがマスクットなのは認めるかな」

「ねえ、それって壇上でいいんだよね? ちなみにそのマスクットはどんな役をするのかな? みんなに笑顔を振りまいてやうとか…?」

「「オチ担当かな」」

「ひどこよ! 一人ともつー?」

まあ、いこじやないか。見てる分には面白こし。

「じりせ、アレやう? 自分がマスクットになつたとかいうふや  
う?」

「べつ」やなんこと思ひてないけど、マスクしてくだせこ

いかん、願望が少し漏れてしまつた。

はやては溜息をつく。

「ほな、うちが満足するやうなマスクの案をだしてみ。それで判断するで?」

「いんなのはどうだりやつへ。ひょっとこハム太郎とか」

「鳴き声は?」

「トウクシ」

「18禁 < e 「は?」

「ひょっとこハム太郎」

「誰も声は?」

「ヒヤイツー?」

「つりの負けや、採用」

「大反対だよツー?」

はやてと互いに肩を抱き合ひながら健闘を讃えているところでのはからストップがあつた。やはりなのはで遊ぶのはめちゃくちゃ楽しい。俺も息子も嬉しそぎて反り返つてこる。

「ところでスカさん、田を覚まさないね」

「それだけのはちやんの右ストレートが強かつたんや」

やはりギャラドスは伊達じやなかつた。

## 15・マスコミ作戦（後書き）

なんか長くなっちゃうな予感がある。  
あと土曜まで更新はなしです。  
スカさんいまだ起きないし。

## 16・[速報] スカさんが生還した

「スカさんが氣絶してから1時間。 それからスレ建てよつと思つ  
んだけど」

「せひほつ、どんなスレタイにあるん?」

「〔ハイキングの逆襲〕 スカさん余命1時間 「はねるハイは竜  
になり飛翔する」 みたいなスレタイでこいつがなと」

「よし、ひが建ててくる」

「やめとよー!?」

はやとウキウキ氣分でスレを建てよつとしたところ、横から悲鳴  
混じりのなのは声が聞こえてきた。

「え? どうしたの、なのはさん。 もといギヤラズスよ

「わっ、ちがうひばー! だ、だから……アレはもやも闇違いで

「……

「ほんとは俺を殴る予定だつた?」

「うそ」

「おーい、スレ建てよつへへへ~」

「あこよー」

はやてが自分のＰＣでスレを建てようとする　が、それをさせまいとなのはもはやての机に迫つてくるので後ろから俺が羽交い絞めすること。

「もつよせ……！ 戦いは終わったんだ……！ お前は頑張らなくていいんだよー！」

「（）で頑張らなかつたら私は大変なことになつちやつよー。」

「胸揉んでいいつー？』

「人の話し聞いてよつー？」

「ハア……ハア……なのはタソのおっぱい……つて、あぶなあつ！？ 後ろからレバ剣飛んできたつー！ オッパイ魔人がレバ剣飛ばしてきたつー？』

「貴様を葬ればミッドの平和を守れるよつな『気がしてな

あながち間違いじゃないから反論できない。 そういうふしている間になののはやての元にいつて、ＰＣの電源を切つてしまつた。くそつ……！ このおっぱい魔人め！

「俺となののはのスキンシップを邪魔するなつー！」

「それはセクハラというものだ

「シグシグのおっぱいだつてセクハラもんだろうが 謝るから、レバ剣を投擲しようとしたしないでつー？」

昔から守護騎士たちは冗談が通じないんだよな。とくにシグシグなんて全く通じないし。

ふいにフロイトと視線が合ひ。逸らすフロイト、見つめる俺。

「……我が家のおっぱい魔人は俺と視線を合わすのも嫌なのか……」

「う、違つよつー。でも、ソレで田線を合わせると面倒なことこ巻き込まれそうだったしつー。」

そういうながら、キャロとエリオを後ろに庇つフロイト。お前はどんだけ警戒してるんだよ。

「べつにー、ちょっとシグシグにフロイトの胸囲の脅威を教えてあげようと思つただけなのに。なー、ロヴィータ」

「うーあたしに振るのは宣戦布告と受け取つていいんだな？」

守護騎士一の口づゝ娘は俺に向かつてアイゼンを構える。

「まあまー、口リには口リの魅力があると高校時代に もう言わないから振りかぶらないでくれ」

ブンブンと空を切り俺の頬にまで届いてくる風を受け、両手を上げ降参の構えを取る。

「せういえば、お前はせうきから『マイツのこと』“スカセニ”って呼んでるけどダレなんだ、結局のところ？」

そういうつてスカさんを指さすヴィーダ。人に向かつて指を指しちやいけないつて習わなかつたのかコイツは。

「……ら、ロヴィータちゃんダメでしょ。人に指を指しちゃ

卷之三

ボ  
キ  
ツ

指がああああああああああああああああ!!?

おかしい、あいつ絶対おかしい。  
絶対おかしいぞ。

急いでシャマル先生の元へ

「シャマル先生、助けてくださいっ！　おっぱいと口リの相乗効果が襲つてきます！」

「……………」

「口り巨乳なんて認めないんだよっ！－」

「そういう話じゃないですかよね？」

困惑しながらもシャマル先生は指を治してくれる。 やつべえ……  
シャマル先生、便利すぎ。 シャマル先生いればフルボッコにされ  
ても大丈夫なんじゃね？

シャマル先生から治してもらひ、いまだに構える一人に向かってしゃべる

「スカさんはスカさんだよ。 下着泥棒してるんだ」

「おいちょっとまで、その紹介文がすでにおかしいだひ」

「発明者なのかな？ なんか家に行つたとき大量のロボットがあつた。 全部壊しちやつたけど」

「よく仲良くなれてるよな」

まあ、変態同士だからな。

ロヴィータの隣にいたシグシグが疑惑の念を向けながらスカさんを見る。 どうしたんだろう？

「どしたの、シグシグミシル」

「今度言つたら前歯折るからな」

「お前らは苦痛以外で俺と『ハニケーション』ができるのかつ！」  
？」

絶対アレだ。 はやてがアレンセいで守護騎士たちも頭がアレになつてるんだ。

「けどよ……“スカ”って聞いたら次元犯罪者のジェイル・スカリエッティを思い出すんだよな～」

ロヴィータの眩きにウーノさんの肩が一瞬ピクリと動く。ロヴィータはそのまま視線をフェイトのほうに

「そういえば、フェイトはスカリエッティのことに関して調べてるんだよな？」

「う、うん」

「まじで？ フェイトタソちょっと教えてよ」

「あ、ちょっとまってて」

フェイトは自分の机に戻ると大きなファイルを引出から取り出し、戻つてくる。それは大きく大きく膨れ上がっておりそれだけでフェイトがこれに真剣に取り組んでいるだとわかる。ロヴィータはスカさんことを次元犯罪者だと言っていたが……あのスカさんがそんなだいそれたことできるのだろうか？

フェイトはファイルを一枚めくつて紙に書いてあることを読み始めた。

「えーっと、ジェイル・スカリエッティ……[ヨーヨー](#)さんで、間抜けな次元犯罪者は？ っと打ち込むと[ヨーヨー](#)さんからもしかしてジェイル・スカリエッティ？ と質問される。ミッド調べ 僕でも捕まえられそうな次元犯罪者 殿堂入り。つい笑ってしまう次元犯罪者調べ 殿堂入り。ワンパンで捕まえられそうな次元犯罪者 殿堂入り」

『ぶふうつー？』

そこにいた全員が思わず笑ってしまった。なのははやてに至つては痙攣を起こしてゐるほどだ。かくいう俺も笑いを抑えられない。

いや、流石に〇〇〇一の攻撃は卑怯すぎるだろ。

なのはが痙攣しながらフュイトに問いかける

「フュ、フュイトちゃん……それを追いかけてるの？　あ、ダメ、笑いすぎてお腹痛い……！」

「う、うるせーなあっ！　私だつてこんな人だとは思つてなかつたよつー？」

むしろそんな奴がどうやつたら次元犯罪者になれるんだ？　フュイトが調べてるつてことはアレ関係かな？

脳裏に浮かぶのは黒髪で俺のことを坊やと呼んだ女性。手を伸ばし、掴んだはずなのにそれを振り払われた女性。俺たちをフュイトに会わせてくれた女性であり、一図なほどの痛々しいほどの娘への愛情を魅せていた女性。あれからどうなつたか分からぬ……けど、きっと幸せな夢を見てるんだと思つ。娘さんと一緒に。

「どうしたの、気分悪い？」

「へ？　いや、なのはとフュイトとやつてるとこを想像してたんだ」

「頭力チ割るよつー？」

「なにいつてるんだよ。あんなにも可愛い声で鳴いてたじやないか

「それ夢のことだよねつー？ なんで夢のことを現実であつたかのよつて話しあやつのつー？』

みるとフヨイトのほうも、必死に誤解だと主張している。ほんとこいつらの困つた顔をみるのは面白い けど、脈がないというのも考え方だ。ここいらで一発イケメンなところを魅せないといけないのではないだろうか？

といつことは置いといて、どうやらみんなには氣付かれてないようで安心した。ほら、なんか主人公みたいになっちゃうじゃない？

ウーノさんが顔を赤くして俯いている。そりやそうだよな、スカラさんの世間にに対するアレが180°。別べクトルで有名になつてる人だしな。ウーノさん頑張れ！

皆が笑つてゐる最中、突然ドアが開いて声が室内を支配した。

『大変です！ ミッド郊外にて犯罪者が出た模様！ なお犯人は六課に対する侮辱を行い、六課が出動するのを狙つてゐる模様です！ どうしますか？』

「侮辱って具体的にどんなことなん？」

冷静に聞くはやて。 流石は部隊長

『はい、六課はババアが多くさるー！ とのことですー。』

「全員、出動用意！ 塵一つ残さへんでー。」

声を荒げながら呟くはやし。流石部隊長、田が殺意に満ちている。俺が女性たちの並々ならぬ殺意に震えてこると、その殺意に当たったかのようにスカさん起きてきた。

「ん……！」

「おはよう、スカさん。いまから六課による犯罪者公開リンクチが始まるナビ、ビツツするへー？」

「……どうせやつたり管理団の萌え担当を怒りせしむことができるのはなんだい？」

「まあ、乙女には色々と踏んではいけない地雷があるんだよ」

ギヤラードスなんか逆鱗に触つたようなもんだからな。

とつあえず比較的冷静だったシャマル先生に頼んで、見学する」と「」。

「スカさん、そろそろ紙袋取ってくれない？ 袋全体に血がこびりついて怖いんだけど」

いまのスカさんは手なホラー通り怖いです。

16・[速報] スカさんが生還した(後書き)

今週のめだかボックスが面白かったので、やつぱ更新する。

安心院さんかわゆす。 江迎は善哉とお幸せに

## 17・キレるはやでパン用意

なんでもシャマル先生から聞いたところこれが六課初の出動みたいだ。まあ、管理局の萌え担当だしぶつづは出動とかないよな。

ほんでもつていま俺とスカさんの目の前で繰り広げられている光景はなのはから新人達に贈るデバイス贈呈みたいなもんだね。このデバイスたちがこいつらの相棒になるわけだ。

「はい、これでみんなデバイスは渡ったね。これからはそれが相棒になるからみんな大事にしてね！」

『はーい！』

……なんだろ？、この幼稚園に訪れたような感覚は。

とりあえずみんなデバイスをもらつてはしゃいでいるので、俺もなのはに近づいてデバイスをもらつことに。

「ねえねえ、なのは。俺のデバイスはないの？」

「丁度いいのがあるよ。はい」

つ綿棒

「これでア ル開発しろっていつのかよ！」

「まったく違うよ！？ ビつして皮肉がつづじないのつー？」

「フェイト！ 優しくお願い！」

ムーンウォークでフェイトに迫る俺。全力で逃げるフェイト。またしても求愛行動は失敗してしまった。

「おーい、そもそも行くぞー

部屋の入口でロヴィータがみんなを呼ぶ。 口のくせにだいぶ偉そうだな。  
一発ガソリンと言いたいところだがこちらが一発ガソリン  
とアイゼンで打たれるのでやめておこう。

ぞろぞろとなのはの後ろを歩く新人たち。 そんなカルガモ行進を  
みながら六課に喧嘩を売った犯罪者がどんな人物なのかワクワクす  
るのであつた。

犯罪者は使われていないビルに閉じこもっていた。窓ガラスはどちらどころかひび割れており、扉は錆ついてて閉められそうにない。そんなビルの3階で犯罪者は叫んでいた。

『かかつてこーい、六課のババア！　へーい、六課ばジビツてる、  
ヘイヘイヘイーー！』

「……あいつ頭トチ狂つてるんじゃねえの？」

「うん、普段の俊くんを見てるようだよ」

正直、俺がコイツと同レベルとか納得いかない。俺のほうがギリギリ下回ってるだろ。

「それにしてもフェイトちゃん。俊くん抱いてて大丈夫？ 重くない？」

「うん、大丈夫だよ」

なのはが俺を抱いたまま空中制止してくれてるフェイトに声をかける。フェイトはそれに笑顔で答える。

「『』めんなー、フェイト。『』つしても近くで見たかったんだよ」

俺は『』んな時じやないと』『』らの活躍とか仕事ぶりとか見ることできないし。フェイトもそれがわかつてくれてるとか笑顔で首を横に振った。

「ううん、きにしなくていいよ。けど、あんまり無茶はダメだよ？ バリアジャケット着てないんだし」

「ユニクロのジャケットなら貸してもらつたんだけど、それじゃダメなの？」

「いや、根本的に間違つてるから。ジャケットならなんでもいいわけじゃないから」

「どうか、9歳の頃から俊くんジャケットがつけばなんでもいいと思つてるよね。ほんと成長しないよね」

「お前の胸もな」

「フエイトちゃん、落としていいよ」

謝るんで本気で離そうとするの止めてください。

「それよつさ……はやひどうにかしらよ」

右に視線を移すと、歯ぎしりと憎悪と怒りで暗黒化してはやでがいた。いや……まあキレるのはわかるんだけどな？ 下手したらこいつ犯罪者殺しかねんぞ。せっかく、非殺傷という素敵なものがあるんだし部隊長が殺しなんてしたら田もあてられん。

「あ～……ちょっと危ないね」

「危ないにもほどがあるわ。幼馴染から人殺しが出るなんて御免なんどどうにかしたほうがよくな？」

「たしかに、ちょっとかけあってくるね」

なのははそのまま水平移動してはやての近くまで行く。あー……はやて言語失つてるわ。とりあえずちょっと時間がかかりそぐんでフエイトとおしゃべりすることに。新人たちとスカさんたちはへりの中を見学。デバイス渡した意味なくない？

「ところでフエイトタソ。ヒリオとキャロは元気にしてるかな？」

せつかく会えたのに話をしてないけど」

「うん、大丈夫だよ。ヒリオもキャロも素直でいい子だし、結構

会えるの楽しみしてたみたい」

「え？ まじで？」 それじゃ婚姻前の挨拶に行こうぜ」

「それじゃ、この使い方が絶対あつてないよね？！」

リアクションとるたびにフォイタソのおっぱいが当たつて俺のザンバーがフルドライブしそうだ。

「おまたせー、はやてちゃんと交渉してきたよ。私が代理で執行することになった」

「ねむーー? やめなよー キヤウデスじやなこつてこつてるで  
しょー。」

いや、お前は危険すぎるだろ。

「ほら、犯罪者なんか命乞いしだしたぞ」

「……人間は賢い生き物だからな」

「納得いかないよおつ！」

もう！ なんで私だけいつもからかわれるのかな。 だいたい女の子に向かつてギャラドスとかおかしくないっ！？ わたしまだ19歳だし、あんなに怖い顔してないんだけどっ！

なのはは一人犯罪者と対峙しながら幼馴染に憤慨していた。 後ろからはフェイトとひょっとこの能天気な会話が聞こえてくる。

だいたいなによ、ちょっとフェイトちゃんのアレが大きいからってフェイトちゃんに抱っこされちゃって。 ニヤニヤしちゃって。  
そんなに私は嫌なんですかー！ すいませんねー、大きくなくてー！ って話だよね。 それはアレだよ？ フェイトちゃんよりか大きくないけどはやでちゃんよりはあるもん。 絶対平均だと思うもん。 それなのになににかにつけて私のこと苛めてきてさ、ほんつと小さい頃から変わつてないんだからー。 3歳の頃からずっと一緒になんだよ？ もつといつ……私に頼つてくるものじゃないの？ 無職なんだよ？ 普通私のことを頼つてさ、こう……『お願い、なのは！』 みたいな感じじゃないの？

訣然としない想いがなのはの中をふつふつと沸いてくる。

高町なのはという女性は俊がはじめて女の子と遊んだ相手である。そしてそれからもずっと付き合いが続いている関係だ。だからこそ知っている。世界で一番彼のことを知っているなのはだから知っている。彼の泣き顔も怒り顔も笑い顔も膨れつ面も死のうと思っていたときの顔も絶望の中にいた顔も 全部知っている。

だからこそ、俊は自分を一番に頼つてくると思ったのだが、蓋を開けてみればそうでもなかつた。それは幼馴染として嬉しいことであるのだが、……どうにも面白くなかった。

あー、止め止め。  
ても無駄だよね。  
あんなデリカシーのない相手のことなんて考え  
さつさと終わらせてシャワー浴びよ。

なのはは気付いていなかつた。溜息をついている隙に犯罪者が泣きながら聖母に祈りながら魔力弾を撃つことに。

「避けろ！！  
ナツバ！」

「へつ？ うわあつ！？」

後ろからの声で現実に戻つたのはは目の前の魔力弾を慌てて避けだ。これでもエースオブエースだ。これくらい造作もないことだ。

命中 ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガツ ！！ ひよつと全弾

『アンタが当たるんか―――――っ！？』

「わ、私は悪くないよ？」

遠巻きに見ていた新人たちの突っこみと、後ろを振り向いて冷や汗を流すなのは。

やがて煙が晴れ、顔を下に向いているひよつといと困惑したまま抱きかかえていたフエイトが姿を現した。

ひょつとこせ何もいわすフロイトの肩を吊り、シャマルがいる地点を指さす。

シャマルの所に降ろすフロイト。 シャマルは既に治療の準備をしていた。

『え？ 本当は恰好よく避けて、ベータみたいになのはにひつひつもりだつた？ けど、フロイトと喋つてたらタイミングを逃して当たつた？ そり……それは大変だつたわね。 予想以上に痛かつたの？ ユニクロ訴える？ うん、確実に負けるからそれはやめましょつか』

どうやら本当に痛かったようでの後もシャマルが通訳のよつな形で会話すること。

『そもそもなのはが避けるとは思わなかつた？ へつぽこの癖に？』

「…………わたしも魔力弾当てかけやおつかなー…………」

小さくつぶやくなのはに聞こえないはずのひょつとこが小刻みに肩を震わせる。

それが少しだけ面白くて、なのははひょつとこに聞こえたるよつこをべりだした。

エースオブエース 高町なのは。 犯罪者すっぽかして幼馴染に日頃の恨みを晴らすことに専念する。 これが本当にエースオブエースで大丈夫なのだろうか？

一方犯罪者は

「誰かババアか言つてみいや！　おお？　はよ、いつてみい！　言つた瞬間うちがその脣引き裂いて//シナにしてしまつてしまつこにしたるでーー！」

キレたはやでにフルボッコにされていた。

17・キレの仕やへり用心（後書き）

ちよつとだけ意地悪な、なのはなでしたとわ

## 18 犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるゾン！

六課の初出動が終わり、ほとんどなにもしていない新人達や一方的に犯罪者をフルボッコにしたはやてたちがにこやかな笑顔を浮かばせながら職場で菓子を食っていた。

「いやー、初出動もちゃんとできて六課も幸先がええなー」

「お前が一方的にボコって、新人たちはそれをみていただけだけどな」

「そういう俊くんは自滅して、シャマルさんに泣きついてただけだけどね」

……出動から帰ってきてからというものの、どうもなのはからキツイ言動が飛んでくる。あれか？ りゅうのまいで攻撃力でも上がったのだろうか？

俺がシャマル先生に泣きついたことはかわらないのでここは黙つて受け取つておくけど。

「にしてもあれだよな。魔力弾つてやっぱ痛いわ。19歳になつたからもう大丈夫だろうと思つてたけど……これは成長するとかの問題じゃないよな」

「俊くんの頭は成長しないけどね」

……俺にはサッパリ理由がわからない。しかし……しかしだな。

……好感度が下がっているような気がするのは確かなんだよ

な。

そっぽを向くのはにどうしたもんかと頭を悩ませて居ると、トトポを独り占めしていたはやでが急に顔を上げた。

「いやー、みんなで祝賀会やらへんー? 初出動達成おめでとう祝賀会やー!」

『おおーーーーー! 部隊長がはじめて眞面目な』と書いた紙がするー。』

「ちよっとまちいな。 つけはいつだつて眞面目やつたで?』

『……』

「なんで黙るつー?』

それはまあ、普段のお前がおかしいからに決まつてるだろ。

「でも、祝賀会つてどこのやるの? 私たちは19歳だからまだ大丈夫だけキヤロやエリオはまだ子どもなわけだし……お店を貸しきつてやるのは反対だよ?』

「大丈夫や、フュイトちゃん。 場所はなのはちゃんとフュイトちゃんの家でやるー。 一人のペットが一匹あるけど大丈夫やろ」

「おい、誰がペット。 もつといふ……愛玩動物とか別の言い方があるだろ」

「いや……そういう問題じゃないよね? 遠まわしに俊は人間じゃ

なにって言われてるんだよ?」

フュイトが可哀想な目で俺を見てくる。

「まつは、君と一緒にいろいろのなら俺は人間なんてやめてやるわ

「でも人間じゃないなら結婚とかできへんで?」

「やつぱこまのナシでお願いします」

それは困る。 めひやくひや困る。 どれぐらい困るかといつと俺の息子が勃たたないくらい困る。 いの頃使ってないから最近スネットるんだよな、こいつ。

「どうか、〇〇を出すのは俺じゃないからなんともな~。 フュイーとなのはが〇〇出すのなら俺は何もいわないよ」

あくまで俺は居候の身。 色々部屋を改造したり至る所に盗撮カメラを仕込ませたりしてるので家長はフュイトとなのはだ。

「う~ん、私は別にいいよ。 キヤロヒリオも行きたかったらどうじ。 なのはは?」

「そうだね、私も別に」

『なのはさんの部屋に侵入できるなんて!… やば、私この場で絶頂しそう…』

『落ち着くのよ、スバル!! まだ早いわ! なのはさんが使っている枕やベッド、小物用品で絶頂したほうが遥かにイケるわよ!!』

『流石だよ、ティアー!』

「……わたしとフロイトちゃんの部屋に行くのは禁止でお願い。といふか一階だけ開放といふことで」

「……打倒などいやね」

狂喜乱舞中の新人二人を見ながらはやては溜息をついた。

「えへっと、なのはとフロイトとはやてとシャマル先生とロヴィータとシグシグとザッフィーと新人4人にはスカさんとウーノさん。うひや～……結構な量を作らないといけないのではないか」

場所は移動して我が家で、俺は人数を確認して悲鳴を上げていた。

家に帰るまでの間にも色々と問題が起つたのだが面倒なので省略することに。

後ろのほうではパーティーゲームで盛り上がっている女の子たちの声が聞こえてくる。

『なのはちゃん、負けたら脱衣やで!』

『えつ！？ そんなこと聞いてないよー あ、ダメ負けちやう！？』

あ～～～～！

『ぐふふふ…… も、脱ぐんや!』

「その役目、俺が受け持とう おい、なんで部屋に結界張つ  
てんだよー！ これじゃ見れねえじゃねえかー！」

鍋とか皮抜きとか千切りとか料理のこと全てを投げ出してエプロンを投げ出しズボンを脱ぎパンツを脱ぎ捨てながら部屋に突撃したところ、はやてがそれを先読みしていたかのように結界を張っていた。

力いつぱい殴るが結界はビクともしない

『それとも、フライテルさんも脱衣の时间やで～』

『ちよ、ダメええええええー!』

「なんで俺には魔導師としての力がなかつたんだ！！　なのはとフ  
エイトが裸で俺のことをまつてゐるというのに……！　こんなこと  
じゃ、男失格じやないか！」

「その前に人間失格じゃないのかね」

「服を着ろ」

「わが八代院殿……」

結界の前で全裸になつたまま膝から崩れ落ちていると、傍で呆れ声

と悲しそうな声が聞こえてきた。前者はスカさんとザッフィー。後者はエリオである。

「ああ、結界張る前に追い出したんか。

そしたらへんはぬかりないんだな」

「まで、全裸のままひらひらくな。ぶら下がっているモノが左右に揺れて気持ち悪い。まず人間として最低限の誇りを取り戻してからこじらにこじ」

「せういえばザッフィーの毛でオ——したらどうなんだろ?」

「話を聞け馬鹿者つ!?

ワン「姿のザッフィーに怒られた。あとザッフィーの毛でオ——したらチコが絡まって大変なことになるかもしれない。こう……飲み物を飲んだときに対外に出す所からスルリと毛がはいつてきそうだよな。

脱ぎ捨てたものを拾い履く。流石衣服。聖母マリア様に包まれていくるような気がして落ち着くぜ。

「にしても久しぶりだな、エリオ。元氣にしてた?」

「あ、はい!」

赤髪のエリオは子ども特有の笑顔で俺の質問に答える。「うんうん、この笑顔を見る限り大丈夫そうだな。

「とにかくエリオはなに食いたい? 夕食作るの俺だし、特別に食

べたいもの作つてあげるよ」

「えつ？ いいんですかっ！？」

「うむうむ、可愛いエリオのためならお兄さん頑張つやけりつよ

「あの……それじゃ……」

少し恥ずかしいそうに顔を赤くするエリオ。『めん、エリオ。俺、そっちの毛ないんだ。

やがてエリオは何かを決断したように言つた。

「僕、お肉がいっぽい食べたいです！」

「そつかー、肉かー。俺も好きだよ、肉。つまこもんな

もしかして肉を沢山食べたいことを言つのが恥ずかしかったのかな？

「うーん、それじゃ手羽先とトンカツにでもするか。おっし、お兄さんに任せなさい！」

「ンと胸を叩く。それを聞いてエリオが嬉しそうな声を上げる。

まあ、流石にそれだけでは健康に悪いので洋風パスタやカルパッチョとかも作つてみようかな。

「とにかくエリオ。ここに、コスロリ服とウェーブグがあるんだけど……ちよっと着てみない？」

一瞬にしてエリオの顔が困惑の表情に変わる。

「こや、ちゅうとだけちゅうとだけ。ほんと数秒でいいから、ね？」

「あの……ひょっとしたら、顔が怖いんですけど……」

右手に「コスローリ服、左手にカイシグをもつてハアハア言いながらエリオに迫るときは立派な犯罪者である。

「こや、なのほやフロイトに着てもうおうとわざわざ黙ったのにあいつら俺の前ではきてくれないしね。いのせこ、エリオに着てもうおうかと」

「ザフライラさん、助けてください。」

ザフライラの助けもあえなく、ひょっとして捕まつたエリオは「コスローリ服を着せられたのだった。

18 犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるやン！（後書き）

とうあえず男子パート

## 19・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるゾーン（裏側）

時は少し前に遡る

「いやー、ありがとうな。 なのはちゃん、フェイトちゃん」

「べつにこれくらい大丈夫だよ。 私もフェイトちゃんもいつも  
ことしたかったし」

「うそ、ほんのつて面白いよね！」

ひょっこりが台所で食材の確認をしている頃、大きな部屋に集まつてはやてはなのはとフェイトに頭を下げていた。三人のほかにもエリオやキャロ、ティアナやスバルや守護騎士の面々、そして何食わぬ顔で参加してきたスカリエットティとウーノがいた。

「それにしてもみんなお疲れ様！ 初出動は全員怪我もせず終わってよかったです！」

「……なのは、ひょっこりのこと忘れてねーか？」

「え？ 何言ってるの、ヴィータちゃん。 そんな人いないに決まつてるじゃん！」

にこやかな笑みを浮かべるなのはに、ヴィータはそれ以上なにも言えずに黙るだけだった。

「もしかして、なのはさん怒ってるんじゃないの？」

「……それはあるかもしないよ。『じつしょつトイア。』なのは  
さんの機嫌がよくないと部屋に侵入する機会<sup>チャンス</sup>がなくなつちやうよ」

「いや、それより雰囲気 자체が暗くなつてだな……」

新人一人とヴィータが「ソソ」「ソソ」と集まって会議をする。他の者は困ったように苦笑い。そんな空氣をじつじゆつかと思案するはやて。

「あ、気にしないで。普段もこんな感じの扱いだから」

そして事実を告げるフロイド

『わつ少し扱によくしましょつよつー・?』

「一般人のランクにまで上がつたら私たちも扱い方をかえるんだけどね~」

どうやら高町なのはといつ女性の中では彼の人間性は一般人以下のランクに位置しているらしい。といつてもそれはなのはだけに限つたことではない。おおよそ、ここにいる女性陣は彼のことを一般人ランクだとは思つていなかろう。せめてミカヅキモランクが打倒などころだ。

「けど、ひょっとこわんつてなのはさんやフロイドさんのことが好きなんですね?」

「じつせ口だけだよ、口だけ。私がなんど俊くんの口車に乗せられたか」

「そりいえば、なのはって子どものうちにビスコ食べてたら魔力量が上がるって嘘話を一人だけ信じてたよね」

「うわ……フェイトちゃん。それはいわないでよ……」

顔を赤くしながらフェイトを睨むのは。その視線を受けて自分がどれほど迂闊なことをしたのか悟ったフェイト。

「なんですか、その話つー詳しく述べてくださいっ……」

『私たちも聞きたーい！！』

ハイエナのようになのはの周囲をまわりながらインタビュアーのよう手をマイク代わりにして押し付ける新人に、困った顔をしながらなのははかわす。

「ふ～む……それならちよつと試してみる?」

『ビスコを?』

「いやいや、ひょつとこのことや

頭に?マークを浮かべる全員にはやてはどこからか取り出した伊達メガネを装着して女教師のように説明しはじめた。

「あのバカは夕食の準備をしている最中や。そこでウチがこの部屋全体に結界を張る。当然魔力を持たないアイツは結界に入ることができないわけや」

「あれ? でも俊くん微量だけで魔力あるよ?」

「大丈夫大丈夫、あれは“ある”うちに入らんで。ランクにすらできんし。説明を続けるで、その結界の中であたかもパーティーゲームをしているふうにみせかけるんや。そしてあいつが私達の楽しそうな声に気付いた瞬間に一芝居つつ！私がなのはちゃんやフェイトちゃんに脱がそうとする芝居や！あ、もちろん芝居だから声だけでええで。もつとも……脱ぎたいなら別やけど」

『ぬーげ！　ぬーげ！　ぬーげ！　ぬーげ！』

「ちよつ！？　脱ぐわけないよつ！　しかも仮にも上司に向かつてそれはあんまりじやない、スバルとティアつ！？」

なのはの脱がない宣言に絶望しきつた表情でフローリングを転がるスバルとティア。いつたい彼女たちはどこに向かおうとしているのだろうか。

「まあ、そんなわけで演技に色をつけるために男には退散してもらうで。もつとも、退散しなかつたらあのバカが厄介なことになるけど」

「ふむ、同士を怒らせるのは私としても反対なのでね。ここは素直に従つておくとしよう。では……エリオ君にザフェーラ君いこうか」

「まで貴様、いま卑猥な単語を口にしなかつたか？」

スカリエッティに手を引かれながら部屋の外へ出していくエリオと自分の名前の一文字が変わっただけで卑猥な単語に早変わりしたザフィーラがスカリエッティを睨むながら出て行ったのを見届けてはや

てが結界を張る。

「ちーて、まづは……本当にパーティーゲームしようか！」

演技をするのにも限界がある。 今回は音をあちらに届けないといけないのでどうしても本当にゲームをする必要がある。

「それじゃス ブラやろうよ！ 私強いんだよ！」

やる気満々なのはにはやはては挑発的な笑みで返す。

「ほ……なのはちゃんがねー。 まあ、それならウチが軽く捻つてあげようかな」

「へへ、はやてちゃんがなのはに勝てるでしょ？」

バチバチと火花を散らす一人。

かくしてパーティーゲームのはずが二人の真剣勝負へとかわつていった。

3分後、そこには自分のゲームの弱さを痛感しているエースオブエースの姿があった。

『えげつねえ……いつさい手を抜かなかつたぞ……』

『……なのは涙田じやないか……？』

「な、泣いてないもん！」

「うつすらと田元に罪をためながらなのはが言つ。

「な、なのはは頑張つたよ！ うん、すつじく頑張つた！」

なのはの姿をみてフェイトがすかさずツオローする。なのははそ  
んなフェイトの胸に飛びついていく。頬に当たる豊満で豊潤な胸。  
それを顔面全体で味わいながら、なのははそつと自分の胸に手を  
当てる

「フェイトちゃんの裏切り者つー！」

「ええつー？」

「ちょっとまで、なのは。なんであたしの所に真つ先にきた。  
自分の一部の膨らみを確認してからこひにきたよな？」

「ヴィータちゃんがいるからまだ大丈夫だもんつー！」

「どういつ意味だコラッ！」

自分より下の者のところにいく。人間の賢い知恵である。

「まあ、それはそれとして。そんじゃ実験はじめよつか

「そりいえば、この実験でなにがわかるの？」

「……あいつの人間としての最低度かな」

その時、Jの場にいる誰もが思った。

『元から最低の部類だけどな……』

その空氣を肌で感じたのかはやでが努めて明るい声でなのはに呼びかける。

「ま、まあのさちやん。 とつあえず実験しどこか。 色々面白いもんが見れるかもしねないし」

「えへ…… それじゃあ」

「おっし、いくでへ。 『なのはひやん、負けたら脱衣やでー。』  
はい、このセリフ」

「う、うん。 『えつ！？ そんなこと聞いてないよー。 あ、ダメ  
負けちやー？ あ~~~~~！』 エへつと、これでいいの？」

「おっけおっけー、上出来や。 それじゃ、結界でうひひり側だけ見  
れるように操作してあこつがじつしているか見物しよか

はやでが軽く指パッチンする。

そしてクリアになる視界。 映し出される幼馴染の姿

オープ

ひよつとい パンツを脱ぎ捨てようとこころの最中

## クローズ

「！」めんみんな！　あいつ予想以上にバカやつた！！」

一瞬で結界をもどしたはやでがみんなに向かつて土下座する。それはまさに視界に映し出された化け物。凶器を持ちながら狂喜し幼馴染の裸を見れるということで狂氣した変態の姿。それはか弱い少女たちを絶望へ恐怖へどん底へ叩き落とすには十分であった。ある者は自分の母の元へと飛び込み涙を流した。ある者はハンマーを取り出して彼の息子を叩き折ろうとしていた。ある者はこれにかこつけて最愛の人の胸を揉みしだこうとしていた。ある者は顔を赤くしたまま自分の幼馴染がここまで男だったのかと嘆き、悲しんでいた。

そうして彼が知らないうちに彼女たちの彼の認識が評価がかわっていった。

## 19・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるゾーン（裏側）（後書き）

スカさんが逮捕されないのが不思議です。

真面目回をそろそろ入れるべきかどうか迷いますね。

50万PV達成したみたいですね。ほんとうにありがとうございます。  
した。

大人三人がゆうに入れる台所で、男性3人と「スロリ服を着た男の子1人の声が聞こえてくる。

指示を出しているのは黒髪に日本男子の平均身長をわずかばかり超えている男性である。その男は自分も手を動かしながら淀みなく他の者に指示を出していた。

「スカさん、トンカツ用の肉にはハチミチを塗つておいて。 そうする」とによつて冷めてもおいしく出来上がるから。 ザツフィー、手羽先は一度揚げでよろしく。 エリオはパスタもつてきて」

自身はサーモンのカルパッチョを作りながら指示を出すと、そこに恐る恐るといった感じで、スバルとティアが近づいてきた。

「あのー……はやてさんが手伝つてこい、といつので来たのですが……私達にできることがありますか?」

「ああ、それはちょうどいい。 それじゃ、このカルパッチョを運んでくれ。 おーい、そろそろテーブルのほうに移つてくれ~!」

『はーい!』

「うわあつー ティア、このカルパッチョおこしそうだよー!」

「ほんとだ……!」

あくまで男性との距離を取りながら皿を受け取ると、二人は喜色満

面でテーブルへと皿を運んでいく。

男性から呼ばれた者たちはゾロゾロとテーブルへと席についた。普段はなのはとフロイトとい

ょつとこしか座らないのでそこまで大きいのを買つておらず、テーブルには6人しか座れないのだが

「えへっと、来客ようにもう一つだそつか。 フロイトちゃん、ど  
こにあるつけ?」

「え? 私知らないよ?」

『なのはへ、右奥の部屋に来客用のあるから取つてきてー』

「あ、はーーー!」

二人でクエスチョンマークを台所から男性の声が飛んでくる。その声でよみやべりに置いたのかの場所がわかり慌てて取りにいくこと。

「……なんで自分の家のことにわからないんだ?」

「まあ、家のことは大抵アイシングやつてるし。 アイシングのほうが詳しこやね」

ヴィーターの返事にほやてが答える。

「おまたせー、テーブルもつてきたからみんな座つてーーー!」

「とにかく、なのはわやん。 席順はどうあるか?」

「あ? ……え? やつとか」

「うううやくなのははその考えに至った。主席のテーブルは6人までしか座れない。そして今日来ている者たちは合計で14人。引き算すればわかると思うが、半数以上の者が主席テーブルには座れないのだ。

「まあ……うううときは大抵年上に主席を譲るのが当然なんやけど……」

「なのはさんの横がいいです！」

「なのはさんの上がいいです！ もしくは私がなのはさんの下で！」

「といつてるよに、新人一人が譲らんのでな！」

はやて自体はこのことを嬉しく思つてゐる。六課は自分の身内で固めた部隊だ。隊長陣たちは身内なので仲がいいのは当たり前なのだが新人たちとの温度差がはやてには気がかりだったのだ。それもいまでは雲散霧消しているわけだが。なのはには悪いが、なのはに感謝していふはやてである。

「えつと……とりあえずティアとは一緒になりたくないかな」

「ひどいなのはさんつー？ あの一夜はなんだつたんですかつー？」

「どの一 夜つー？」

ティアがなのはに突撃して抱きつく。

そういうしていふうちに、ザフィーラとスカリエッティが料理がの

つた大皿を運んでくる。

『おおーーー!』

思わず漏らす感嘆の声。

「へへ、前みたときより結構レベル上がつてそうやな」

「あいつ、料理にかんしては真剣に勉強してたもんな」

テーブルに置かれた料理をみながらはやてとヴィータが話し合つ。

「……もしかして、ここまでの料理が作れるひょっとこなんて凄い人なんじゃ……?」

「うん……それは思つてきた」

新人一人が料理をみて呴くと、何人か首を縦に動かして同調する。

「こ、これっ! か、カルボナーラです!」

『おいしいぞー、エリオ。 カルボナーラだよ』

「あ、カルボナーラです!」

若干緊張気味でございちない足取りで、エリオがカルボナーラを運んできた。

ゴスロリ衣装を身に纏いながら

「……もしかしなくても、ここまで見境ないひょっとこさんって頭がおかしい人なんじゃ……？」

「うん……それは知つてた」

新人一人がエリオの姿みて呟くと、全員が首を縦に動かして同調した。

ひとまず料理を作り終えたので俺もテーブルに着くことに。

「……あれ？ 僕の席がないんだけど」

「ああ、あっちにあるぞ」

律儀にみんなが待っている中で、ヴィータが窓の方を指さす。

そこにはダンボールで作られたテーブルがポツンと置いてあった。  
コップに入ったお茶と一人分取り皿に乗せられたご飯が哀愁を誘う。

「いやいやいや、せめてそっちのテーブルに……」

『こないでください！』

「ええっ！？ 僕なにかしたかなっ！？」

料理を手に取つてなのは達が出したテーブルに移動しようとしたところで、そのテーブルに座っていたキャロ・フェイト・ヴィータ・エリオ・ウーノさん・スカさん・ザッフィーに却下された。……あれ？ いまさっきまではここまで拒絶されてなかつたのに。

そんなことを思つてゐる間にはやてから、 いただきますの音頭が行われる。 それを皮切りに各々が嬉しそうに料理を食べててくれるのだが

「……うーん、 スバルとエリオの食欲は予想外だな」

勢いよく食べる二人を前に、俺が作った料理がどんどんなくなつていく。 料理がなくなること自体はとてもうれしいことだ。 なんたつて、 料理は食べられてこそ意味があるんだし。 しかしながら、ここまで勢いで食べられると……

「……料理を作るほうに徹しようかな」

すでに消えつつある料理を眺めながら台所へと向かつ。 今回の主役は六課の面々だし、 楽しんでもらえるならそれでいいや。

食べる側から作る側に早々シフトチェンジした俺のところにスカさんがやってきた。

「どうしたの、 スカさん？ 酒とかタバコとかないよ？」

「いや、 そういうわけじゃないんだがね。 君一人では大変そうで手伝おうと思ってね。 それに、 色々とあそこにいたら私も危ない身なのだよ」

「窃盗したから?」

「もつと大きなことや」

そういうながらスカさんは隣にたつて、俺のかわりにジャガイモの皮をむいてくれる。それにしても窃盗より大きなことってなんだろ? 盗撮? それとも小さい女の子に声をかけたとか?

手を動かしながらも思案する俺の頭の中に、スカさんの声が届く。

「君からみて、フロイト君やエリオ君はどうみえるかい?」

「どうみえるって?」

「いや……なんといえばいいのだろうか。その……人生を謳歌している、みたいな感じで」

「そうだなあ……一人の表情を見ればわかると思つけど、毎日楽しそうに過ごしてるんじゃないのかな?」

「そうか……」

スカさんはそれだけ言って、作業に徹する。先ほどまでとスカさんの態度が違うのでこちらとしては驚くばかりである。何か悪い食べ物でも食べたのだろうか?

「スカさんどうしたの? なにか悪い食べ物でも食べた?」

「いや……ちょっとと思うところがあつてね。君は考えたことないかい? “もしここ”で、ならば違う生き方もできたんじゃないのか

”と。今日、六課のみんなを見ていたら、少しうつ思つてしまつてね

「まあ、それは考へたことあるけどな」

そんなこと考へていても、仕方がない氣があるけどね。セーブやロードがついてるような生易しいゲームじやないんだから。

「そんなこと言つたら前になんか進めないよ。それに実際、神様が出てきて『君は不幸な人生だったね。私が昔に戻してあげるから、いまよりよい未来になるように、よりよい人生になるよう頑張りたまえ』なんて言われても困るよ。単純に面倒くさいし、思い出補正もなくなつてしまつ」

「ふむ……そんなもんかな。それにしても、君にも思い出といつものがあるのかね？」

「失敬な、これでもなのは達と過いしてきたんだ。色々な思い出はあるよ。嬉しかつたこととか、悲しかつたこととかね」

「ほひ……差支えなければ教えてもらひよとは可能かい？」

「冗談なんか一切ない氣配でスカさんが聞いてくる。

「よしてくれよ。野郎の過去話ほひまらないものはないわ。どうせ聞くんだつたらお話し大好きな女性陣の過去話でも聞くことだね。ぶつ飛ばされる覚悟は必要かもしないけど」

肩をすくめながらおどける俺にスカさんは苦笑を漏らす。さすがのスカさんもあの女性陣のお話に突撃するよつなことはしないみたい。

「確かに野郎の男性の過去話なんて私たちにはそこまで関係ない」とだね

「そのとおり、ウーノさんがスカさんを呼ぶ声が聞こえてきた。どうやらウーノさんが質問攻めにあつてるみたいだ。流石は女の子だよな。

「ほら、ウーノさんがお待ちかねだぜ。頑張つてくるんだ、スカさん」

「うむ……私はこいつこつことにあまり強くないのだが……」

トボトボと歩くスカさんの背中は少しだけくたびれたような、ゲソつとしてるよう感じた。

広い台所に一人きり。後ろでは華やかな女性陣の声。

もしも神様がいるとしたら、神様は管理局の局員以上に忙しい身なんだと思う。だからこそ、あのときだつて忙しかったからこそ、あんな事件が起こつたのだ。

いまだも覚えている、白黒モノクロの世界から色を取り戻してくれた彼女の笑顔を。

いまだも覚えている、元気に手を振りながら飛行機にのつた両親のことを。

『白黒の世界でも、彼女だけは変わらずに俺の前で笑っていた』

祝賀会も時間が経つにつれ、終わりムードに達してきた。 というか、一部の者から眠たいという意見が出たのでなし崩し的に終わりをむかえた。 まだ眠らない者たちはゲームをしたりトランプをしたり好き勝手にしている。 俺はそれを背中で感じながら食べ終わった食器を回収し、片付けることに。

今日はなんだか一人芝居をするのも面倒なので、ちょっとだけ昔のこと思い出してもよ。 べつに誰に話すことでもないので、どこかにいる宇宙人に怪電波でも飛ばしながら。

突然だが魔法使いつて信じるか？ 少なくとも俺は信じるね。

俺の両親は魔法使いだった。 正確にいふと父親が。 “魔法使い”、そう言つてもなのはやフェイト、はやてのようにデバイスで魔法を使えるわけでもなく、かといって漫画のような不思議な超常現象を起こせるわけでもない。 誰もが持っている、誰もが出すこのできる魔法 ありたいていにいえば笑顔なんだ。

父さんは色んな国や色んな世界の人達を笑顔にしていった。 紛争

地帯でもパンツ一つで突つこんでみんなを爆笑の海に巻き込んでくだらない争いを止めさせてきた。いつも豪快に笑って失敗したときだって手を叩いて笑っているひとだった。そんな父さんが俺も母さんも大好きだった。

当然、父さんは世界中のスターであつたのでその分嫌われてもいた。戦争が起ることで儲けが出る者や、戦争を引き起こした連中からみれば当然のことだろう。父さんは田の上のたんこぶなわけなんだからな。

父さんはそんなことを気にするほど心を持ち合わせていないので、“好き勝手にやらせねばいい”。そう言っていた。

そんな時らしかった、土郎さんと出会つたのは。父さんも母さんも土郎さんも詳しく話してくれなかつたからわからないけど……結果的に土郎さんの説得もあつて俺たち家族は海鳴に引っ越すことになつたんだ。はじめてきたときは驚いたのを覚えている。ほどほどに自然があつて空気がうまくて人柄の良い人たちが集まつていたのだから。

引っ越ししてからすぐ、俺たち家族は高町家族に挨拶にいった。その時だよ、なのはと出合つたのは。

「え、じんにちは……高町なのは……です」

「え? なに? 聞こえないんだけど?」

「ひやつひ……」

「怯えさせじどすんだよ、バカ」

父さんが俺の頭を叩いてくる。いやいや、まじで声が小さくて聞こえないんだって。

「『めんなー、なのはちゃん。ビックリさせひやつたよな。』こいつは俺の息子で俊つていうんだ。なのはちゃんと同じ4歳だから仲良くしてくれるかな？」

「う、うん……」

父さんは、腰を下ろしてなのはと呼ばれた女の子と田線を合わせた後に頭をなでながらゆづくつと話す。なのはと呼ばれた女の子のほつも小さく頷いていた。

「えへ、俺男の子と遊びたいよ。こいらへんにも男の子いるんでしょう?」

「男つてのはそちらへんにでも転がってるもんだが、女の子つてのは手を伸ばさないと届かないものなのさ。いいからお前も大事にしとけ」

「ヒルな笑顔で俺の頭をぐしゃぐしゃ撫でる。この大きな手が俺は大好きなんだ。

「ははは、まあ俊君も遊びたい盛りなんだうな。俊君、うちの恭也と遊んできたらどうだい?」

向かい側にいた静観な顔つきのカツコイイ人が後ろに立っていた兄

ちやんを前に出しながら問ひ。

「恭也、俊君と遊んでくれるかい？ 私たちはひょつと話しあごをしてくるから」

「はい、わかりました」

「あー、だつたら私もなのはと一緒に遊ぼう。ねえねえ、みんなで遊ばない？」

恭也と呼ばれた兄ちゃんの隣で二三三と見守っていた女の人があの小さい女の子の肩を抱きながら話しかけてきた。

「ん？ まあ、べつにいいが。俊君もそれでいいかい？」

「うーん、まあいいよ」

正直なところ、俺は恭也さんと野だけで遊びたかったけどここで俺だけが反対しても空気が悪くなるだけなので止めておいた。そして俺たちは何やら真剣に話す親たちを横目に公園に行つて遊ぶことにしたんだ。

「もーいーかい？」

『まーだだよー』

公園に遊びに来た俺たちはなのはのお姉ちゃんだといつ美由紀さん提案の元、かくれんぼすることになった。

「もーいーかい？」

恭也兄さんの声が響いてくる。早く隠れ場所を見つけないと……！  
そう思いながら辺りを見回すと、中が空洞になつている可憐らしい  
猫の遊具を見つけたので急いで入ることにした。絶好の隠れ場所  
だ。

「……あ？」

「あーっと……『めんなさい、高町。すぐ出ます』

「あ、いこよ。むづむづこちやんがしづじめてるし。ここまで  
たらつかまつちゃうよ~。」

“ひつぢら、美由紀さんがサインを出したのだろ？。あんなあんな  
としながら恭也さんが公園内を散策していた。俺はそれに田を離  
さないよつに注意してゆつくりと遊具の中になつた。

「お邪魔します……高町」

「あ、うん……」

高町が座っていたところに座る俺。一人とも何も喋らず、喋らつ  
ともしない。

どれくらいの時間が過ぎただろうか。ふいに横からか細い声が聞  
こえてきた。

「ねえ……なのってよんでも？」

「え?」

「おなまえで……よんでもほしーの」

……ああ、苗がじやなくて下の名前で呼べとこ「ひ」とか。確かに考えてみたらやうだよな、今後とも家族ぐるみでのお付き合いをしそうだし、それなのに高町なんて呼んでたら誰がだれだかわからなくなつちやうもんな。

「ああ、『めん。 わの……』あつかなくて」

「「ひ、ひつさ。 べつこここよ。 わの……』いそぞくからわをつむかれてるよなひ……」

「お、おひ」

〔会話終〕

「の町じゆくまでは全くとこいつこせど女友達がいなかつたのが祟つたのかまつたく」のナとの会話ができるない。

焦る俺。 なんとなく「の空気が嫌で状況を打破しようとはのほつを見る。 なのはは胸の前で大事そうに猫のぬいぐるみを抱えていた。 耳は茶色で全身の色は白と黒で統一されてる、可愛いけどちよつと配色がおかしくないか？ そつとこたべなるよつな猫だった。

「あのや……猫、好きなの？」

勇気を出しても聞く」と。しかししたがってから会話が広がるかもしれない。

俺の願いが叶つたかのようになのはは大きく頷いた。

「うん。 ここのちちゃんはね、ママとパパがなのはの誕生日プレゼントに買ってくれたの。 かわいいでしょ？」

猫のぬいぐるみを俺のほうに持つて、手を足をふりふり揺するなのは。 ぬいぐるみはふわふわの毛並をして、これを抱いて寝たら、気持ちよく寝れるんだろうなー、といつのが率直な感想。

「うん、かわいいね。 なんかふかふかもふもふして、気持ちよさそう」

「でしょー。 なのはもこつもこれ抱いてねてるんだ」

「へへ、そうなんだ。 咱前とかあるの？」

「こちやん！」

「……どうくんが？」

俺の疑問を無視してなのはは口を軽快に饒舌に動かす。

「あのねー、ここのちのところが、ふかふかっとして、もふもふっとじてるからしつかやんなの。 かわいでしょ？」

「……せやな」

それからもなのはのしほりやん談義は続いた。 やれ、どじひくんが可愛いだの、じーじが気に入ってるだの。 正直、同じことの繰り返しだつたけど、嬉しそうにほしゃぎながら、楽しそうに笑いながら喋る姿をみてるのはとても心地よかつた。 それと同時にこの子といふと自分の心が温まるよつな、そんな……不思議な感覚にも陥つた。

やがてなのはの談義が一段落すると、砂ジヤリを踏みしめる音が聞こえてきた。 見つかった……！ そう思つたときには時既に遅し。 美由紀さんと恭也さんが優しく眼差しで俺たちを見つけていた。

「みつけたぞ、一人とも。 これでかくれんぼもお終いだ」

「あつ……みつかっちゃつた」

「まあ……しようがないよ」

あれだけはしゃいでいたんだし。 見つかるのもしょうがないよつな気がする。 もしかしたら恭也さんは俺たちの話をずっと傍で聞いていて頃合いを見て出てきたのかもしけない。 そういうのも心に思つてしまつた。

それから俺たちは4人で手をつなぎながら帰つた。 恭也さんと美由紀さんを端に置きなのはと二人で仲良く手をつないだ。

公園での一件いらい、俺は高町家族が好きになつた。 父さんの友達である土郎さんは剣道？ 剣術？ をやってくるらしく、恭也さ

んと美由紀さんもそれを習つていて。何度も何度も、俺とはは通い詰めた。というか、なのはの場合は俺が引っ張りだしたんだ。木刀を振り交差に交わる姿は素直に恰好よかつた。憧れてもいた。士郎さんはそんな俺の心境に気付いたのか、よく誘つてくれた。自分にはそんなことできないよ。そういう俺に士郎さんは笑いながら『できないのは当たり前だ。練習しなければ、握つてみなければできるかどうかなんてわからぬからね』そう言つて背中を押してくれた。恭也さんと美由紀さんが模擬戦をする横で一生懸命見よう見まねで木刀を振つたことを覚えている。はじめは振り方すら満足にできず木刀を落としたことも覚えている。それでもなんどもなんどもなんどもなんども挑戦して、ようやく振れたのを覚えている。振れた瞬間に士郎さんの拍手、恭也さんと美由紀さんからの言葉。なのはのはしゃぎ方、そして少し前から観戦していた父ちゃんと母さんの笑顔を覚えている。

いつまでも、こんな日が続くと思つていた。

家では父さんと母さんと遊んで笑つておしゃべりして、朝になつて家にまで迎えに来たなのはと公園で遊んで家で遊んで、士郎さんや恭也さん、美由紀さんと一緒に稽古して夜には両家族一緒に夕食を食べる。

そんな幸せがいつまでも続くと思つていた。

ただ、運命は残酷で小さこ子どもの些細な幸せもいつも簡単に奪つてしまつた。

それは唐突に呆氣なくなんの連絡も知らせもなく合図もなく準備も

なくやつてきた。

遠い国で飛行落下事故、乗客全員行方不明

そんな文字に起こすと19文字程度の文で、幸せは音を立てて音もなく見る隙も与えず見せびらかしながら崩れ去った。

5歳の誕生日を迎えるときだつた。

この瞬間、俺は孤独になつたのだ。

なにもが茫然と佇んでいる間に終わつた。遺体なんて見つかるはずもなく、葬儀は形だけ執り行われた。それでも、葬儀にはいろんな人が駆けつけてくれた……みたいだ。ありえないほど多くの信頼関係と交友関係をもつっていた父さんは色んな人に悔やまれながらお墓が建てられた。

そして問題は俺をどうするか、という議題になつた。

正直どうでもよかつた。父さんと母さんがいない世界なんていてもいなくても同じだつた。その証拠に俺の世界は白と黒で染まつていた。モノトーン越しから色々な人が俺に言葉を投げかけてくれた。そのどれもが醜悪で醜くて見境なくて穢れていて俺は首を黙つて横に振るだけだつた。子どもはピンカンに何かを感じれるときがあると聞く。まさに俺はそのときその状態だつたんだと思う。

そんな俺の肩を強く離さないよう抱いてくれた人がいた。全てを取り仕切ってくれた土郎さんだ。

十郎さんは一皿

『へんなか?』

やつ言ひててくれた。それに黙つて頷いたのを覚えている。

「やだよ、十郎さん。家に残りたいよー。」

十郎は困惑しながらも冷静に後に腰を下す。

「俊君、君の気持は痛いほどわかる。けどね、君が高町家にく  
るどこのことはあの家には住めなことこのじとなんだ」

「なんで? ねえ、なんで? 僕があの家に残つていないと父さん  
と母さんが困っちゃうよ?」

小さく子どもは一つ一つのことを理解しても前後の繋がりを理解し  
ていない場合が多い。まさに俊がその状態である。

自分が高町家に行くことはわかっている。しかしそれが家にいら  
れなくなる。ということにつなげられないのだ。お泊り会のと  
きと回りじよづに思つてこらのだ。2・3日行けば家に帰る。そ  
う頭の中で作られているのかもしね。

十郎はやつべつと優しく俊の田端に合わせてしまふ。

「こっかい、俊君。君のお父さんとお母さんはもういないんだ。  
この世にまらないんだ。世界中どこをさがしたつてもういない。

君もみただる？　葬式を「

「けど父さんも母さんもお墓の中にはいなかつたよ……？　それに約束したもん、父さんも母さんも必ず帰つてくれるつて。ほり、このひょいといのお面をもつて待つてれば帰つてくれるつて」

士郎は思わず目をそらす。 非常な現実に耐えられない子供に自分がどう説き伏せればいいのか。 このギリギリのところで正氣を保つとしている子供になんといえばいいのか。

『俊を頼むわ。 僕はちょっとくら笑わしてくれるからさ』

そう言つて出て行つた友人。 自分だつて友人を失つてしまつたんだ。 だが、この子の場合は家族を失つてしまつたんだ。 一人で独りになつてしまつた子どもに自分はなんと声をかければいいんだろ？ なんと声をかけることが正解なんだろう。

「……そつだね、そつ……しょつか。 お父さんが帰つてくれるまでしばらくは高町家にいよう」

「うんー」

答へなんて出せるはずがなかつた。 こうして騙すことしかできなかつた。 大人は騙す生き物だ。 昔ＴＶで言われた言葉だつたが、今日ほどこの言葉がしみ込んでくることはなかつた。

父さんと母さんがいなくなつてから世界がおかしくなつた。 机もテレビも電柱も車も食器も床もガラスも色画用紙も本棚もミカンも

ゲームもなにもかも、白黒の世界になってしまった。会う人会う人、白と黒でできていてまるで化け物と会話しているような気分になつた。士郎さんも桃子さんも恭也さんも美由紀さんも、全て平等に均等に化け物だった。

やはり自分は守られていたのだ。偉大な父さんと母さんに。だからその一人がいなくなつて守ってくれる人がいなくなつて、世界は弱い自分に牙を剥いてきた。

子どもながらにそう考えていたのを覚えている。

なにもかも嫌になつた。いつそ死にたいと思つた。自分には辛すぎる。独りで生きていくのは辛すぎる。

だからひょっとこのお面片手に部屋の中でうずくまつてた。こうしていれば、父さんと母さんが来てくれるかもしれない。優しい目で俺のことを抱きしめてくれるかもしない。

士郎さんは喫茶店を作ると言つていた。桃子たちが喜んでいたのを覚えている。自分には関係ないことだ。

コンコンと誰かが自分の部屋をノックする。返事は返さない。正確にはいうならば返事を返せない。ここにのぶ喋つてなかつたので、すっかり声の出し方を忘れてしまつた。どうやつたら声を発することができなのか？ どうやつたら横隔膜を震わせることができのか？ 今の自分には全くわからなかつた。そして興味もほとんどなかつた。人間と人形の違いは“形”か“心”的違いだけと聞いたことがある。もしそうならば、いまの自分はまさに人形だらう。

ゆっくりと瞼をおろす。今日もまた眠りてしまおう。そうすれば夢の中で一人に会えるかも知れないから。

そのとおり、下を向いていた俺の前に白と黒で体を統一された、茶色の耳の猫が現れた。

「ニヤーニヤー、」んなとひねてると風邪をひくニヤー？

「……」

「どうしたにや？　だいじょ「づかにや？」

それは調子はずれの声だった。

その娘は、白黒の世界にいてもなお　あのときの姿のまま、俺に笑顔を向けていた。

変わらない笑顔で不变の笑顔で、どんな闇も明るく照らすようになんな氷も溶かしてしまつように、笑顔で俺の正面に座つていた。

「……あ……」

「どうしたにや？」

「なんで……」

「ん？」

「……なんですかわらないの？　なんでなのはだけは……かわらないの……？」

死んでいた声が驚きによつて戻ってきた。もう発すことができないと思つていた声が戻ってきた。

なのはは首をかしげる。

「かわらない……？ 俊くん何言つてゐの？」

「だつて……だつて……」

この世界はモノクロで、全てが化け物になつていて生きる希望なんてなくて

震える手が、なのはへと近づく。その存在を確かめたく、その存在に触れたくて震える手でなのはへと近づく。そんな俺の手をなのははゆっくりと抱きしめてくれた。離さないよつて、守るように、強く強く握ってくれた。

「どうしたの？ なんで泣いてるの？ どこか痛いの？」

「ううん……大丈夫……大丈夫だから……もう少しだけこのままに

……

なのはに触れるたびに触るたびに、暖かいものが体に漫透していく。

世界に色が満ちていく

世界が鮮やかに染められる

なのはを強く抱くたびに、握るたびに、感じるたびに、世界に色が

戾つてこべ。

零れ落ちる涙のしずく

溢れ出る想いの結晶

もつ届かぬ親へと愛情

その全てがぐれやけになり泣くところ行為に終着される。

それでも、なのははまつと抱きしめた。 泣き叫んでも喚いても黙つて相槌を打ちながら聞く。

どれほど泣いただろ？が、目は赤く腫れ声はかすれ鼻水で汚れている。 やがてどちらからでもなく、そつと体を離す。

「おひついた？」

「……うん」

今更ながら恥ずかしくなつて顔が赤くなるが、それを晒されたくない一心で顔を下に下げる。

「そのひよつとい……」

なのはが指を指す先には父さんからもひつたひよつといのお面。 いまならすんなり受け入れることができる。 父さんと母さんには行方不明になつたんだと。

決して死んだわけじゃない。 だから、いつか会えると待つている。

「やのひょつとい」、面白いよね。 なのはは好きだよ、そのひょつとい」

「そりなんだ。 でも、おかしくない? 例えば……俺がお面つけたりしても?」

「ううん、まったくおかしくないよ。 だつて、そのお面だけで笑える人がいるんだもん。 それつて、とってもすごいことだとのは思うの。 笑えるつていう行為は簡単なようどつても難しいの。 その難しいことをこんなに簡単にできるんだもん。 それつて一種の魔法みたいだよね」

「魔法……」

『いいか、俊。 僕たちはな、魔法使いだ。 人が幸せになつたとき、そこには笑顔が発生する。 だが、笑顔つてのは存外難しいものなんだ。 自分では笑顔を出すことは難しいんだ。だからこそ、俺みたいなやつが必要なんだよ。 シリアスだつてコメディーに変えて悲劇だつて喜劇にかかる。 そんな奴が世界には必要なんだ』

昔、父さんが言つていた言葉を思い出す。

いまならわかる。 父さんの言いたかったことが。

いまの俺にはそこまでの技量なんてないけども

「魔法使い……なつてみようかな」

「うん! なのはもねこちゃんといっしょに応援するよ!」

せめて目の前にいる、初恋の相手くらいは笑顔にしようと思った

と、まあこれが俺の思い出であり、高町なのはという女の子を好きになつた瞬間なんだよな。なのはは覚えていないかも知れないけど、俺の中では大切な思い出の一つでもある。

君の中の正義のヒーローはだれか？

そう聞かれたら俺は迷わず、『高町なのは』 そう答えることができ。それくらいのことをしてくれたんだ。例え気まぐれだとしても、彼女が俺を救つてくれた事実はかわらない。

「あれ、俊くん。まだ洗い物してるの？」

「結構な量をみんな食べたしな～。もうしばらくはかかるかもしない」

「ふうん……手伝おつか？」

「まじで？ それなら頼む」

ゲームをしている連中から抜け出してくれたなのはがありがたい申し出をしてくる。ちょっと洗い物が多いのでこれは素直に嬉しい。

力チャ力チャと食器を洗う音だけが一人を支配する。

「なあ、なのは？」

「ん？」

「昔持つてた、猫のぬいぐるみつてまだ持つてる？」

あのときから、猫のぬいぐるみを見る頻度が少なくなり、ついには見なくなってしまったからな。いまにしてるんだらうつか?

「ちやんと実家のほうに飾つてあるよ。誰かわんの涙と鼻水でべとべになつてるけどね」

振り向き笑顔を浮かべるな。

「由りやんも大変だな」

「まつたくだよね」

お互に顔を見合わせながら、どちらからともなく肩をすくめる。

やつぱり、この想い出はスカさんに話すのは勿体ない想い出だな。

21 · 初恋語（後書き）

ねこかわいいや、ねー。。

## 22・幼女ヴィヴィオ

わたがし雲が青色の海を悠々と泳いでいる。海には鳥が自由に滑空しており燐々と降り注ぐ太陽が肌を焦がす勢いで容赦なく襲ってくる。

俺はそんな太陽を眺めながら、庭で洗濯物を干していた。

「今日も一人のパンツはかわいいなあ……一つくらいとってもバレないのではないか？」

この頃は色々と不幸が重なり、なのはとフェイイトの警戒が強くなつてきている。だが、それをかいぐぐつて得られる下着こそ興奮するというものではないだろうか。そうに違いない。しかしここにあるものは既に洗濯してしまった下着だけ。こんなものでは俺の进るパトスを抑えることなんてできやしない。そつ……使用済みの下着でないと……！　溢れ出るパトスは抑えることはできないのだ……！

そうと決まれば早速行動である。残りの洗濯物は自分のものだけなので適当に干す。ある程度シワを伸ばして洗濯バサミを使って物干しざおにかけたら、さっそく一人の部屋にいくことに。

ヴーヴー

「ん？　スカさんからじゃん。なんでこんなタイミングで。　はい、もしもしスカさん？　いまから世界の滅亡よりも大事な用事があるから後にしてくれる？」

『おお、ひょっとこ君。 突然だが幼女に興味はないかい?』

「詳しく述べるよ」

スカさんから興味をそそる単語が聞こえてきたときには知らないいつちに口を開いていた。

『「つむ、ちゅうと電話ではあれなので私の家に来てほしいのだが……』

「んー、オッケー オッケー。 すぐ行くよ」

スカさんの声が少しだけ重かっただけ、ビーッとしたんだねつか?

家の戸締りを済ましてからバイクに跨りスカさんの家へとやつてくる。

インターホンを押して数分、いつぞやと回じよつてカーへさんが出迎えてくれた。

「お邪魔します、ウーノさん。 スカさんはなにしてるの?」

「ちゅうと外せない用事があります……」

スリッパを差し出してくるウーノさんに頭を下げながら、スカさんつて暇人じゃなかつたのかと考える。おかしいなあ……俺と同じ無職だと思つたんだけど。

スカさんの部屋へと移動中、別の部屋から大きな丸メガネをかけた女性で困つた様子でてきた。

「あ、ウーノ姉様。私の一人亀甲縛り用の縄知りませんか？どこかにいつてしまつたんですけど」

「クアットロ、お客様の前ですよ。そういうた発言は控えてください」

「これは失礼しました。あまり他人のことなど気にしない性格なので」

「そんなことだから、真夜中に一人亀甲縛りを路上でして大変なことになつたのでしょうか？」

ウーノさんが溜息とともに額に手をおぐ。なのはやフェイトが俺のときにもやる仕草と同じだ。それが意味すること、それは『ダメだ、ここいつ』といつわけである。

「この方がドクターがよく話に出す男性ですか。……なんだか無職のような顔をしてますね」

「そつちこそ、ドミっぽい顔してるな。調教でもしてやるうか？」

「（心配なく。あなたじゃ役不足ですわ」

「まあまあ、そこらへんにして。ひょっとこさん、ドクターがお待ちですよ。クアットロ、あなたは夕食の買い物にでも行つてください。繩は私が探しておきますから」

ウーノさんの言葉に納得した様子で、クアットロと呼ばれた女性は玄関のほうへと歩いて行つた。まさかウーノさんにあんな妹?がいたとは……。

「ではひょっとこさん、行きましょう」

ウーノさんの言葉に頷きながら、スカさんの部屋へ歩いていく。

スカさんの部屋の前につくと中から「オクターブほど低いスカさん」の声が聞こえてきた。

『レジアス、これ以上人造魔導師や戦闘機人の戦力運用はやめにしないかい?』

『何を言つているスカリエッティ。これ以上地上の戦力がなくなつていいと思つていいのか?』

『地上の戦力が危ないことは知つているよ。でも……ほんとうにこれでいいんだろうか?これが正しいことなんだろうか?』

『何を世迷言を。貴様がそれを言える立場にあると思つていいのか』

? 私利私欲のために動いたお前が

ここからでは誰と会話しているのか、どんな会話をしているのかわからないが……真剣な様子であることだけは声の低さでわかった。

ほんとうに入つていいのだろうか? 思わず躊躇つてしまつ俺とは反対にウーノさんはトビラを軽くノックし、スカさんに俺がきたことを伝える。

『おお、ひょっとこ君。 入つてくれたまえ』

「お邪魔するよー、スカさん。 ……どしたの? なんか疲れているみたいだけど」

「これくらい、盗撮目的で完徹して作り上げたガジェットのときと比べればどうということではないよ」

そういうスカさんの表情は少しだけ暗かつた。

「ふうん、そつか。 それでさ、電話の件なんだけど」

「おおっ! そうだ、そうだ! そのことなんだけどね。 君に……というよりも六課の人達を信じて頼みたいことがあるのだ。 簡単に言つてしまえば、幼女を一人預かつてほしい。 いや待ちたまえ、ひょっとこ君つ! ? そのいますぐブッショしそうな携帯電話をまずは置くんだ! 』

スカさんから幼女の単語が出た瞬間に、携帯を取り出しあつさんの携帯にかけようとしたのだが……そこはスカさん、俺が打ち込むよりも早く制止させる。

「えへ……だつてアレだろ？ 僕に犯罪の片棒を担がせよつとこつ  
魂胆だらう？」

「いやいやいやっ！？ 君は私が幼女を誘拐してきたとこつのかね  
つー？」

なにを当たり前のことを。

『ねーねー、チンク。 あそこにいる人だれ？ なんだか仕事し  
てなさそうな顔してるね』

『いぐら無職そうな顔をしているからといつて、指を指しながら言  
うのはビツかと……』

「……スカさん。 もしかして俺を攻撃するためにわざわざ呼んだ  
の？」

「いや……そういうわけではないのだが。 チンク、ヴィヴィオ君  
と一緒にこちにきてくれないかい？」

『はい』

俺とウーノさんが出入りした扉から小さい女の子の二人組が入つて  
きた。 赤と翡翠色の厨二チックな目の色をした天真爛漫という言  
葉が似合ひそうな幼女がどたどたと俺のほうに向かってくる。

「こちにまづま！ ヴィヴィオです！」

「こちにまづま、ひょっとこです。 えらいね、自分のお名前が言

えるなんて

ついつい頭を撫でてしまつ。 ヴィヴィオと自己紹介してくれた幼女は気持ちよさそうに手を細めて笑つてゐる。 なんだか小動物と『ハーバニケーション』をとつてゐるような気分に陥る。

「えへっと、ウーノさんの妹かな？」

「そこ」のチンクはウーノの妹だけど、君がいま撫でているヴィヴィオ君は違つよ。 そしてこの娘がこまちつき話題に出した女の子だ

「！」の娘が？』

「うむ。 あまり長々と話をしたくないので単刀直入にお願いするよ。 この娘を預かってくれないかね？」

その時のスカさんは目にはいつも遊び心なんて微塵も感じなかつた。スカさんは真剣なんだ、真剣に俺に対しても願いしてきたのだ。やがて頭をゆっくりと下げる。 それにつられる形でウーノさんたちも頭を下げる。 正直、なにがなんだか全くわからない。一人だけ感じる疎外感。 僕だけがフィールドに立つていよいような……そんな感覚を覚える。

「なあスカさん。 理由は話してくれないのか？」

「いまはまだ……話せない。 ただ 私達といふよりもよっぽど幸せになれると思つんだ。 だつて私は犯罪者なんだからな

「幸せの定義なんて人それぞれだと思うけどね。 それに俺だつてなのはとフロイトがよく出さないことには無理だよ。 あいつらの

ことだから、絶対に〇〇出すだらうけど。 それにこの娘自体はそれに納得してるのか？」

「それは大丈夫だよ。 なにも会えないわけじゃないんだ。 会おうと思えばいつでも会える距離にいるんだしね」

どうにも要領を得ない会話が続く。 スカさんが何かを隠したい気持ちは伝わってくるのだが……

「ねーねー、ヴィヴィオお腹すいたー」

「ん？ あー、わるい。 ビスコしか持つてないんだけど」

ポケットからビスコを取り出す。 それをヴィヴィオは嬉しそうに受け取ると思いつきり袋を開けた ことによってビスコが床へと落ちる。

止まる刻

ヴィヴィオの頬に伝わる一筋の涙。

あ、もう決壊寸前だ。

ここに泣かれても困るので予備にもつてきたビスコを袋から破つて手渡すことに。 嬉しそうに受け取るヴィヴィオ。 やはり幼女の笑顔というのは何よりも勝る宝である。

それにしてお決壊するか……。 これは俺一人では決めることができないし、一度帰つてから三人で話し合つとしよう。

「ちよつとだけ時間をくれ。二人で話しえつか」

腰かけていた椅子から立ち上がったといりで、なにかが自分の手を引っ張る違和感を覚えて振り返る。

「ねーねー、かえるの？ ヴィヴィオもつと欲しい」

「あー、じめんな。それ家にしかないんだよ」

「だつたらヴィヴィオもいぐー。」

「…………ん？」

なんだね、二三段飛ばしじゃないで話が進んだよつな話がある。

「えへっと、君が欲しがってるビスコは家にしかないのはわかるよね？」

「うふー。ヴィヴィオもついていぐー。」

「それじゃ、俺が一旦家に帰ることもわかるよね？」

「うふー。ヴィヴィオもついていぐー。」

「まつて、そこがおかしい。俺が君を連れて帰つたりなんかしたらおっさんガ瞬時にやつてくるから。撲殺どじの話じゃなくなるから」

流石のおっさんも釘バットで治せないから。

なんとかして言い聞かせる。しかしソシエティも特有の力、話をまったく聞いてくれないパワーで俺が根負けしてしまうこと。  
どういう教育をしたらこんな娘になってしまつんだ。この娘の将来が本気で心配になつてきた。とりあえず、なのはとフロイトの二人に電話すること。

フロイトは仕事中のかつながらないので、なのはにかける。1  
ホールの後に口になにかを入れたままの幼馴染の声が届いてくる。

『もふえもふえ？ ほつしたの？ 仕事中ふあんだけ』

「菓子を食つのが仕事つてある意味す」いよな。まあ、それはいいとして大変なんだ、なのは。真面目に聞いてくれ」

『へ？ あ……うん。どうしたの？』

「田の前に将来が心配で心配でたまらない子がいるんだけど」

『現在が詰んでる後くんよりかは大分マシだね』

「はあ……」

『えつー。なにその溜息つー。溜息つきたいのは私とフロイトちゃんのほうだよー。』

「誰のおかげでお前らの下着が盗まれずに済んでもと思つてるんだ？」

『誰のせいで私たちの下着がなくなってるか知ってる?』

たぶん家出でもしてるんじゃないだろうか? 僕の部屋に

「まあ、それは置いておいて。 今夜は少しだけ早く帰ってきて  
れ。 ついでにビスコも買つてきて」

『あー、うん。 それじゃなるだけ早く帰つてくるね』

通話終了ボタンを押して一息つく。

なのはたちが帰つてくれるまでビスコもつかな?

## 22・幼女ヴァイヴォ（後書き）

今日はそこまで暴走してないです。 たまにはいろんなのもアリといふことで。

あと、少しだけ休憩していいですよね？

## 23・恐怖するハイヴィオ！ ギャラドスの黒い影！？

携帯の通話終了ボタンを押しながら、私はたつたいままで会話をしていた人物を思い浮かべる。 真面目な話だから帰ってきてほしい……そう言っていたがいつたいどうしたんだろう？ もしかしてついに就職する気になったのだろうか？ いやいや、彼に限ってそんなことはない。 だとしたらなんだろうか？

「うへん……大事なお話しか。 もしかして私達に関係することかな？」

私達に関係することならば大分絞られてくる。 夕食のこととか、月1で開催される大掃除とか、実家に帰つてゆつくり過ごすとか。でも……声色からしてそれはないと思つ。 それにそれらのことなら家に帰つてきたときに言えばいいのだし。

「つむむ……余計にわからなくなつちやつたよ」

「ね～、なのははちゃん。 カービーのH ライドせんへん？ 丁度いい暇つぶしなると想つんやけど」

「わ～！ やるやる！ ついて、違うよねつ！？ ついつい流されそうになつたけど、仕事場にゲーム機持つてくるなんておかしいよねつ！？」

「ほ～っと携帯のディスプレイ眺めてたなのははちゃんに言われたくないで」

「眺めてないもんっ！ 誤解を招くよつた言い方やめてくれるっー。」

ゲーム機をセットしながらからかうはやって、なのはは思わず席を立ちながら否定する。

『な、なのはさん……困りますよ。お仕事の最中に私が写ってる待ち受け画像をみるなんて……』

「顔を赤くしながらこいつちにこなこでよつー。私そつちの趣味がないつていつてるでしょつー！？」

「大丈夫です。私が教導してあげます！ 愛の共同作業で教導しましようー。」

書類を投げ捨てて迫つてくるスバルに、なのはは全力で逃げる。ドタバタと慌ただしい音が仕事場に響く

「ただいまー、いま帰つたよ」

「フェイトちゃん助けてー！」

執務官の仕事から帰つてきたフェイトに勢いよく飛びつくのは。フェイトは全身の体のバネを使いながら必死に受け止める。顔を上げたなのはには若干ながら涙を流した痕跡が残つている。エースオブエースに涙を流させるほどの部下の迫力と真剣度。なぜこれを訓練で發揮しないのか甚だ疑問を覚えるフェイトである。

「ど、どつしたのなのはつー！？」

「もういやだよー！ おうち帰りたいよー！」

「なのはさんの泣き顔カワコス……。ペラペラしていいですかっ  
！？」

「落ち着いてスバル！？ それもう犯罪者の域に達しようとしてる  
から！」

「フュイトちゃん、おうちかえろうよー！」

フュイトの胸に顔を押し付けるのは。ふとみると、はやは面白  
そうに自前のカメラでこの様子を撮っている。ここにその他の  
者がいなかつことだけがなのはにとつての救いだったかもしれない。  
もしこんな姿をみられたら、べつに見られても今までと  
変わらないかもしね。

幼子のよつこフュイトに抱きつくなのはこ、フュイトはドームの一  
撃を食らわせた。

「でも、家に帰つたら俊がいるよ……？」

フュイトのかいしんの いちばき

ヒースオブヒース 高町なのはは たおれた

「さすがフュイトちゃんや。なのはちゃんに向かつて効果抜群の  
一撃をためらいなく打てるなんて……恐ろしい娘やつ！」

倒れたなのはを必死に介抱するフュイトをみながら、はやはめやつ  
咳いた。

なんとか管理部員に見つかることなくヴィヴィオを家に迎えることができた。いや、ほんとうはダメなことだと悟つたナビ。

「わあー！ お嫁おつきこねー。」

「だるー？ なのはとフロイドが頑張つてくれてるからなー。」

「それじゃあ、おじこさんはなにしてるの？。」

「おじこさんは夢を追つかけているんだよ。」

「まだたどり着かなこどりか、見えてこなに夢だけじ。」

それでもヴィヴィオはこのフレーズが気に入つたらしく、手を握って喜んでくれた。

「ヴィヴィオも夢をおいかけるー。」

「ヴィヴィオ、夢つてのは追いかけるものじゃないんだよ。叶え  
るためのものなんだよ。」

「でもおにじやんはおいかけてるんでしょ？」

「俺の夢はシンデレだからな」

「まだ元気を魅せてくれたことはないのだけれど。

「まあ、夢はいいじゃないか。 それよりビスコ食べるか？ うまいぞ、ビスコ！」

「たべるたべるー。 ヴィヴィオ、ビスコ大好きー！」

「そりかそりか。 ビスコを食べるとなのはみみたいになれるからな。 頑張るんだぞー！」

「ん～？ なのほってだ～れ？」

ビスコを口に含んだまま、ヴィヴィオが首をかしげてくれる。 いついた仕草が似合つのもこの娘のすごいところだな。 しかし、なのはがダレなのか、か。 これは難しい。 なんといっても自慢の幼馴染である。 下手に貶してイメージをそこねたくないし、夕方には会うことになるのだからこほほはヴィヴィオが喜ぶような内容に脚色しないと……！

俺はゲームを取り出しそ モン図鑑を選択し調べる。 幼馴染のイメージを貶すわけにはいかない……！

「え～っと、タイプは水・ひこうで入手方法はすごいつづとかおかソイキングから地道に育てるのもアリかな。 ものすこしく凶暴でヴィヴィオみたいな娘が悪いことをすると、どこからともなくやってきて全身を引き裂いて帰っていくんだよ。 口からばゲームが出て

あと、そのゲームはリチャードを破壊するほど力を持つているんだ」

なのはのイメージを貶すことなく、どちらかとこうと持ち上げる形でヴィヴィオの目線に合わせて話したのだが、話しあがめ終えた瞬間にヴィヴィオに泣かれてしまった。

「ごめん、なのは。ヴィヴィオが求めてたのはギャラドスのはじやなくて、高町のはだったみたい。

23 恐怖するハイヴィオ！ ギャラドスなの黒い影つー？（後書き）

ほのぼのストーリーっぽくていいですね。

## 24・それでも俺はやつてない。 ところは嘘だ

「ヴィヴィオに色々な服を着せて遊んでいたら我が家のお姉様一人が帰宅する時間が近づいてきたので、すぐ隣で楽しそうにお絵かきしているヴィヴィオに確認を取ることに。 なんの確認かといふと、これから行動する予定の確認である。

「ヴィヴィオー、わしき聞つた通りにするんだがー」

「うん！ えっと、金髪のお姉ちゃんのところに駆け寄ればいいんだよねー！」

「そうそう。 決して栗色の髪のお姉ちゃんには近づくなよ。 触れた瞬間溶けるからな」

「あう……ヴィヴィオきをつけたる……」

ヴィヴィオの中ではすでにのはが、空を飛び街を破壊し田と田が合った者を虐殺していくクリーチャーへと変貌していた。 幼馴染の俺としては小さな子どもにこんな恐ろしい誤解などしてほしくないのだが……しょうがないよな。 僕もたまに殺されそうになるし。

ヴィヴィオが俺のズボンを掴んだとこひで携帯からメールを受信する音が聞こえてきた。

『 むつすぐかえるよー！ あと3分くらいかな』

「よーし、それじゃヴィヴィオは先に玄関先で待機しておこってくれ。 俺は着替えてくるから

「はーい！」

手をあげて元気よく駆け出すヴィヴィオ。 やっぱ幼女はかわいいな。

そんなヴィヴィオを見送りながら俺は衣装部屋へと移動して、金髪長髪のカツラに青色のカラコンをつけ黒ヒョウのフリルつきミニスカートを履き、黒ニーソで絶対領域をつくる。

ちなみにカラコンは目を悪くするので長時間つけることはオススメしないからな。

次に軽くファンデーションを塗り、口紅で可愛さを増していく。つけまつげで目を大きく魅せて、最後にゴムでツインテールにする。よくツインテールにすれば“口リ”なんて言い方をしているが俺は絶対に認めないからな。 おまえらだよ、18禁ビデオの出演者たち。

さてさてそれは置いといて、俺も準備ができたので玄関に向かうことに。

「じゃーん！ どうだ、ヴィヴィオ！」

「うふー！ すっしゃべきもひわるー！」

ですよねー。 若干ながら俺も思つてました。 だつてべつに女顔でもなんでもないからね。 イケメンだつて何しても似合つわけじやないもんねー。

「ハニーハニ笑顔で言葉の暴力を飛ばしていくるヴィヴィオに、冷静にな

りながら返事を返す。あかん、股間に変な汗かいてきた。

その時、グッドタイミングなのかバッドタイミングなのか分からないが、玄関の向こう側から一人の話し声が聞こえてくる。とても楽しそうな声だ。その声を聞いただけで俺の心は温まつてくれる。

ドアノブが回る音がして一人の女性が顔を出した。一人は可憐な光翼、フェイト・T・ハラオウン。六課のアイドル担当だ。そしてもう一人は恐怖の権化、高町なのは。六課のオチ担当だ。

「わ～～～～い！おかえり～～～！」

「えッ！？ な、なに！？ なんなのいきなりッ！？」

「わ～～～～い！会いたかつたよ～！」

「ええッ！？」

フェイトが見えた瞬間に駆け出し飛びつくヴィヴィオ。フェイトはヴィヴィオをしつかりと柔らかく受け止めながらも盛大にテンパっていた。

「ママー！ママー！」

「えつ！？ ちよつ！？ ビ、どうなつてゐのつ！？」

テンパリながら回りをわたわたと見回すフェイトは、そのまま待機していた俺と目があつた。俺はそれを確認して、目に涙を浮かべなが『よよよ……』と泣き崩れる。

「かなしいわっ、フェイト。私達の隠し子を忘れるなんて……私とともに過ごした情熱でイスカンダルな一夜を忘れたというの！」

「な、なのはっ！？ どうすればいいのかなっ！ も、もしかして迷子とかつ！？」

「うーん……迷子なのかなー。でもこの娘、フェイトちゃんに懷いてるみたいだけど」「…………」

「あなたは私の大切な初めてを奪ったのよっ！ その罪、償つてもらうしかないのよっ！」

「ちょっと、まつてよなのはっ！ ほんとうに私はこんなもの知らなくて……」

「うーん……ねえ、もしかしてママとパパとはぐれちゃったのかな？」

「ひいっ！？ 觸つたら、ヴィヴィオ溶けちゃう！ 助けて！」「…………」

「シカトされたあげく、いきなり俺が犯人扱いされるの！？」「…………」

渾身の演技を全て無視されたあげく、勝手にヴィヴィオに吹き込んだ犯人にされてしまった。まったく……なのはも仕事で疲れてるんだな。

フェイトに飛びつき抱きついたヴィヴィオはフェイトの足に引っ付

いて離れず『ママー ママー』そう連呼し、フェイトはフェイトでそんなヴィヴィオに対して慌てふためくだけであった。そんなフェイトをみてなのはは助け舟を出したわけだが差し伸べた手を触れるビートが避けられて怒りの矛先がこちらにきている。

「まあ落ち着け。俺とお前の仲じゃないか。可愛い可愛いひよつといちゃんからのラブコールなんだから笑つて済ませるくらいの度量を調子こいてすいませんでした！ お願いですからバインディングにすることは勘弁してくださいっ！」？

外国人のようにスマイル満点で足を踏み出した瞬間にはのバインディングによって両手を左右に広げ足を投げ出してようこに広げられた状態のバインディングにかかりた。

「……フェイトちゃん。その娘と一緒にリビングに行つてくれるかな？ 私はお話しするからさ」

「ああ、うん。わかつたよ。えへつと、とりあえず行こうか？」

「うんー！」

「おじちよつとまでよー。お前のその肯定で一人の市民の命が風前の灯になつてゐるんだぞ！？ それでいいのか管理局ー。それでいいのかマシユマロおっぱい！ あ、ごめん謝るからー。マシユマロおっぱい謝るからいかないでええええええええええええ！」

バインディングで縛られている状態なので顔だけでも必死にフェイトと距離を詰めようと努力するひよつとこに對して、フェイトは無視を決め込みヴィヴィオを伴つてリビングへと入つていった。

必死に弁明してゐる彼の声をBGMにしながら私はこの女の子に話を聞くことにした。

「え～っと、私はフロイト・T・ハラオウンです。あなたの名前は？」

「ヴィヴィオ～！」

「や～～へ、可愛い名前だね。それで、どうしてここにいるのかな？」

「え～～と……おにいさんにつれてこられたの～！」

「なのはー、俊を完膚なきまでに叩きのめしてー！」

ヴィヴィオからおおよそ聞きたくない内容を聞きだしてしまった私は、ここからなのはに聞こえるほどの音量でわうわう頬んでしまった。

『それ絶対に誤解だからー？ 内容とかまったく聞いてないけど1000%誤解だって断言できるからー。』

既に犯罪者の言葉など私の耳には届かない。俊ならいつかあると思っていた……。だからこそ、なのはと一緒にそれを止めようとしていたのに……最低な人間だよ、俊はー！

『ちよつ！？ なのは先生、往復ビンタめっちゃ痛いから、アンパンマン並みに顔面腫れあがるから！ ジめんなさいっ！ もうしません！』

ここまで聞こえてくるなのはのビンタと俊の絶叫。

『てめえ！ 僕だってこの痛みを快感に変換する術をもつてるんだぞ！ それを使用すればお前のビンタを変換して俺の股間のデバイスからホワイトブレイカーを撃つことだって可能だ！ 下着もズボンも突破して貴様にかけるぞ、この一撃！』

痛みのあまり彼がへんなことを口にしあじめた。

「ねえねえ、ホワイトブレイカーってな～に～？」

「うーん、もうちょっと大人になつたら教えてあげるからね～」

よじよじと頭を撫でると、猫のよつて気持ちよさうに目を細める。

「ねえねえ、天元突破つてなうにう？」

「使い方が正しいと銀河を守るほどの力と恰好よさがあるんだよ。アレは完全に使用例が間違ってるから、マネしちゃダメだよ?」

「うん!」

ヴィヴィオが可愛く元気に頷く。

そんなヴィヴィオを片手であやしながら、この娘が何故家にいるのか後で問い合わせた所と思つ私であった。

24・それでも俺はやつてない。 ところは嘘だ（後書き）

カラコンで田がよつ一層悪くなりました。 カラコンは僕には合わなかつたのかな。

現在俺たちは夕食のすき焼きを食べていた。俺の顔はアソパソマソ並みに腫れあがつており手なんて肩から上にあがらない状態になつていて。おかしい。絶対におかしい。幼馴染というものは素敵でエロエロな展開になると相場が決まっているはずなのにこの二人は「デレ」というものが一切ない。これは俺がエロエロなことをするゲームの世界ではなかつたのか？

だがそんなことを言つてもはじまらない。いまにここのナックニッシュクでこの一人が乱れる姿が目に浮かぶ。そつ……俺に懇願する姿がな！

「白菜の追加はまだかな？」

「あ、いきますにもつてきます

……もう少しだけ、もう少しだけの辛抱だ……！

冷蔵庫から白菜を取り出して食べやすい大きさにカットし、食卓へと戻つてくる。

「白菜もつてきました」

「ねえ、たまごもないんだけど

「あ、少々おまちください」

向かい側のなのはがテーブルでコンコンと卵を割る仕草をしながら、

低い声で言つてゐる。 僕はその声に反応してすぐさま冷蔵庫に向かい卵をとつてゐる。

「エハソ、なのは大明神さむ」

「……はあ。ちやんと反省してゐの?」

「それはもう、猛反省します。フライテの砂丘よつも高く谷間によりも深く」

「……君の中の反省が何なのか知りたい」

卵を受け取ったなのは頬杖をつきながら上田使いで俺を見てきたのに対し、俺も誠心誠意答えたのに溜息が返つてきた。あんまり溜息ばかり吐くと幸せが逃げるぞ?

「はいヴィヴィオ。熱いから気をつけてね?」

「うんー、ヴィヴィオ、きをつけぬー。」

なのはの隣にいるパツキン一人が仲良しそうにする光景が視界にはいる。パツキン(大)がパツキン(小)のお椀をとつて鍋の中から肉と野菜を均等によそつて渡す。パツキン(小)はそれを両手で受け取りながら二三二三笑顔で復唱する。なんとも微笑ましい光景である。

「完全にハブられてるな」

「は、ハブられてないもん! ちょっと君の相手をしていただけであつて……本当は私にもこれくらい懷いてるもん」

「ほ～。 わつきは溶ける今まで思われていたのに？」

「そ。 それは誤解だから大丈夫なの！　みててよね！　ヴィヴィオ  
～、私が卵割つてあげるよ～？」

「あう……あ、ありがと～……」

二口二口笑顔でヴィヴィオのお椀に俺からもつた卵を割ろうとするにはヴィヴィオはお礼を言いながら、少しだけお椀を自分のほうに引き寄せた。 これが意味すること、それはヴィヴィオがなのはから卵を受け取りたくないということだ。

ヴィヴィオの態度を見て、笑顔を張りつかせたままなのははゆっくりと体を引いた。 まあ、あんな態度みせられたらしうがないよな。

「……いまの光景は見てなかつたことにしといたらいいの？」

「……うん」

消沈したまま首を縦に動かすなのは。 ちなみにフェイトはそんな一人のやりとりをみてオロオロするばかりである。

そもそも席順からして避けられてるということに気付かないのか？

いまの席順はこのようになつている。

俺

ヴィヴィオ・フェйт・なのは

「どう考へてもヴィヴィオはなのはを避けているだろ。俺？　俺は安定の一人だよ。みんなどう思つ？　家といつ空間で考へるなら両手に華だよ。でも横といつ空間で考へるならスッカラカンだよ。

まあ、そんなことは置いといて。

「HースオブHース破れたり、だな」

「いんな負け方嫌なんだけど……」

具が何も入っていない空のお椀をカツカツと刺しながら、なのはは一人で愚痴り始めた。

「とりあえずそつとしておく」として、冷蔵庫からうどんを取り出していく。

「そもそも、俊くんがヴィヴィオにへんなことを吹き込まなければこんなことにはなつてないんだよね。そう考へると私の不幸はいつも俊くんが絡んでるような気がするんだ。ううん、べつに俊くんを責めるつもりなんて全くないんだよ？　でもせ、たまに思うよね。俊くんはなんでなのはをイジメるんだろうって。毎日毎日、人の下着盗んでさ。頭おかしいよね。ううん、でも俊くんが頭がおかしいのは知ってるよ？　子どもの頃からの付き合いだからね。一番長い付き合いだもんね。でもさ、たまに納得いかないことがあるんだよ。こっちにも意地つてものがあるしね。これでもね、大変なんだよ？　あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、怒つてもヘラヘラしちゃってさ。どれだけ私がディバイン・バスター

一撃とうと思つたことか。けど、俊くんはそんなことおかまいなし。そもそも「テリカシーがないんだよね。いまどき「テリカシー」のない男なんてモテないんだよ?」

台所から戻つてきたところで、ちよ「うどんのはの愚痴が一段落したみたいなので声をかけることに。」

「なのは、うどん食ひ?」

「たべるー。」

さつきとは打つて変わつた表情で目をキラキラさせながら肯定するなのは。うんうん、わかるぞその気持ち。すき焼きの「うどんつて美味しいよな。ところで愚痴つてどんな愚痴なんだらつか? どうせ俺に対する嫌味なんだらつけど。」

「うどんを二皿いれて蓋をする」と。

その間に俺は一人に話しきることにした。もちろんこれからヴィヴィオをどうするかについての話だ。

「さて、一人とも。まずはヴィヴィオがここにいる理由を話す。そのうえでこれから俺たちのする行動を決めていくことにしたいんだけど、異論はないよな?」

「うん」

二人が肯定する。ヴィヴィオだけは器に残つた食べ物に一生懸命で話に参加していない。けど、それが一番いいのかもしない。

「それじゃ、まあなんでヴィヴィオがいるのかだが」

かいつまんで、要約してわかりやすく話していく。スカさんから預かったこと。ビスコの魔力でここについてきた。案の定、なのはもフュイトもビスコ辺りでとつても微妙な顔をしていたのだが。

「まあ、俺が話せることはこれくらいかな。俺自身もスカさんからそこまで聞いてない、っていうか聞こうとしてもダメだったよ」

「もしかしてスカさんって多忙な人なのかな？ てっきり俊くんと同じ無職だと思ってたけど」

「というか、スカさんってスカリエッティに似てるよね」

「フュイトのせいじゃない？ それって次元犯罪者なんだろう？ スカさんにそこまでできるとは思わないけど」

「……それもそうだね」

「とにかく、ヴィヴィオは此処で預かるってことで異論はないんだよな？」

俺の問いかへ一人とも頷く。わかつてはいたけど……ほんと二人とも優しいよね。

だがここで大きな問題が一つでてくる。

その問題とは

「土郎さんやリンティさんになんて説明すればいいんだろうか……」

「「あ、……」」

預かってこただけとは云え、ヴィヴィオナリで生活してこへりとになるんだ。スカさんは期限については何も述べなかつた。といつことな、最悪の場合、一生なにごともなりかねない。だとしたら様々な問題が出てくる。

やせつ早めに話しておべきだらうか……。

「や、話しておかないと、よくなきゃいけない。最悪でもコントトイさんには話しておかないと」

「こや、コントイさんだけじゃダメだろ。士郎さん達だって俺たちのこと心配してゐるんだから。だからこそ、俺たちはしっかりと海鳴にも帰つて無事である」とを伝えてくるんだし」

「でも……おぬれさんなんて説明すればいいの?」

フロイドの言葉で轟くショーホームにある「アリ

「あ、なのはひさとヒロイド、久しぶりね。ついでに無職の君も」

「こつも頃のですが、俺にほんの少しあん敵しこですよね

「あなたが死んでくれたら優しくするわよ」

まったく意味ないですよ、それ。

玄関の前で軽くはない世間話をすむ。なのはとフロイトのおかげで若干リンクティさんの顔にも優しさがある。俺単体のときは般若のような顔してるのにな。

「それで？ なにか困ったことでもあったのかしら？ 三人で訪ねてくるなんて」

「あ、そのことなんだけじね、お母さん？ ちょっと話しておきたいことがあって……」

フロイトのよそよそしい態度にリンクティさんもなにか違和感に気付いたようだが……フロイトが喋つてるので口を挟まないよつだ。

「えっと 子どもをね、紹介しようと思つて」

「死ぬな、俺が」

「うん、俊は死んじゃうね」

「フロイトちゃんの言い方も悪いとは思うけど」

三者二様の言葉を述べながらも俺たちが到達した答えは一つ。俺がリンクティさんに殺されるという結末だ。俺自身もそんな未来が容易に想像できるわけで、死ぬしかないわけで、なんとも困ったことになつた。

「それじゃなのはのほうが?」

「ひけもダメだと思うよ。ねえ、俊くん」

なのはが俺に振つてくれる。俺はそれに大きく頷いた。

「そもそも髪からして違うしな。それにもしそんなこと言つたものなら、俺は土郎さんと恭也さんに殺されるよ。なのはのこと溺愛してゐるし。ヴィヴィオの年齢はだいたい5歳くらいだろ? 逆算すると14歳だぞ? そんなこと土郎さんや桃子さんが許すはずないだろ。ビビの14歳の母だよって話になつてくれる」

「……それじゃいつそのこと、話さないつていつ選択は?」

「それはもつとダメだよ、フェイト。俺たちはまだ19歳。日本では未成年の部類に入つてしまつから、やつぱり土郎さんやリンディさんには話したほうがいいと思うんだ。ヴィヴィオはペットとは違うんだ。やはりそれなりに報告とかも必要になつてくるよ」

「うへへへん……でも、報告した後に待つてるのは俊くんの死」

そこが一番の悩みだよな。もつといつ……ギャルゲやHロゲみたいに簡単にいけばいいんだけど。

「うへへへん……」「」

三人が悩む中で、当人であるヴィヴィオだけが

「うへん食べよみづへー。」

元氣に発言をしてるのであつた。

255. ドックド・ル・テッド（後書き）

次回は甘々にしていきたい。

『子どものサインはとても小さی。だから見過しにしてしまつ』ことがある。それを反省し次に繋げるか、そうでないかで器が違つてくるのかもしない』

結局のところ、俺たちの答えは“時期をみて話す”という無難な答に落ち着いた。いま話したつて混乱するだけだろうし、もしかしたらヴィヴィオだつてすぐにスカさんたちが引き取りにくるかもしれない。それにいま話にいったところでヴィヴィオとの生活だって日が浅い。そんな状態で先方に報告したところで何を言われるかわかったもんじゃないしな。……いや、俺がボコられるのは確定事項なんだけどさ。

兎にも角にも、これが俺たち三人が決めたことだ。

夕食を食べ終わった俺たちは俺だけを残して女子二名ともども風呂で体の疲れをゆっくり癒している最中だらう。

「それにして、なのはがハブにされなくてよかつたな」

風呂に入ると言い出したとき、ヴィヴィオは若干強張った顔をしたがフェイトの助力となのはの粘りでどうにかこつにか入浴へとこぎつけたのだ。それにしてもなのは怖がられ過ぎだろ。

洗い物を終えた俺はそのまま、マンガでも読もつと浴室へ行く途中、あることに気が付いた。

「……そういえばヴィヴィオの服つてないよな。 今晚のパジャマは俺が普作つたメイド服でなんとかなるけど……さすがにメイド服で外に出すわけにはいかないよなー」

そんなことすれば俺がおっさんにな捕まつてしまつ。 流石にそれだけは避けたい。

「ちょっとヴィヴィオに聞いてみようかな」

足を180°。 方向転換させて風呂場へと進むこととした。

風呂場へと訪れた俺を待つていたのは、先程まで衣服とした着用していたブラやパンツ、スカートにシャツ、といった聖骸布であつた。ほのかに残る香り、若干嗅ぐことのできる汗、生暖かい感触。そう 桃源郷は此処にあつたのだ。 ちらりとすりガラスをみると、三人ともこちらに気付いている様子はない。 シルエットからして、なのはとフロイトがヴィヴィオの体を洗つてあげているようだ。 チャンス 到来

すばやくしゃがみこみ、あちらの視界にはいる面積を狭くする。そして自分で体内時間の操作を行う。これにより、殺し屋でもないかぎり俺の気配を察知することは難しくなる。しかしこれにだつて限界はある。だからこそ 最新の注意を払いながら最

高の速度で獲物を  
狩る！

『えへへ～！ 今度はヴィヴィオがファイトママを洗ってあげる！ ヴィヴィオこれでも手でコスコスするの上手なんですよ！』

「それならばお兄さんの息子もコスコスしないかヴィヴィオー!」

ドス！

「まったく……油断も隙もあつたもんじやないんだから！」

一瞬だけ見えた光景から推測すると、タオルで体を隠していくいたなのはから目つぶしつを喰らったようだ。指だけならまだいいが、今回は泡までつけてきたので失明しないか心配だ。全身の感覚を研ぎ澄まし心の目でこの場を観る。徐々に浮かび上がってくるシルエット。前方には。横にヴィヴィオとフュイトか。肌がチリチリと焦げるような錯覚を覚えるので、どうやら二人ともかなり怒っているようだ。フェイソンなんてチエーンソー取り出しできそうである。

軽いジョークの  
しかしながら、こなれ長年付き合ってきた仲だ。  
つでも飛ばせば許してくれるはず……！」

「フヒイト、ほんといい体してゐるよな。」  
なのははもう少し頑張れ

まさかのはが風呂場でサマーソルトしていくとは思わなかつたです。

サマーソルトを食らつた俺はフルボッコにされながらもなんとか逃げることができた。息子のほうはフルボッキだ。しかし此処には現在ヴィヴィオだつている。紳士として幼女がいる空間で抜くのは斬首に値する行為なのでなんとか我慢する。

しうつがないので自室に引きこもつてゲームでもやろうとしたところで風呂場の方向からドタドタとした足音が聞こえてきて

「おふろよかつたよー！」

ヴィヴィオが飛びついてきた。いつたいどつしたんだ？ ちょっとテンション高くない？ お姉さんたちにイケナイことでも教えられたのか？

などなど、思考しているとパジャマ姿のフェイトとなのはがタオルで髪についている水滴を縛りながら困った顔を浮かべていた。

「どじたの、ヴィヴィオ」

「たぶん跟くなつてきたからテンション高いんじゃないかな？ ほら、たまにあるじゃない。小さい子特有の」

「ああ、たまに魔法少女（笑）もなるよな」

「ねえ、魔法少女（笑）って私のことかな？ 知ってる？ 乙女つてね、いつまでも少女なんだよ？」

「……ふつ

「落ち着いて、なのは！？ 鈍器はダメだつて！？」

「離してフロイトちゃん！ こいつ女の鉄槌を！」

「お兄ちゃんどこへ！ こいつ殺せない！」（裏声）

「バカにしてるでしょ！？ 私のことバカにしてるでしょ！？」

なにをいまさら。

なのはが口ヴィータ化している様はみていて面白い。俺がニヤニヤとフロイトがオロオロしながらなのはを止めていると俺の膝でぐるぐる遊んでいたヴィヴィオが失速し、やがて動きを止めた。その様子に俺たちは動きを止めてヴィヴィオの顔を覗きこむ。

「「……寝てるね」」

「幼女の寝顔ってかわいいな」

「うーんと……今日はもう寝よっか？」

「うん、そうだね」

なのはとフロイトがあらかた拭き終わったタオルを受け取る。二人は洗面台のほうに足早に駆け出してドライヤーをかけるとクシで髪を梳<sup>く</sup>きながら手を差し出してくる。

「はい、ちゅうだい」

「いあん、キャットフード手元にないんだ」

「こりなによつー? セツじょなへじ、ヴィヴィオを預かるつて言つてゐるー。」

「ああ、ヴィヴィオね。でも……離せないんだナゾ」

シッカリとズボンを握つてるヴィヴィオはなかなか離れてくれない。強引にほどくことも可能なんだけど……それはなんか嫌なので実行には移したくない。

「それじゃ、俊くんの部屋に寝せる?」

「だめだよ、なのは。俊だよ? 危ないことになるのは明白だよ」

「あ、そうだね。やつぱいまの発言取り消しね」

俺の幼馴染たちがこんなにシンしかないわけがない。

といつても、俺はこれからやらなければいけない作業があるわけで部屋にヴィヴィオをいれる「とはできないんだよな。それで、どうしたものか。

考えこんでいると、ヴィヴィオが一人で俺の手を離し目が開いていない状態にもかかわらず「コトコト」と抱きついていく。もちろん、フェイドのほう。

「俊くん、歯くいしばって?」

「……え？」

いや……うん。 なにかに当たりたい気持ちはわかるんだがな？  
セヒドサンドバックとして俺を起用するのせじつかと細つが？

なのはとフロイトの間に挟まれて寝ているヴィヴィオを見る。

「あんまりジロジロみないでよ。 セクハラだよー」

「俺のセクハラはもつと大々的だから大丈夫なの。 それよりヴィ  
ヴィオってトイレいつたつけ？ 俺のイメージでは小さい子つて夜  
寝る前はトイレに行くイメージがあるんだけど……」

小さじ子どもつて夜は一人でトイレに行くのが怖いから、親と一緒に  
トイレに行つてから寝ると思っていたのだが……。 実際、小さ  
い頃のなのはがそれで漏らしたので強く思つてしまつ。 それに、ヴィ  
ヴィオって考えてみれば家にきてから一回もトイレにいつてない  
よな？ それつて健康的にも問題があるんじゃないかな？

「うへん……どうなんだろう、フロイトちゃん

「えつ！？ 私に振るの？ エツヒ、行くときせなのはか私を起  
こすんじやないかな？」

親指で顎を押しながら答えるフロイト。  
言われてみれば確かにそ  
うだな。

「それじゃ問題ないか。んじゃ、おやすみ。風邪引かないよ」  
にな

「はーい、おやすみー」

電気を消して部屋を出る。今日は盗みは勘弁しておこう。

部屋に戻り、電気を点ける。蛍光灯の人工光が部屋全体を支配して俺の娛樂グッズを起こす。それらを全部一か所の所にまとめておき、棚からコスプレ衣装用の布を取り出す。色は青と水色と白。これでとある人物をモチーフにした衣装を作ることにしようつと考えている。できるだけ可愛く、外を歩く誰もが振り返るようなそんな服を作ろう。

道具一式を近くに置き、いざ開始する。ヴィヴィオは喜んでくれるかな？

カツチコツチと時計の針だけ聞こえてくる。何時間もしたよな、それでいて何分しか経っていないような、そんな時間の感覚があやふやになつた錯覚に陥る。時刻を確認すると深夜1時を若干過ぎたあたりである。出来として30%。本当に終わるのか？

そう一抹の不安がよぎるわけだが、まだまだ時間的には余裕があるしなんとなるだろ。立ち上がり、伸びをすると背中からバキバキと固まりをほぐすような音が聞こえる。

「うへん……ヴィヴィオの様子でも見てくるか

あの笑顔をもう一度みて、英気を養おう そう思つた瞬間に家中

に響くよくな声で誰かが泣いた。

『「うわああああん……』

この声はいったい誰だ？

こんな高い声で泣く奴なんて家にいたっけ？

そもそもなんで泣いてるんだ？

疑問が頭を埋め尽くす。 体は勝手に動き出す。

ドアを勢いよく開け、なのはとフロイドの相部屋のドアを蹴り開ける。

「あ、俊くん……起きてたんだ。 といつか、起きちゃったのかな

……？」

部屋に入ってきた俺を見てなのはは困った笑みを浮かべた。

「えへっと……もしかして？」

「うん。 そのもしかして」

「だいじょーぶだよ、ヴィヴィオ。 こんなこと、誰にでもあることだから」

なのはとフロイドに抱かれたまま、グズグズと泣いているヴィヴィオ。 そして少し視線をずらした先には白いベッドが不自然なほど黄色くなっていた。

早い話が　ヴィヴィオが間に合わなかつた、ということである。

考えてみれば当然なことである。 そう、これは当然な結果なんだ。 だつて、ヴィヴィオは一回も行つてないんだから。 この家に来て、何時間が経つた？ かなりの時間が経つたはずだ。 夕食だつて食べた。 お茶だつて飲んだ。 もよおさないほうがおかしいのだ。

ヒックヒックと泣くヴィヴィオ。

なのははそんなヴィヴィオを優しく抱きしめ、背中をトントンと叩く。 安心させるように、落ち着かせるように。

「私、ヴィヴィオをシャワーにつれていくな」

その言葉に俺はただ頷くだけしかできなかつた。

パタンと閉じるドア。 トントンと降りていく一人分の足音と、一人分の話し声。

それを聞きながら、俺はベッドに足を運んだ。

「きづいて……いたんだ。 ちょっと考えればわかることだよな。 だつて、ヴィヴィオは小さい女の子だぜ？ それが突然俺たち大人3人の中に放り込まれてさ、緊張しないほうが無理な話なんだよな。

主張できないのは当たり前じゃないか。借りてきた猫のようになるのは当然じゃないか。用意周到なスカさんのことだ。『迷惑をかけちゃいけないよ?』そう言い聞かせたんだと思う。だから、賢いヴィヴィオはその言いつけを守ってたんだ。『ヴィヴィオにとつて、トイレに行く、ということは迷惑行為につながったのかもしれない。誰かが案内しないといけない。誰かが付き添わなければいけない。だから、ヴィヴィオは言い出せなかつたのかもしないといけない。本当は、本当は、もっとわがまま言いたかつたのかもしない』

俺が渡したお絵かきより、アニメを覗たかつたのかもしれない。

考え出したら止まらない。あいつが主張したのなんて、“うどんを食べたい”なんてセリューナものだけだったんだぞ。

情けない

幼女を泣かせた自分が情けない

黙ろうとしても黙れない。小さい女の子の小さな小さな自己主張を流してしまった自分が情けなくて、ヴィヴィオの泣き顔が頭から離れなくて、スカさんにウーノさんに申し訳なくて、マシンガンのように喋るひとでなんとか保とうとする。

「紳士が聞いて呆れるぜ。だって」

喋る口が強制的に止められた。

「いまは、後片付けが先でしょ?」

俺の口元に自分の人差し指を置いて、ほほ笑みながら強制終了させるフロイト。

その笑顔でようやくわれにかえることができた。

「……ごめん。ちょっと取り乱しちゃって……」

「うん、大丈夫。私だってなのはだつて気付かなかつたんだもん。しようがない、なんて言葉で片付ける気はないけど、優先事項がどれかくらいはわかるよね?」

その言葉に頷く。

そうだ、まずはここを片付けよ。そうでないと、ヴィヴィオが安心して寝れないじゃないか。

ヴィヴィオのメイド服を脱がした私は、いまだ泣いているヴィヴィオを抱いてシャワーのノズルを回した。お湯にかかるまで数秒。この時間がちょっと寒い。

「よつし、お湯にかわったね。ヴィヴィオ~、体流そうね~」

「……うん」

下を向いたまま首だけで返事するヴィヴィオ。

まあ、それもそうだよね。よく考えてみれば此処は他人の家だもんね。ヴィヴィオだって家で生活するようになんてできないだろ

「うー、おじいちゃんもおしたら……。

借りてきた猫のようになに黙つたままの「ヴィヴィオ」の体をスポンジで丁寧に洗つ。すると「ヴィヴィオ」が少しだけモジモジしあじめた。

「くすぐりたい？」

「うえ……」

「うーちゃん……」

「やーーーくすぐりたこよーーー。」

そこを重点的に「くすぐる」と、「ヴィヴィオ」は笑いながら「うーちゃん」を押し返してくる。よくやく笑つてくれたのが嬉しくて、ついつこ「ヴィヴィオ」で遊んでしまつ。

そんな笑いの中で一瞬だけ訪れる無音の空気

「「」あんなやこ……おもうこしちゃうト……」

それはひとともひとともか細い声で

「「」うーん。 私たちも「あんな、気付いてあげる」ことができなくて」

私はたまらぬ抱きしめた。

抱擁に嫌がることなく、身を任せた「ヴィヴィオ」。

「あのね……？」

「な～に？」

「ス力さんがいってたの。『いまから行くところはどつてもいい人がいるから大丈夫』って。ヴィヴィオのことを守ってくれるつて。だからヴィヴィオ、いい子にしようと思つて、迷惑かけちゃいけないって思つて」

「そつか。偉いね、ヴィヴィオ。その年でいい子にしようなんて。うちには19歳になつてもお子様のままの男性がいるから余計に思つちゃうよ」

「でも……ヴィヴィオだめだつたよ？　いい子にできなかつたよ？」

心配そうに不安そうに見上げるヴィヴィオ。だから私はそれに満面の笑顔で答へることにした。

「いい子になんてしなくていいんだよ。飾らない言葉で、飾らない行動で、飾らないわがままで、私達を困らせてくれたらいいんだよ」

私だつてそうだつたんだから。

わがまま言つて、さんざん困らせて生きてきた。それでも、まわりの大人们は笑つて許してくれた。

大人になるにつれて、わがままなんて言えなくなる。これも生きてきた中で身につけたことだ。約数名、それに縛られない人たちもいるけど。とにかく、こんな子どもときからわがままを言わない人生なんて、言えない人生なんてどこかで破綻するに決まつて

い  
る。

「だから  
もっと甘えていいんだよ？」

「なのは……アア?」

「ん?  
どうしたの?」

「えへへ……なんでもない！ なのはママー！」

その後ヴィヴィオは私に抱きつきながら、 “ママ”と連呼し続けた。  
よつやく言ひてくれた言葉。 聞きたかった言葉。 こんなにも、  
ママと呼ばれることが嬉しいなんて思わなかつたのが正直なところ、  
ヴィヴィオをこのまま自分の娘にしたいと思つてしまい、その考え  
は心の底にしまつておることにした。

も、…… そんなにはしゃごだら黙くなつたやうよ？

新しいシーツをかけ、ベッドメイキングを完了させる。

これでヴィヴィオが帰ってきたときに不快な印象を抱く」ではないはずだ。

「あの……ありがとうございます。助かつたよ」

「こちらこそ、ありがとう。私は一人じゃこんなに早くは終わらなかつたよ」

フロイトと一人でペコペコと頭を下げ合図。

「これから二人はまた眠るんだろうな。俺は作業の続きをするわけだが

「えっと……俺もつこくよ。一人こなじへ

なんとなく居心地が悪く感じ、早々と退散を決め込むこととする。

手をあげてドアノブを回そうとしたところで、腕を引っ張られる感覚。ついで誰かの胸に顔が当たる感触を感じた。

「えっと……フロイト？ その……胸が当たってるんだけど？」

「当てるの。まったく……俊はすぐ思いつめるんだから。俊の悪い癖だよ、それ

「やうはこつても……俺の責任なんだし」

そこまでこつたといふドアノブがされた。地味にうまくて痛い

「違うでしょ。“私達”的だよ。もつと頼ってみ、私とののはを」

いつもは息子が起きるはずなのに、いつも起きに限つて起きれない。ほんと拗ねてるよな、こいつ。

ほんとうにいつも通りバカをやりたいのに、作業で疲れて元気がでない

だから、首を縦にも横にも振らなかつた。

その後、なのははトイヴィオが帰つてくるまでフェイント俺はこの状態のままでいたのだった。

26・聖水（後書き）

ふろ場でサマーソルトはかなり難しいと思つ。

## 27・ターニングポイント

「できた……！」

長かつた夜も終え、ついにヴィヴィオの服が完成した。個人的にはなかなかの出来なので、いまからこれをヴィヴィオが着てくれると思つとなんだか頬の緩みが止まらない。

さて、三人が起きてくるまで1時間ちょっとくらい。朝食の用意をしてしまっておこな。

味噌汁を作っていると、一階からトントンと階段を踏む音が三人分聞こえてくる。

『おつはよー！』

「うーー、おはよー。あれからよく眠れた？」

「ぱりちつぱりちつー！」

「ぱりちつぱりちつー！」

なのはの／＼サインに合わせて、ヴィヴィオも／＼サインを作る。なんだか一人とも一気に距離を詰めたな。「うらやましい。なん

「それじゃ、顔洗つてちょ。もうすぐできるから」

『はーい!』

三人娘の姦しい姫様たちは今日も元気なようである。

そんな三人を見送つて、俺は最後の仕上げにとりかかつた。

いつもの三人の光景にもう一人小さい姿が加わった。 いうまでもなくヴィヴィオである。 ヴィヴィオはその小さい体を一生懸命使つて必死に味噌汁の中にいたうどんを食べようとしている。 ヴィヴィオがうどんを掴むと、うどんはそれをあざ笑うかのようにブツリと音をたてて箸から離れる。

「あう……」

「頑張つて、ヴィヴィオ。 優しくだよ、優しく」

「大丈夫、ヴィヴィオならできるから!」

両側にいるフェイトとなのはが必死に声援を送る。 ヴィヴィオはそれに頷いて、優しくそつと両手で水をすくつように掴みあげ、その大きく開けた口でうどんをすすつた。

「うまいか? ヴィヴィオ」

「うんー。」

それはよかつた。

両側にいる一人もパチパチと拍手を送る。ヴィヴィオは照れ隠しのつもりなのか、フェイトやなのはの手をしきりに握んでは離す。といった謎の行動をしていたりする。子どもって見とくと面白いよな。

そうしてにぎやかな朝は過ぎていった。

朝食を食べたあとは、仕事にいくなのはとフェイトを一人で見送ることにする。

俺が作つた弁当を手に二人は元気よく手を振つてくる。

「「いつてきまーすー！」」

「「いつてらつしゃーーいー！」」

俺とヴィヴィオもそれに負けじと手を振り返す。世間一般的にこの立ち位置が逆のようを感じるのだが、そんなこと俺には関係ないことだ。というか、無職の俺が元気に外に出ると大抵おっさんと追いかけっこになるのでいただけない。いまはヴィヴィオだつているわけだし。

「さて、ヴィヴィオ。君にプレゼントがあるー。」

「ほえ？ なうに？」

寝間着として渡した予備のメイド服を現在は着ているヴィヴィオだが、流石に『近所さんから変な田でみられそうだし、ヴィヴィオにはまだコスプレとか教えるのは違うよつた氣がする。もつ少ししてからのほうがいい……かな。そいらくんはスカさんと相談でもしよう。

「まあまあ、それは見てからのお楽しみであ～る。わわ、家に戻るわ！」

ヴィヴィオの背中を抱きながら、俺は『そいつと一緒に家に戻るのであつた。

「あ、おかあさん？ うん、なのはだけど」

『あら、この時間に電話なんて珍しい……ひとでわなかつたわ。お仕事はどうしたの？』

「ふつふつふ……むちゅん、サボつてゐ

このドヤ顔を並行世界の高町なのはが見たら頭を抱えるかもしだい。

『ダメよ～。お仕事はちゃんとしないと。それで、あくまばどうしたの？ そろそろ海鷗に帰つてくる頃だつたかしり～。』

「うーん、それは少し延期かな。 ちょっと色々とバタバタしてて」

『へへ。 なにかあったの?』

「うふ。 子どもを預かつてね」

そこまで言つて、なのはは昨日三人で決めたことを思い出す。 その内容は 時期をみて両親に話す といふことであった。 そして今日は、預かつて一回目。

いへりなんでも早すぎる。

そのことを思い出したなのはだが時既に遅し。

『へへ、どんな子かしら? 教育的には大丈夫? 彼がへんなことしない?』

既にマシンガンのように喋りだした母を止められることはできなかつた。

30分後

そこには茫然とした表情でトップをかじっているなのはの姿があつた。

そこに沈んだ様子で、フロイトがなのはを訪ねてやつてきたのだが

「ああ、なのはもなんだ……」

「……うん。どうしようつか……」

素直な二人には隠し事は難しいようである。

一方その頃、ひょっとこはといつと

「なあひょっとこ。近所の通報で此処で夜中小さこ子の叫び声が聞こえたらしいのだが……」

「塩でも喰らえ!」

「ちよつー? お前、逮捕するぞ!」

安定の下種であった。

玄関の前で押し問答ともつかない、わけのわからないことを5分ほど繰り広げている。

ヴィヴィオを一人にしていいのか? そう疑問を覚えるかもしれないが、様子を見に来たウーノがヴィヴィオのそばにいるのとそこは安心である。

「そんなことないってば。だいたい、俺が家にはいるんだぜ?」

「だからこそ警戒してるんだ」

「あ～、それはわかるかも。 とにかく……仮に家に小町こそ遊びにいたらどうするの？」

「お前を逮捕するかな」

ギラリと光るおっさん。 その瞳にひょっとして汗を流す。

……あかん。 いいで、ハイハイオガ出でました。

「ねえねえ！ ウーノがこの服かわいいってよー。」

玄関から勢いよく飛びつぐ、ハイハイオ。

「おひやさん……言こと説をさせてくれ」

「とつあえず手錠かけてからな」

手早く右手に手錠をかけ、近くの鉄柵にもう一方をかけたおっさんは指を鳴らしながらひょっとこの話を聞き始めた。

ちなみにハイハイオは

「ウーノ！ あかん！」

れつやとウーノのところに遊びにこくのだった。

俺の話を聞き終えたおっさんは、俺を怒るわけでもなく顎に手を当てて考えはじめた。 こつもはフルボツ口にしてから考えるのじ、

「」の逆順序は珍しい。

「どしたの、おっさん

「いや、お前らだけで大丈夫かなと思つてな」

「大丈夫大丈夫。きつとづまくしてみせるさ。なんたって、預かっている身なんだからね。責任重大だし」

頭をかきながら、肩をすくめてみせる。細心の注意を払っているつもりだ。なにも問題はないはず。

だけどおっさんは、そんな俺の頭に思いつきりゲンコツを落とした。

「こつこつー？ なにすんだよ、おっさん！？」

睨む俺に対して、おっさんはそれよりも怖い顔で睨み返してくれる。

「ばかもん。そんな“預かっている”なんて感覚捨てる。いいか？此処の家にいる間はお前たちが親みたいなもんだ。絶対にその子の目の前で、“預かっている”なんて口にだすなよ？」

「……うん。『めんなさい』

おっさんは俺の返答に満足したのか、うんうんと首を縦に何回も振る。

「やついたえば……今日は非番の日だつたよな。丁度暇だし、俺がお前に子育ての極意を教えてやろう」

「おっさんとの子育てなんて特殊すぎてアテにならないねえよ」

「おっさんからアッパーが飛んでくる。……いつか泣かせてやるー。

「ナビ君……なんか小さじ子どもってこいよな。家が明るくなる

朝の光景をずっと見ていた俺としてはそう感じるよっぽかなかつた。ヴィヴィオが笑うこと、一人も笑う。その笑顔はとても自然で、たつた一つの笑顔だけで家中が明るくなるようなそんな錯覚に陥つた。

「ああ、子どもはこいぞー。子どもに会うだけで疲れがぶつじぶ

おっさんせうと大仰に頷く。流石既婚者、話に重みがある  
ぜ。

「それにな、子どもがいると姿勢すらかわつてくるんだよ。よく言つだら?『子どもは親の背中をみて育つ』って。あんな迷信信じるつもしないけど……ひとつしてもシャンとしてしまつんだよな、これが」

「……それほんとう?」

「ああ、本当だ」

「へへ……。あ、おっさん!」タバコ禁止だから

「まじか? すまんすまん」

「服しようとするおっさんに声をかけると、片手で謝りながらすぐ  
にポケットに戻す。

「お前、どうすんだ?」

「どうあるひで……?」

「『』がお前のターニングポイントかもしけないぞ」

おっさんは全てをわかつて居るかのように、俺に誘導尋問してくる。

「やうだな……ちょっとヴィヴィオに恥ずかしげなく魅せれるよう  
な大人になつてみようかな」

「まあ、いうのは簡単だがな。 いつとくが、お前は一般人なんて  
もんじやないからな? 世間的にいえば犯罪者だ」

「うう……! このおっさん、ズバズバと言つてくるな。

「まあ、否定しないよ。 ところができないね」

「つむ。 お前が否定したらばつとこらだつたが。 確かに  
お前は犯罪者だよ、でもな犯罪者には良い犯罪者と悪い犯罪者がい  
る」

「犯罪者に良い悪いなんてあんの?」

「わからん。 なんとなく言つてみただけだ。 でも……俺はそつ  
思つてゐる」

「ふうん……それじゃ、良い大人と悪い大人の違いは？」

「さあな。それがわかれば苦労しないぞ。良い大人がなんのかわかれど、他の奴はそのレールの上を走ればいいだけの話だからな。『良い大人がなんなのか？』それは死ぬ寸前に答えるんじゃないのか？」

確かに……そんなものなのかもしれない。

「それじゃ……ヴィヴィオに誇れるような大人になるには俺はなにすればいいと思つ？」

「とりあえず変態的なところを治せ」

「それ……俺という個性が死ぬくない？」

致命的だぞ、それ。

それを聞いたおっさんはチッチと人差し指を左右に振り、頭を振つた。正直なところ、この人差し指を折りたいです。

「バカだな、お前。頼み方つてもんがあるだろ。俺の場合嫁さんに土下座すれば大抵のことはしてくれるぞ？」

「…………たしかに、俺は頼み方つてものを心得てなかつたかもしだい」

神妙にしきりに頷くひょつとい。

正直、問題点はそこではないのだが、彼ら一人は気が付かない。

俺がどうやって頼み込もうと考えていると、横にいたおっさんが首をポキポキとならし、立ち上がった。尻についた草を呑きおとし俺のほうを向いてしゃべる

「まあ、それなりに頑張れよ。ひょっとしたらしくな」

やつ一言だけ言つておっさんは帰つて行つた。

おっさん、手錠は？

尿意がそこまでできるんだかど。

## 27・ターニングポイント（後書き）

ここから少しずつ変わってこく……かもしれないし、そうでないかも知れない。

## 28・キチガイこそが俺である

ミッド市内の大好きな一軒家の外でたつたいま19歳男性の人としての尊厳が失われつづいた。

「やばいってやばいって！ もうすぐそこまできてるぞ、尿意っ！？ ヴィヴィオが間に合わなかつたならまだわかるが、俺が間に合わないつて洒落になんねえぞつー？」

足を気持ち悪いほどにくねらせながらひょっこり叫ぶ

「だれか――！ 誰か返事してくれ――！」

10秒たつてから小さい足音が聞こえたかと思うと、玄関から俺が徹夜で作つた不思議の国のアス風衣装を身に纏つたヴィヴィオがチュッパチャップスを口にくわえたままでてきた。

「うー？ どしたの、おにいさん？」

「おおヴィヴィオ！ とりあえずチュッパチャップス食いながら走るなよ、危ないからな。まあ、それはおいといて いますぐウーノさん呼んできてくれ！」

この手錠を解除できるとしたら、それはもうウーノさんくらいしか残つてない。ヴィヴィオがなのはやフエイト並みに強ければ話は別だがそんなことありえないわけで、必然的にウーノさんになるわけ……でも俺は信じてる。ウーノさんは良心の塊だ。きっと俺を助けてくれるに違いない！

「あ、すいませんひょっとこさん。ドクターから電話がありまして……なんでも『過去に戻るマシン作り続けるのも嫌だからメダット作らうと思つんだ。ちよつと手伝ってくれないかね?』とのことなんで、すいませんがこりへんで失礼します。引き続き、ヴィヴィオのことをお願いしますね」

「まつて良心の塊さん! ? 僕のメタビーもメダフォース発射寸前なんですけど! ? ところが、暴発寸前なんですけど! ?」

「冗談じゃない! こまこの機会を逃したら、大変なことになるぞ。メダフォースでここにいたアンモニアでマカダミアなことになるぞ! ?

「すいません……がんばってください! ?

「まつてええええええええええ! ?

俺の叫びもむなしく、ウーノさんは帰つて行つた。あとに残るは隣で座りながら行儀よくチュッパチャップス(プリン味)を舐めているヴィヴィオと、制御棒の制御をしている俺だけである。とうとう俺はヴィヴィオの前に人としての尊厳とかなんとかを失つらじい。

「……いや、までよ? ヴィヴィオにピッキング道具を持ってきてもらえば、まだ勝機はあるかもしね。ヴィヴィオ! 僕の部屋からピッキングの道具を取つてくれ! あ、ついでにそのチュッパチャップスは置いてけ! 転んだら大変になるからな! ?

「うん、わかつた! ?

ヴィヴィオは立ち上がりながら、俺の口にチャップチャップスをねじ込む。いや、そこに置かなくてもいいと思つけどさ。

ヴィヴィオなりのダッシュで玄関に戻る途中

ガツ！

案の定と云うか、お約束と云うか、ヴィヴィオは進路上にあつた石に躓いてこけてしまった。

「な、泣くなヴィヴィオっ！？　お前は強い子だ！　こんなことでも泣いちやダメだ！……でもいたいの？　んじゃ、もう泣いちやえ！　おにいさんも一分後には漏らして泣いてると思つからー。」

だんだん思考がマヒしていく。もつまにもかもがどうでもよくなり……背徳感とある種の興奮で頭の中がぐるぐると、世界がぐるぐると回つているような錯覚に陥る。

すべてをぶちまけて樂にならつ　　そう思つたとき、呆れと怒りがミックスされた女性の声が耳に届いた。

「なに……してるのかな、このバカは？」

「ヴィヴィオ。泣いちやダメ。傷もそんなに痛いほどじゃないんだから、大丈夫だよ」

一人は俺の目の前で腕を組みながら「王立ちで立つてゐる高町なのは。そしてもう一人は泣いてるヴィヴィオを抱き上げてあやしているフェイト・T・ハラオウンである。

勝利の女神はいまだほほ笑んでいた。

絶望的な状況にもかかわらず、自然に息子の波状攻撃を止めることに成功する。このメダフォース、放つ場所はここではないのだ…

…！

「助けてくれなのは!? もうすゞくまざい状況なんだっ！ 僕のメタビーからメダフォースが発射されようとしている寸前なんだよ！ お前も嫌だよな、幼馴染が漏らしたところをみるなんて！？」

それまでジト目で“なにしてんだ、このバカ”みたいな眼差しでみていたなのはが『漏らす』という単語を聞いて合点がいった様子で俺のことをみてきた。どうでもいいので早く助けてください！

「べつに…？ 私は小さい頃、誰かさんに見られたしね…。あの時はとて…つても、恥ずかしかったけど…。誰かさんは笑つてたよね…？」

あ、勝利の女神が俺に中指立ててる。

「だ、誰だ…？ 僕の可愛いなのはを笑うなんて！」

「いや、勝手に恋人みたいな感じにするのやめてくれる？ まあ、それはそれとして…あのときは私も誰かさんも5歳だったよね。でもいまは19歳。この差はかなり大きいとおもうんだよな～」

なのはは俺の周辺をぐるぐると回りながら、ドジじみた顔で俺のほうをみると、こいつ…絶対楽しんでやがるな…！

「く…！ なにが望みなんだ…？ 謝罪か…？ それなら既にし

たはずだろーー？」

「えー？ ベつに私は、“君”とは一言もいってないんだけどなー。  
まあ、勝手に謝罪したければどうぞ？ それでね、私ちょっとだけ今日は失敗しちゃったの」

「失敗なんて誰にでもあるわーー。俺なんて人生が失敗続きだからなー！」

「うんうん、やっぱり失敗は誰にでもあるよね？ それじゃ、ほんの些細な失敗なんだけど……それで被害が被つたとしても怒らないよね？」

「うんうんーー 絶対に怒らないからーー。俺がなのはを怒るわけないだろーー？ だから、早く手錠を解除してくださいーー！」

「……ほんとうに怒らない？」

「本当に怒らないってばーー！」

「それじゃーー」

なのはは指を一つ鳴らす。すると、手錠は簡単にその役目を終えたかのように軽く爆発して消えてしまった。ちよつとだけ、なのはがカツコイイと思つた。

なのはともあれ、手錠を解除してもらつた俺はトイレに向かつて全カダッショ。無事にメダフォースを発射し、身も心も爽やかになつてなのはたちがいるリビングへと向かつのであつた。

「桃子ちゃん……リンディちゃん」……バレた……だと…。」

「うふ。 めかあさん凄かつたんだよ。 すぐこなのはから情報聞  
きだしたの」

「うつむだつて負けなによつ！ なのはより数分くらこ早く聞き出  
し田だからー！」

「いや、おかあさんのほうが」

「落ち着け一人ともー。 いまは俺の命のほうが優先だりー。」

「別段どうでもいいかな」

なんとかリンディちゃん。 鮮やかすゑて涙が出てくる。

「まあ、ぶつちやけ桃子さんのほうがいつも話をすればわかつて  
くれるはずなんだ。 問題は……リンディさんだよ」

「やつこえぱリンディさんにはかなり嫌われてるよな

「16歳のとき、俺とコンティさんの仲をどうにかしようと考えて、  
クロノが色々と頑張ってくれたんだけどな……俺がリンディさんの  
顔面にお茶をかけてしまって最悪の関係になってしまった」

「あの後大変だったんだよ？ 反省してるの？」

「うふ。 まさかみんなじつはロードがあるとは思わなかつたよ。

家中掃除したのに……」

嫌な思い出でも蘇ってきたのか、苦虫を一〇疊じ蟲んだよつの顔をするひょっと。」

「それより、どうするの? そのままじゃ死んじゃひょ?」

「う~む……」こまどくねと、こいつのこと諦めの境地に達してきた。もうでたとこ勝負でいいや。いまはそれよりも重大なことがあるんだから」

「「重大なこと?」」

「うん。俺さ、まともな大人になつてみよつと思つんだ」

真剣なまなざしで、なのはとフロイトを見る。二人はそんな俺の様子を見て

「フロイトちゃん。頭の病院の電話番号つてわかる?」

「ちょっとまって。いますぐ調べるかい」

とても失礼な行動をとつはじめた。

「いやいやいや、ひょとまでよ。なに? そんなに俺の発言つておかしいの?」

「おかしいどじょがじゃないよ。もしかして別人?」

タウンページを取りにいったフロイトを見送つてから、なのはが俺

に懷疑な視線を向けてきた。 大変遺憾におもいます。

「いや、俺だつてな、ちゃんと考えたんだよ？ ヴィヴィオのため  
に良い大人にならうつてさ。 それでこうやつて答えを出したわけ  
よ」

そりゃあ、俺は犯罪者ですよ？ キチガイですよ？ まったく良い  
大人とか良い犯罪者とかなるかどうかわからないけど、それでも  
俺なりに考えたわけで。

……あれ？ よく考えてみれば、俺みたいな奴が良い大人とか無理  
じゃね？

「あのねえ……良い大人にならうと思ってなれるんだつたら苦労し  
ないよ。 そもそもだよ？ 君は息を吸うように迷惑行為をしてく  
る人物でしょ？ それが良い大人になんてなれるわけないじやん」

「……それは一理あるかも」

いや、一理どおりじゃなく百理はあるかもしけん。

そもそも、よくよく考えてみれば……俺がいま述べた言葉つて一般  
人が述べるような言葉じやないか？

俺みたいな奴が述べる言葉じやないよな？

俺みたいな奴はもつと……ろくでもないようなことをするよな。

例えば日常的な覗き、盗撮。 セクハラ発言にパイタツチ。 うん、  
ざつと考えてみてもこんなところだ。 さてさて、こんなことをし

ている奴が良い大人を演じる……？

何度も何度もイメージする。想像する。

良い大人を演じてる俺。仕事をして、ヴィヴィオを養つて休日には四人で遊びにいく俺。

うん。実に良い大人だ。“世間一般的な”良い大人だよな。

……これって俺的には苦痛じゃないか？セクハラもできない、なのはやフェイトとイチャイチャもできない。仕事という檻に囲まれて好き勝手にできやしない。そんなこと、俺に耐えられるか？

答えはNOだ。そんなことできないのは、俺が一番わかっている。

おっさんがあいつように俺は犯罪者。そんな“世間一般的な”ことなんてできない。

じゃあ……どうすればいい？

「そもそも、君が良い大人になるなんて天地がひっくり返つても無駄だよ。できっこないよ」

「そもそも、君が良い大人になるなんて天地がひっくり返つても……。  
そうそう……俺が良い大人なんて天地がひっくり返つても……。  
ん？ひっくり返す？」

そのとき、俺の頭の中で一つの考えが浮かんでくる。

そうだ。俺は何を勘違いしていたんだ？俺みたいな奴が良い大

人を“演じる”なんて土台無理な話だつたんだよ。俺のよつな男にはもつとふさわしい役職があるだろ。もつとふさわしい席があるだろ。

俺は目の前にいるなのはの肩を思いつきり掴んだ。なのははそれに驚いているがいまの俺にはそんなこと関係ない！

「なのは！ 俺、ヴィヴィオの反面教師になるよ！」

「……へ？」

「そうだ！ そうだよ！ 俺が良い大人なんてできるわけないだろ？ 俺にふさわしいのは悪い大人だよ！ だつて俺は息を吸うように迷惑行為を行う人間なんだぜ！？ これ以上、ふさわしい奴なんて次元世界中探してもいいぞ！」

「良い大人を演じるんじゃない！ 悪い大人を演じるんじゃない！ いつも通りに行動して、そんな俺のいつも通りをヴィヴィオに見てもらうんだ！ なのはは言つたよな？ 俺は息を吸うように迷惑行為をする男だつて？ だつたら、それを実際にやればいいんだよ！ 良い大人じゃなくて、ミッドで一番の迷惑野郎を思う存分みせつけてやればいいんだよ！」

これはいわば発想の逆転だ。成 堂龍一もビックリだよ！

いい大人なんかになれはしないけど、悪い大人なら演じるまでもない！ だつて、それが通常時の俺なんだから！

「あーっはっはっはっはっはー！ あーはっはっはっはっはっはっはっはっはっはー！」

「ど、どひしたの……いきなり笑つたりして……！？」

「これが笑わずにいられるかっ！？ 僕は肝心なことを忘れていたんだよ！ 僕がヴィヴィオを良い方向に導くつ！？ はつ！ バカも休み休み言えつてもんだろ！ 僕の近くには、こんなにも立派な人間がいるんだぜ、それに一人も！ 管理局に勤めて、人々の平和を守る、そんな立派で愛嬌のある主人公気質な奴が一人もいるんだ！ 僕はなにか勘違いしてたよ！ 僕がヴィヴィオを良い方向に導くんじゃない！ なのはとフェイトが良い方向に導くんだ！ 僕はいつも通りに生活するだけでいい！ それだけでヴィヴィオは立派になつていくんだからな！」

おっさんは言った。

『子どもは親の背中みて育つ』と。それはなにも良いところばかり魅せるのではないではないのか？ 逆に悪いところをみせれば魅せるだけ、子は『こうはなりたくない』そう思つて自分とは違う方向を歩むのではないだろうか？ 仮にヴィヴィオがそうだとしたのなら……ヴィヴィオは僕の背中みて『こうはなりたくない』と思、自然になのはとフェイトの道を歩んでいく。僕が惚れた人達の方向へまっすぐに歩いていく。何も心配なんてしない。だって、その両側にはなのはとフェイトがいるんだから。

「主人公なんてやめだやめだ！！ そんなちっちゃえ器に僕が收まるわけないだろ！ 僕は誰の息子だ！？ あの世界中を爆笑の渦に巻き込む、上矢かみや一はじめの息子だ！？ ろくでもねえ男の息子だろ！？ このろくでなさはDNAにまで染みついて離れねえだ！ だつたら、俺だつてろくでなく生きようじやなねえか、ヴィヴィオに見せつけようじやねえか！ 下種を見せつけようじやねえか！ 僕が

ちゅうとだけ眞面目になればシリアスになるんだからよー。」

俺の中で何かが吹っ切れる。 葛藤とか、責任とかそんなすべても  
のが泡と消える。

俺はただただ笑い転げる。

なのはがオロオロするのを尻田に笑い転げる。

何事かとフェイトとヴィヴィオが来るのを見ながら笑い転げる。

そして一緒になつてヴィヴィオも笑い転げる。

「これは 俺こと、ひょっとこが 悲劇 深刻劇 哀話 悲話  
悲運 不幸 などなどを無かつたことにしてお送りする 非日常が  
日常的な 喜劇 気楽 喜話 幸運 幸福 な物語である。」

さて、キチガイによる物語 とくとじ覧あれ

## 28・キチガイこそが俺である（後書き）

長かった序章もこれで終わりです。ノンストップでここまでくることができてよかったです。

さて パン通 スタート！

## 29・ギャラドスでもわかるリリカル昔話

前回までのあらすじ

19歳無職が幼馴染たちとミッドで暮らしてると、友人から一人の女の子を預かることに。その女の子のために眞面目に良い大人になろうと努力する無職。しかしそんなことできるはずもなく、良い大人は幼馴染たちに任せ、自分は一人だけ好き勝手にするのであった。

「ねえねえ、むーじゅんつてな～に～？」

「ほえ？ むーじゅん？」

リビングで彼から借りたマンガを読んでいると、彼の部屋で遊んでいたヴィヴィオが2階から降りてきて私の足に飛びつきながら質問してきた。聞き返す間に膝に登つて正面向きで座るヴィヴィオ。

「ねえ、フュイトちゃん。むーじゅん、つて誰？」

「え～っと……ムー大陸の兵士の名前……とか？」

そんな一個人はさすがの私でも特定できないんだけど。

「ねえねえ、なのはママ、フュイトママ、むーじゅんつてどういっこと？」

『えへへつと……』

頭だけ私とフロイトちゃんの方向に向きながら首をかしげて聞いてくるヴィヴィオ。私も首をかしげたい気分です。いや、本当にむーじゅんさんって誰なの？

「むーじゅん、じゃなくて矛盾な。ほい、高校のとき勉強しただろ？」

「あ、なんだ。矛盾のことね。一個人のことを聞かれてるのかと思つてビックリしちゃつたよ」

2階から降りてきた彼がゲーム機をもちながら台所へ向かう。冷蔵庫からリンクゴジュースを取り出しコップに4つ分注ぐと私たちに渡しながら椅子に座る。…………といふで、いまのどつやつたの？

「ヴィヴィオと弁護士が主人公のゲームしてたんだけじゃ。なんか色々と気に入つたみたいで」

「むーじゅん！　なのはママはむーじゅんします！」

「ど、まあさつきからこんな感じなんだよな。描かずヴィヴィオカワコス。パソコンの中にヴィヴィオフルダ作つといてよかつたぜ」

彼の戯言はいいとして……うーん、ヴィヴィオも色々と影響を受ける年じゅうだしね。私としてはあまり彼の近くにいてほしくないんだけど……。

「ヒーリング、ヴィヴィオ。私のビジが矛盾してるのかな~?」

「なのはママねーじゅそしてるの~.~.~」

「ふふんっ。いい、ヴィヴィオ。ナリコのほね、証拠品がな  
いと意味ないんだよ~?」

「……しょーこーひん?」

「ヴィヴィオが首を60°傾けて、頭にマークを浮かべる。  
ちゅうとだけからかいつかなか。

「さうだよ~。証拠品がなことヴィヴィオが言つてない?」  
も意味ないの

「でも、おこたさんがなのはママねーじゅそしてるって

……カレガ?

「えつ!~? 『私はふるの~.~.~』  
「フロイト裁判!~! の証拠品をへだてた!~!」

ヴィヴィオと田を合わせている隙に、彼はフロイトちゃんに向かを  
差し出した。……ちゅうとまついて、あれって

「これで、高町なのはの部屋から押収したブランです」

「……で?」

「気付かないんですか？ フェイト裁判長。 それ、明らかに矛盾してるんですよ。 高町なのはのサイズと。 いいですか？ 本来高町なのはのサイズはそれよりももう少しダウンします。 それなのに、彼女は見栄を張つて一段階アップしたブラを引出の中にいれていだ。 それも、奥深くにですよ？ これが意味すること、それはなのはさん俺の下半身と上半身が分離するからあつい抱擁は勘弁してくださいいいいいいい！」

「対象ヲ……殲滅スル……」

「ヴィヴィヴィオ～、こいつおいで～」

上半身と下半身の中心に拳を叩き込み、そこからねじ切るように抱きつくなのは。 それに悲鳴をあげながらタップするひょっこり。 そんな現場にいるにもかかわらず、一人で仲良くリンクゴジュースを飲んでるフェイトとヴィヴィオ。

今日も彼らは平和に過ごしているようだ。

「それで……矛盾の説明だつたな。 そもそも、二人とも矛盾の由来つて覚えてる？」

「高校のとき、誰かさんのせいで授業が口クにできなかつた記憶しかないんだけど」

「右に同じ」

「高校のとき楽しかったよな。教科担当の先生巻き込んでウノしたり、ポーカー大会やつたりして」

「ポーカージャアリサちゃん化け物並みの強さを誇つてたよね。君が負けたくらいだし」

「……いまだつたら勝てるぞ」

珍しく彼の頬を膨れる。まつたく……負けず嫌いで子どもなんだから。まあ、勝率としては彼よりアリサちゃんが圧勝だったから気持ちはわからなくなるけど。

「けど、ヴィヴィオに矛盾の由来を教えるのは難しいんじゃないかな？ 5歳だよ？」

フェイトちゃんが手をあげながら話す。うん、確かに難しいよね。なのはだつてチンパンカンパンだつたんだから。

彼はフェイトちゃんの疑問にどこからか持つてきた伊達メガネをかけ、軽く笑つたあとに人差し指を立て

「(+)で俺の登場ですよ。ギャラドスでもわかるリリカル昔話でヴィヴィオに説明しようと思つ」

あれ……？ ちよ～～つと、不思議な単語ができただけど。

頬がヒクツと動くのがわかる が、ここは我慢することに。そんな私の心境など知らずに彼はヴィヴィオに絵本を読み聞かせる要領で話しあじめたのだった。

むかしむかし、大きな大きな大陸に大陸全土を支配しているといつても過言ではない国がありました。その国の名は、パン・ツヌイダと呼ばれる国で男女比 4 : 6。きれいな水においしい空気、あふれる木々に穏やかな気候。とてもとても過ごしやすい国です。王様の名前は、ひょつとこ王。とってもカッコイイ王様でモテモテで毎晩毎晩給仕の者とアバンチュールな一夜を過ごすナイスガイがありました。

王の右腕と呼ばれる女が王に唐突にいました。

「なあ、王様。うち、胸をおつきくしたいんやけど……」

「諦める」

女は仕事をする王様の背後にまわり、バックドロップをきめます。

「すいません。調子こいてました。まじすんません。ちょっと王様の役割になつたくらいで調子こいてました」

土下座でペコペコと謝るひょつとこ王。なんとも弱い王様である。

「つむきにしてるんやで。やっぱ女の子は胸が大事やし。生命力といつてもいいくらいや」

「んじゃお前もつすぐ死ぬな。ヤハビリが早いかぐばッ！？」

「」んじゃつたら歯折るで」

王様の側頭部に回し蹴りをきめる女性は、痙攣する王様を尻田に兵に命令しました。

「ほな、その商人とやらを呼んでもええで。王様の了承はとれたみたいやし」

「いや……せはやて……じゃなくて、はやーて様。それって了承とつたところですか?」

「ちゃんととつてるで。なあ、王様?」

「……もひ、好きにしてください」

いじけてポケットから携帯ゲーム機を取り出すひょっとこ王。

「よーし、それじゃ了承もとれたし……その商人を王間に通すんや!」

ノリノリなはやーてに溜息をつきながら、兵士は商人を通すのであつた。

「あーはいはい、商人ね、商人。ぶっちゃけどいつもくなつてきたから早めに済ませよつぜ」

玉座に座りながらも、めちゃくちゃやる気がなくなつた王様はどうでもよさそうに、兵士に銘じて商人を自分の前に登場させることに

した。

右側に口りつ子の兵士を、左側にポーネテールの兵士が付き従うな  
が、二人の商人が王様の前に片膝をつきながら話し始めた。

「お会いできて光栄至極にござります。私の名前は、ギャラドス  
なのはと……ギャラドスなのはあれ？ ちょっととお！ ギャラ  
ドスって言おうとするがギャラドスに変換にされるんだけど！ どうなつてるの！」「れ！」

「お、おちついてなのは！ 王様の前だよ！？ えっと、失礼しま  
した。私の名前は、フェイソンと申します。……フェイソンと  
……フェイソン……もうフェイソンでいいです」

栗色の髪をツインテールした女性、ギャラドスは一人で空中にむか  
つて抗議をしあげ、金髪のツインテールの女性、フェイソンはす  
でに悟りをひらいたように事務的な目をしていた。

そんな二人を目の前にして、はやーてが一歩前にでて軽やかな笑顔  
を浮かべる。

「まあまあ、うちの王様のすっかりやる気なくしたみたいやし

「商人、スリーサイズと愛用のパジャマ、シャンプーと石鹼のメー  
カーにパンツの色とシミの数、周期はどれくらいで訪れるのかを原  
稿用紙10枚で書いてくること」

「お前だまつとれや」

「ほむッ！？」

王様の顔面にためらいなく膝蹴りをするはやーて。 鼻血で床が汚れるが、おつきの者も慣れているのかほんわかおつとりした女性、シャ・マールがモップをもって床に落ちた血を拭きはじめる。 それを横田にはやーては話す。

「ほんと、きょうはどんな要件できたん？ 商人なんやろ？」

はやーての声にフュイソンは答える。 すでに一人ともちやんと姿勢を正しているところをみると、根は眞面目なのかもしねない。

「今日は私たちの国に伝わる最強のバストゥロップラを是非王様にお見せしたく馳せ参じた次第です」

恭しく頭を下げるフュイソン。

「いや、そんなことどうでもいいから君のパンツが現在シミを作っているのかについて小一時間ほどはなそりじゃ」

「だまつとれ言つたやろー！」

ゴキッと肩を脱臼させるはやーて。 王様はあまりの痛さに床を転がり、シャ・マールが置いたバケツをひっくり返す。 シャ・マールはここに笑顔でひょっこり王の顔面をモップで綺麗に磨いていく。

「ふむう……個人的にそのバストゥロップラはきになるな。 どんなものなんや？」

「はい、既に私達は一人とも身に着けております」

『おい、それって……もしかしたら合法的にあの一人のアレをみれるんじゃないのか?』

「よどよどよ……そわざわ……と王間が揺れる。

「おひつくなやッ! アホビモ! うちかとブラは着けとんで! うちかで美少女やないか!」

『…………』

「なんで黙るツ! ?」

「ひつじめー! 無乳ー! 」

「ぶちのぬす! オ前だけはぶちのぬす! 」

シャ・マールによつてきれいに磨かれたひょつとい王は、男兵士たちの集まりの中へ紛れ込みながらはやーてに向けて禁句を叫ぶ。

追いかかるせやーて! 逃げるひょつとい王。

突如現れた魔法の糸に足を絡め捕られ転ぶひょつとい王は、はやーては馬乗りになつて顔面を中心につつていぐ。その表情はもはや機械的で思わず男衆が3歩さがるほどであった。

やがて満足したのか、はやーては顔についた血を拭きながらフロイソンに改めて話す。

「それじゃ、いま一人とも最強のバストロップはつけとこう

ことか。……うへん、確かにうちより胸が大きいし、これは買いかもしれへんや」

「まつた！」

思案顔のはやーての後ろにいたひょっとこ王が部屋全体に震えるほどの声で叫んだ。ひょっとこ王は鼻血を垂らしながら、立ち上がりフェイソンをまっすぐみつめる。

「ちょっとまつてほしい。 フェイソン」

「は、はい。 ……なんですか？」

「一ついいかね。 その最強のバストゥロブリは、どれくらい最強なんだ？」

射るような視線でフェイソンを見るひょっとこ王。 その視線にたじろぎながらもフェイソンは答える。

「えーっと……私の見た目どおり、大陸で一番大きくなります」

「……それは誰にでも効果があるのか？」

「はい、間違いなく」

フェイソンの答えを聞いてひょっとこ王は肩をすくめる。

「ふう……。 それは嘘だな。 だって 大陸一の大きさになるのなら、横の女性も君ぐらいの大きさになつてなきやおかしいじゃないか！」

「……ッ！？ セ、それは……！ たまたまこの女性の胸がブリをつけてもかわらないだけで……！」

「ねえ、フロイトちゃん。 もちろん『冗談だよね？ ほんとうはそんなこと思ってないよね？ どうしていつもこういつときなのはに攻撃が集中砲火で飛んでくるの？』

「異議あり！－！ フロイソン、それはおかしいよ。 君は先ほどこの証言したじゃないか。『間違いなく、大陸一の巨乳になれます』と－！」

フロイソンに向かつて指をすひょっといH。

「……ぐッ－！」

「ああ、君はこれをどう説明するんだい？ 無乳であるはやーてに夢をもたせて罪は重いぞ？」

『ひょっといH王が恰好よくみえるぞ……、流石王様だな……』

『でも、はやーて様が釘バットもつて素振りはじめたぞ……』

『…………そりがひょっといH』

男衆がざわめく中、フロイソンは一言つぶやいた。

“私の負けですね……” と。

「うつて世の中に一つの言葉がうまれた。」

「と、まあこんなもんかな。 つて、どうしたの？ 一人とも。  
すん」い微妙な顔してるとぞ

「いや……そりや微妙な顔にもなるよ。 なに、この茶番」

「いやいや、これはあくまで昔のお話しだから俺たちとは一切関係  
ないよ。 や、本当にだつてば」

必死で首を横に振るひよつと」。

それでも一人の顔はキツく、二つの間にか膝に座っていたヴィヴィ  
オはとても楽しそうに二口二口と笑いながら指さすのであった。

「おにこさんに異議あつー！」

29・ギャラドスでもわかるリリカル昔話（後書き）

正直、なにやりたかったんだろう。書き終わった後に思いました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6663y/>

---

パンツ脱いだら通報された

2011年12月17日22時50分発行